
突然の彼女

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然の彼女

【Nコード】

N4604B

【作者名】

ヒロヒト. JJ

【あらすじ】

気弱な性格の上に、見た目においても全くモテる要素の見当たらない主人公・森田卓がある日突然、ピカイチ超美人に一目ぼれされるところから始まる物語。森田卓の日記から始まるこのストーリーだが、彼女・須藤ゆりかの日記と交互に併用して進行してゆくのも特徴である。そして根本的な謎もいくつか秘めながら、軽快なコメディタッチで話は進行して行く。

第1話〜15話

第1話 たなぼた

●もりたすぐる森田卓の手記より

それは突然の出来事だった。

僕は同僚から合コンの人数合わせのために仕方なく呼ばれた。そんなことくらいわかってはいたが、誘われると断れない性格というか・・・はつきり言うに僕は気が弱いんだと思う。

この日だって時間ギリギリになってから現場に呼ばれたのに、遅刻の常習犯のように非難された。

「森田、おっせえよ！時間にルーズだと女の子に嫌われるぞ！」

すぐる「卓、また遅れたのかあ。しょーもねえ奴だなあ。」

「ご・・・ごめん。ははは。」

としか言えない自分が情けない。

たぶん気のせいではないだろうが、女の子の視線が冷たいように感じた。

たしかに僕は全然カッコ良くないし、スーツもこの1着しかなくてヨレヨレだ。そんな男が遅刻したのだから印象が良いはずはないでも自己分析としては、映画化になった電車男よりはマシな格好なんじゃないかなあ・・・と思っているんだけど。。

「森田、遅れたお詫びにお前が乾杯の音頭とれ！」

「ええ？僕はちよつと・・・」

「形式的なもんだ。簡単でいいから。」

これは同僚の嫌がらせだ。僕が人前で話すことが得意じゃないの

を知っているながらこんなことをさせるんだ。

「ささ、早く。料理も冷めちゃうぞ!」

「あ・・・じゃその・・・えと・・・みなさん・・・乾杯!」

(ノ|ω|) ノバタ

(ノ|_|) ノコケツ!!

「それだけかよっ!」

「みじかっ!!」

そんなこと言われてもどうしようもない。思いつかないんだから。

「卓も一気に飲めよ。」

「僕が飲めないの・・・知ってるだろ?」

「乾杯のときくらい飲むもんだって。盛り上がらないじゃんか。」

別に盛り上がらなくたっていいのに・・・と僕は思っているが口に出すなんてことはもちろんできない。

緊張症の僕にとって合コンは試練だ。地獄に近い。

生まれてこの方27年、彼女歴がないのが災いしてるんだろうか?とにかくこの緊張をほぐすためにも、酒は飲んだ方がいいかもしれない。

僕は乾杯したビールを一気に喉の奥へ押しやった。

「んぐっ・・・うっ! ブホオオオ!!」

僕はビールを一気に流し込んだ勢いで、むせてビールを吐き出してしまった。

「ああああああ~~~~・・・!!」

一同みんな、啞然とする。

僕の正面に座っていた女性の服にモロかかってしまったのだ。

しかも見た感じ、今日集まった女の子の中では1番可愛い。

「おいおい、森田何やってんだ! ったくよ!」

女性陣からも、痛いほどの視線が刺さる。

「す、すいません。。今拭きますから。。」

僕は慌てて相手側に走って周り、自分のハンカチでその彼女の服を拭こうとした。

「あっ・・・」と彼女は小声で叫んだ。

「森田！お前ってほんとバカなのか大胆なのか・・・」

「え？」

「ハンカチ手渡してやればいいじゃんか！何でお前が彼女の胸触りながら拭いてんだよ！！」

「うわっ！しまった！全然そんなこと気づかなかったもんです、すいません。。」

彼女の友達の女性が言った。

「しかもそのハンカチ、あなたがさっき自分の汗を拭いてたやつね？」

「あ・・・あ・・・いやあの・・・これは・・・ちょっと失礼します。」

僕は顔から火の出る恥ずかしさで、この場を離れてひとまずトイレに非難するしかなかった。

「εー（；ーωーA フウ：参ったなこりゃ。。」

そこへ同僚の青木が入ってきた。

「卓、早く来いよ。」

「僕なんか、仕方なく呼ばなくても良かったのに・・・」

「ん？それは全然違うぞ卓。俺たちはいいつもお前が必要なんだ。」

「え？本当に？本当にそう思ってるの？」

「そうさ。お前がいないと俺たちが引き立たないじゃん。ウヒヤヒヤ（≡▽≡）ノノノ☆バシバシ 待ってるから早く来てもっとマジなところを見せてくれや！」

「。。。。。」

そういう残して青木は席に戻って行った。

なるほど・・・そういうことだったのか。。気づかなかった僕がバカだった。

その後、僕は何とか冷静さを取り戻して男子トイレから出たところを、さっきビールをかけてしまった彼女と出くわした。

「あ、さきほどは・・・本当にすみませんでした。お詫びのしようありません。クリーニング代は僕が・・・」

「ううん、いいのそんなちっちゃなこと。で、話があるから待ってただけど。」

「え？僕に？」

「そうよ。ここにあなたの他誰もいないでしょ。」

「はあ・・・」

「森田さんて言ったわよね？」

「はい・・・」

「あたしと付き合って！お願い！ね、ね、いいでしょ？」

「は？・・・な、な、ななんなんですか？」

「だって森田さん、あたしのタイプにビンゴなんだもん。」

「そ、そ、そそれは・・・」

「一目ぼれって、こういうことを言うもんなのね。ダメ？森田さん。」

「ダメもいいも何も・・・」

「じやいいのね？」

「はあ・・・あなたがよろしかったら。。」

「決まりっ！じや明日またデートしようね！日曜だから休みですよ？」

「は、はい。」

「じやあたしのメアド教えるね。××××@・・・」

とても信じられない出来事が起こった。

僕に突然、彼女ができた。

でも先行きに一抹の不安。。。

第2話 これってときめき？

●須藤ゆりかの手記より

今日の合コンは最高だったなあ (O^ー^O) ウフッ
あんまり期待してなかったのに、あんなに印象に残る人と巡り逢えたなんて。。。やっぱりあのカウンセラーのおかげだわ。

合コンから帰宅したあたしは、彼と出逢った瞬間を改めて思い出して余韻に浸っている。あたしが彼を最初見たときって。。。

そのとき、合コンで一緒だった友達の翔子から携帯に着信があった。

「はーい！どしたの？翔子。」

「ゆりかあんた、今日かなり酔ってた？」

「んー。。普通かな？」

「アタシびっくりしたわよ。ゆりかがあの1番ブサイクな男にアタックするなんてさー。何かの気の迷い？」

「そう言われるとたしかにイケメンじゃないわねw」

「でしょ？わかってるじゃない。ゆりかの元彼もその前の彼も知ってるけど、レベルが違いすぎるじゃないの。」

「でも・・好きになっちゃったんだもん。」

「どうしてよ？顔も悪いしオドオドしてて男らしくもなかったのに？」

「うん。でもハンカチで拭いてくれたよ彼。」

「あのきったないハンカチでしょ？アタシにあんなことしたらぶっ飛ばしてやったわよ！ねえゆりか、一体どうしちゃったのよ？」

「そんなこと言われても。。あたしは素直に彼が好きに・・」

「初対面でろくに知らないのに、どこに好きになる要素があるの？」

「やさしさ・・・かな？」

「（ノ―ω）ノバタ 理解できないわ。」

「そう？」

「だってさ、彼が遅れて入って来た瞬間、見るからにキモかったじゃない？ そう思わなかった？ ゆりかはいきなり素敵だと思ったの？」

「そうそれ！ あたしも今、翔子から着信来る前にそれを思い出そうとしてたのよ。」

「ふうん。。で、思い出した？」

「うん。言われてみれば最初はあたしも・・・彼がキモいって思ってたような・・・」

「ならなんで好きになるのよ！ ハンカチで拭いてくれたくらいで！ 彼に同情したの？」

「いいえ全然。」

「あ、わかった！ ゆりかSっぽいところあるから、M男くん欲しかったんだ？」

「誰がSよっ！ あたしはMですっ！・・・って何言わせるの翔子っ！」

「（*≧m≦*）ププツ まあいわ。ゆりかも明日になったら酔いも覚めて気の迷いだったって気づくかもしれないしね。」

「そうなのかなあ・・・」

「じゃ、おやすみー。」

翔子との携帯会話が終った。

あたし・・・ほんとに気の迷いなのかなあ・・・？

確かにあたしが今まで付き合った人とは違うタイプだけど・・・

だから逆に真新しさを求めちゃったのかしら？ ww

あたしは自分で勝手にそう解釈すると、つい可笑しくなって噴出

してしまった。

明日のデートはどこ行こっかなあ。。。

第3話 初デートの行方

●森田卓の手記より
もりたすぐる

いきなり決まった今日のデート。

僕は一睡もできなかった。恥ずかしながらこの年までデートの経験すらないわけだし、人の経験も聞いたことがないから誰にも教えてもらえない。

あ、そうだ。金がいるんだ！おごってやるくらいは僕だって知ってるさ。先にお金おろしておかないと。

んで、えと・・待ち合わせは正午だから・・ランチから始めた方がいいのかなあ？それとも少しドライブしてからがいいのかなあ？そしてそのあとはどうすればいいんだろう？どこへ連れて行ったら女の子は喜ぶんだろう？競馬場？競艇？いやそれはマズイだろう。遊園地？初デートでいきなり一緒に観覧車とか乗ったら嫌われないかなあ？映画館入ったら何か魂胆があるって思われないかなあ？うーん、悩むうううー！！

悩んだところで時間は待ってくれない。

僕は緊張のあまり家のトイレを何回も往復したあげく、着ていく服も決めかねて、悩み抜いた結果、結局いっちょうらのスーツにしかただけだった。

「ヤバイ！時間だ。急がないと。もういっぺんトイレに入ってから行こう。」

僕是要領がすごく悪い。待ち合わせ場所は人が1番行きかうア

ケードの繁華街。そんなところに自家用車で行っても駐車場があるはずもない。

僕は1キロほど離れた場所の駐車場に車を停め、現場まで走りまわった。

途中、携帯番号を交換した彼女から電話がかかってきた。

「森田さん？今どこ？」

「あ・・ごめ、ごめんなさい。い、今・・走ってます。間もなく着きますから。」

「そう。じゃ待ってるね。」

いきなり初回から遅刻なんて僕も大バカ野郎だ。

僕は息を切らしながら、立って待っていた彼女のそばにたどり着いた。

「ハア・・ハア・・すいません・・ゼエゼエ・・」

「すごおい、森田さん汗だく。ふいたげる。」

「あ・・」

彼女は自分のハンカチを取り出し僕の顔を手際よく拭いてくれた。

「あ、ああああありがとうございます。須藤さんのハンカチ汚してしまって申し訳ないです。」

「ううん。いいの。これでおあいこでしょ！」

「は、はあ。。」

「これからどうする？森田さん。」

「えと・・あの・・僕向こうに車置いてるんでドライブでもどうかと・・ハハ；へへA」

「向こうって近くにあるの？」

「いや、1キロ先なんですけど・・」

「（ノ―ω―）ノバタ」

「あ、僕がここまで車持って来ますからすぐ乗ってもらえれば駐車しなくて済みますが・・」

「あたしまたここで待たなくちゃならないの？」

「う・・それは・・」

「じゃいいわ。あたしもそこまで行くから。森田さん連れてって。」

」

全く僕って男は。。情けない。

僕と彼女が肩を並べて一緒に歩いていると、まわりがみんな振り向いた。いかにも見るからに不釣り合いなカップルが街を歩いているのが一目瞭然だからだ。

一方は背の高いスレンダーで超美形な彼女。

一方は身長が157センチしかなくて、ずんぐりむっくりの上、丸刈り頭の僕。

僕でさえ恥ずかしいのに、彼女はこんな僕と歩いて全然恥ずかしくないんだろうか？本当に僕のが好きなんだろうか？ドッキリカメラだったらショックだけど・・あり得るかもしれない。

やっと駐車場に着いた。僕は彼女のために助手席のドアを開けた。

「やっぱりやさしいのね。森田さん。」

「いえそんなこと・・」

「助手席のドアを開けてくれるなんて、普通日本人はしないわ。」

「あははは。。」なぜか笑うしかなかった。

「この軽自動車、なんか懐かしいわね？」

「ええ、もうかなり古いんです。中古で15万円買って14年目ですから。」

「すごおい！物を大事にする人なのね。」

「いえ、ただ貧乏なだけなんですけど・・」

早速ふたりで出発したものの、大変なことに気が付いた。

「今日は蒸暑いわ。クーラー入れていい？」

「あ・・・しまった！クーラー壊れてたんだった！」

「Σ—11（▽₁；）——1ええっ？」

このガラガラした太陽の下、二人とも車の中で蒸し風呂状態だった。

「早くどこかお店見つけて食事にしましょ！」

「は、はい・・・すみません。」

僕たちは近くのファミレスを見つけると、有無も言わずに速攻で店内に入った。

「ふうーっ・・・涼しい。。生き返ったわ。森田さんまた汗だくね。拭いてあげよっか？」

「いえそんな何回も・・・須藤さんに迷惑ばかりかけてるのに・・・僕がおごらせてもらいますんで好きなもの頼んで下さい。」

「（O^ー^O）ウフッ。頼もしいのね。ありがと。」

食事中、僕は手が震えながら食べていた。こんな綺麗な女性に差し向かえで見つめられながら食べるなんて・・・落ち着けるわけがない。

彼女はリラックスして僕に話しかけながら食べてはいるが、僕は緊張のあまり何を聞かれているのかもうろうとしていた。

最後のデザートに冷たいアイスを食べ、ようやく汗がひき、食事も終えて会計をしようとしたとき、またまた僕の大失敗が待っていた。

「しまったああ！お金おろしてくるの忘れたああ！！」

「お金ないの？森田さん。」

「小銭しか・・・211円。」

「（^| ^;）そりゃダメね。いいわ。あたし持ってるから。」

「・・・すみません。。。」

なんか・・・男の面目丸つぶれ。。おう（ノ≧◇≦、）のうー！！！！

「どこか涼しいところに行きたいわ。ねえ、海に連れてってくれる？」

「はい。おわびだらけですが、僕にできることなら何でもします。」

「嬉しい！」

そこから40分くらい走ると、砂浜の海岸に着いた。

さすがにデートスポットのひとつでもあるのか、他のカップルも数組来ていて、お互い寄り添って座っている人たちもいた。

「あたしたちも座らない？」

僕はドキッとした。それは願ってもいないことだけど、まだ初日にそんなに盛り上がっていいもんなのかなあ？

「さ、森田さん座って。」

「は、はい。」

彼女は先に座っていた。

と、そのときだった。

「う!!！」

「??どうしたの?森田さん。」

「あの・・・急にお腹がゴロゴロと・・・う!ヤバ。」

「急に?」

「僕・・・お腹弱いんです。。きつとさっきのアイスで・・・う・・・お腹が冷えたんだと思います。。」

「あらら。。」

「ちよつと失礼します!!！」

まわりにトイレなど見当たらなかった。僕はパニックった。もう、あの岩陰で用を足すしかない。

僕は一目散に必死で走り、岩陰に隠れると即座に用を足すことが

できた。

「はぁーっ・・・間に合った。」

ギャーッ！！！！

僕が岩陰の反対方向を見ると、そこには他のカップルがこちらを見ていて、女性が目を覆っていた。どうやら目撃されたらしい。。それを聞きつけてか、僕の彼女も近づいて来るのが岩の隙間から見えた。

「ちよっつちよっ・・・須藤さん、こっち来ないで下さい！」

「だいじょうぶー？」

「はい、何でもありませんからー。」

「わかった。ここで待ってるわ。」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・あのおく須藤さん・・・・？」

「? ? なぁに？」

「ティッシュ貸してもらえます・・・・か？」

・・・・・・・・・・・・・・・・僕って最低だ。

第4話 茶のみ友達

●須藤ゆりかの手記より

森田さんの初デートを終えた私は、翌日すかさず翔子の家に呼ばれた。

なぜか翔子は私のことをとても心配してくれているようだ。私だって子供じゃないし、それなりの判断はできるのに。。まあ、友達思いの翔子だからありがたいことなんだけどね。

翔子の家に着くと、これまた友達的美智代も来ていた。

彼女は人は悪くないんだけど、野次馬根性丸出しで、人の話になると自分の耳を3倍にも4倍にも大きくして、好奇心むき出しで話に乗ってくる。もちろん、この前の合コンにいたメンバーのひとりでもある。

美智代は私が翔子の部屋に入るや否や挨拶より先に質問してきた。早速始まったという感じかなw

「ゆりかぁ、あの生き物と初デートしたんだって?」

「生き物って・・・ちゃんとした男性よ? ww」

私もちよっと笑いながら答えてしまった。

「アタシびっくりしたわよ。ゆりかは元々積極性があるけど、まさかあの動く物体にアプローチするなんてさぁ。」

「今度は動く物体なの? ww」

「ゆりか気の迷い? それとも変わったもの好き?」

翔子が割って入った。

「もう美智代ったら、やめなさいよ。ゆりかがキレるわよ。」

「あはは・・・そうね。ほどほどにしとくわw」

「あたし今までキレたことないよ?」

「でも心配だなぁ。ゆりかヤケになってないよね?」

「翔子はいつも心配してくれるけど・・・あたし全然そんなことないよ。」

「でもさ、蒸し返すようで悪いけど以前の失恋のショックがあまりにも大きかったじゃない? だから。。。」

「そっかぁ、だからゆりかは浮気しそうにないオタッキーばい安全パイを狙ったのね?」

「美智代! ゆりかに失礼よ。」と翔子が一喝。

「ごめん。。」

「ううん。いいの。でもね、ホントのホントにそんなことないの。今の彼には、二枚目な男性には持っていない優しさがあるの。偽り

のない本当の優しさってゆうのかなあ。」

「偽りでもいいからカッコいい男性に優しくしてもらいたいわ。」

「偽りでもいいの？美智代w」

「アタシも彼氏いない歴2年になるしねえ、愛に飢えてるのお。」

「こないだの合コンの中にはタイプいなかったの？」

「いたからえっちしたけど・・・それっきり。」

「したんだ！！じゃ美智代遊ばれたんじゃないの！」

「うん。でもいいの。最近いつもこうだから。それにえっちは優しくてもそのあとのケアが優しくないもん。心には響かないわ。」

「なんか余計に寂しくなるわよ。そういうのやめたら？」

「まあ、ほどほどにしとくわwそれよりゆりかのことよ！」

また私の話に戻ってきたようだw

「で、こないだのデートは楽しかったの？ゆりか」

「うん。とっても！今まで経験したことのない面白さね。」

「面白い経験？？あの生き物、そんなに人を笑わすくらいな話術持ってたっけ？」

美智代は相変わらず、森田さんのことを人並な人間の範囲には入れてないようだ。

「いいえ。彼、いろいろドジるんだけど見てて可愛いだよw」

「ダメじゃんそれw だらしないだけでしょ？」

「だって初デートだもん。緊張するのは当たり前でしょ？」

「そりゃそうだけど・・・一体どんなドジしたの？」

「うーん・・・まず、車のエアコン壊れてたのと・・・」

「うわー、この暑い時期に最悪！」

「それはきついわね・・・」翔子がボソツと言った。

「そのあと、ごはんおごってくれるって言ってくれて。」

「おおおー！あの生き物にしてはすごいじゃない！」

「でもお金持ってくるの忘れたみたいでw」

$$\mathcal{L}_0$$

「次のデートはいつの予定なの？」

「えっ
とね。次の土曜にあたしの家に呼んでるの。」

「ええええええええええ？　？　まだ2回目のデートで早いわよおお」

！
」

「美智代の言う通りよ。オタクっぽい人って個室になると危険になっ
たりしないかしら？ まだ相手のこと何もわかってないんだから。」

「うん。だからお昼だけよ。一緒にごはん食べるの。翔子も美智代も来る？」

「お邪魔じゃなかったら行って監視しててあげるわ。美智代はどうする？」

「ああん。行きたいけど土曜は友達と約束が入ってるの。」

「そう。じゃ翔子の分も作って待ってるわね。」

「うん。ありがと。」

私は森田さんが来てくれるのを心待ちにしている。

今まで付き合った人たちとは全く違った存在の人。

でもなぜか安心できる。こんなに落ち着いた気持ちになれるのは初めて。

もう失恋はしたくないもの。

第5話
とんだお呼ばれ

●森田卓の手記より

前回のデートであれだけドジしまくった僕に、再び彼女から誘われるとは思ってもみなかった。しかも自宅に呼ばれるなんて。

ひよつとしたらこの間のドジが彼女のお父さんに知れて、こっぴどく説教されるんじゃないや、そんなの考えすぎだよなきつと。

あ、そうだ。おごってもらったお金を返さないといけないなあ。

今日も蒸し暑いからエアコンの壊れた車で行くのはやめにしよう。小雨は降っているけど、チャリでも彼女の家まではそう遠くないし。

でもなぜ彼女はこんな僕のどこを好きになったんだろう？今でも不思議でならない。やっぱりドッキリなのかなあ？どっかのTV番組の罠にハマってるんじゃないだろうか？てことは彼女は仕掛け人？彼女の家はどこかに隠しカメラが備えてあるとか？・・・うーん、考えすぎなんだろうけど、一応警戒すべきかもしれないなあ・・・。

僕は小雨の中、彼女の家に向った。このくらいの雨なら傘もいら
ない。

そうたかをくくっていたら、途中突然のどしゃ降りに襲われた。
もう全身ずぶ濡れだ。帰って着替えようか？でも道のり半分以上
来ちゃってるし、もう遅刻するわけにはいかない。このまま行こう。
服なんてすぐ乾くもんさ。ちよつとタオルさえ貸してもらえればな
んとかなる！

しかしその考えは非常に甘かった。

彼女の家まであとすぐ10mとせまったところで車に水をはねら
れた。

それも大きなドロの水溜りのど真ん中で思い切り全身にかけられ
てしまった。白いTシャツがまだら模様になっちゃ、いや、ホルスタイン
状態になってしまった。顔もはねたドロで黒人化し、別な民族のよ
うに変身してしまった。

それでも僕は機転が利かない。どうしても彼女の家に行くのに遅
刻してはマズイと思っていた僕は、なりふり構わず、玄関前までた
どり着いた。

そしてチャイムを鳴らす。

「はい、森田さんでしょ？」

「は、はい・・・」

「鍵開いてるよ。入って。」

僕は遠慮がちにそうっとドアを開けた。こんなきれいな玄関に泥だらけの僕が入り込もうとしている。

「須藤さんすいませんけど・・・タオル貸し手もらえませんか？」

彼女は僕の姿を見た瞬間、体が固まっていた。目は真ん丸く見開いて、明らかに仰天しているのがわかった。

「ど、どうしたの？なんかあったの？」

「たった今そこで車にはねられて・・・」

「Σ（・◇・＊エエツ！？体はなんともなかったの？病院行な
くちゃ・・・」

「いや、水たまりの泥をはねられて・・・」

「（ノ―ω）ノバタ 先に泥って言ってよ。」

「す、すいません。。」

「待っててね。すぐタオル持って来るから。」

彼女がタオルを取りに部屋の奥へ入って行ったと同時に、玄関のチャイムが鳴り、ドアから別な女性が顔を出した。どこかで見覚えがある。

「ゆりかぁ、来たわよお。」

この女性は一言そう言うのと、僕の方を振り向いてあとずさりした。
「うわっ！あ、あなた一体なんなの？何でそんなにこきたないの？」

「いやその実は・・・」

「ゆりかぁあゝ玄関に変な人いるわよおお！」

「いやそうじゃなくて・・・」

そこへゆりかが戻ってきた。

「翔子、彼は森田さんよ。」

「え？ほんと？・・・あ、よく見たらそうだね。どっかのホー

ムレスが不法侵入してるのかと思っちゃったあ。」

「バカね。そんなわけないでしょ。森田さん、こちらあたしの友達翔子。合コンのときに1度面識があったはずだけど覚えてる？」

「あ、はい。なんとなく見覚えがありました。」

「あなたがゆりかのハートを射止めた男性だったとは。(^| ^; 顔が真っ黒でわからなかったわ。」

「あははは。僕もそう思います。」

次にゆりか言った。

「森田さん。とにかく先に顔を拭きましょ。あたしがふいたげるから。」

「え？そんな悪いですよ・・・うぐっ!!」

すかさず彼女はタオルで僕の顔を拭き始めていた。

「遠慮しない遠慮しない。ね？森田さん。」

「は、はぁ・・・」

彼女の目はクリッとしていつも可愛い。そんな眼差しで見つめられながら、僕の心は徐々に興奮のるつぼへと向っていくようだった。

彼女は僕の顔を拭き終わると、次にTシャツにはねた泥の塊もふき取ってくれた。

「泥の塊だけ取ってあとは洗濯してあげるわ。家の前、今ちょうど工事中で舗装されてなかったものね。ジーンズもすごい汚れよ。森田さん。」

彼女は汚れた僕のGパンまで拭いてくれたのはいいんだけど、拭き作業の流れで僕の股間を刺激した。

「あうっ・・・!」

「あらやだ、ごめんなさい。あたしったら何も考えないで。」

「いえ・・・びっくりしましたけど全然平気です・・・はい。」

となりにいた翔子という女性も複雑な表情で僕らを観ていた。

「今日は翔子も呼んだの。あたしたちの仲良しぶりを見てもらいたくてね。」

「あ、そうだったんですか。なるほど。ちょっとテレちゃいますね。」

「ゆりかと森田さんにはお邪魔してるようで悪いけど、監視役も兼ねてね。」

「監視役？なんで？」僕は尋ねた。

「森田さんがけだものにならないようによ！ウフフ。」

「そ、そんなこと僕が・・するわけじゃないですか。」

しかし、この言葉に威力はなかった。

なぜなら僕の股間はさっきの彼女から受けた刺激でGパンごと膨れあがっていたからだ。とっさに両手で前を押さえる僕。

「森田さん、向こうに脱衣室があるから行つて。パパのシャツ貸してあげるから持つて行くわ。」

「は、はい。すいません。では・・」

僕は前を押さえたすぐみっともない格好のままで脱衣室まで足早に向った。ドアを閉めて汚れたシャツを脱ぐ。すると、さっきの玄関先から小声で彼女たちが話している会話が聞こえてきた。

「ゆりか見た？あれ。すっごく大きくなってたわよ。あの男やしそうだわ。襲われたらどうすんのよ？」

「（OーHーO）ウフツ とてもシャイで可愛いじゃない。心配ないわよ。」

「あんな大人しそうな男に限って危ないのよ。」

「彼はそんな大胆なことする人じゃないわ。それに翔子がそばにいるでしょ？」

「まあ、そりゃそうだけど・・」

彼女は僕を心から信用してくれてるんだ。不思議だけどとても嬉しいことだ。なんとか僕もそれに答えないとなあ。

そう心に誓ってはみるものの、それとはウラハラに行動は逆パターンをひた走って行くような予感がしてならないのはなぜだろうか？

第6話 度重なるドジ

●須藤ゆりかの手記より

泥だらけの森田さんにパパの衣服を貸してあげた。

彼が脱衣室から出てくる。

「あのー・・須藤さんのお父さんて体大きいんですね。。」

「（ $m \geq m \leq m$ ）ププツ。うちのパパ、お腹出てるから森田さんにはブカブカなのね。」

「は、はぁ・・」

「我慢してね。翔子とリビングに座ってて。あたしお茶入れるね。」

」

私がお茶を入れながらリビングの様子をチラチラ見ていると、森田さんはガチガチに固まっているようだった。翔子は知らぬふりで自分の携帯をいじっている。翔子ったらもっと彼に話しかけてくれたらいいのに。

私は入れ立てのお茶をリビングに運ぼうとした。すると、入り口の足元に翔子を持ってきたペーパーバッグにつまづいて、前向きに倒れそうになった。

「キャッ！」

私が叫んで床に倒れそうになる瞬間、彼が素早く両手を下から差し出して体を支えてくれた。でも・・・

彼がとっさに両手で支えてくれた場所は、私の胸だった。

しかも思い切り両胸を鷲づかみにされている。

私は思わず赤面した。彼もハッとして表情が変わった。

「あわわ・・ご、ごめんなさい。」

彼はすかさず手をどけたのはいいいけれど、結局そのせいで私は床に打ちつけられた。

「痛あゝい。。（――――）」

「あゝあ、しまったああ。ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

「翔子がポツリと言う。」

「あんた、わざとじやったんじゃないの？ 玄関でのお返しのもり？」

「そんな・・とんでもない。」

私は起き上がって言った。

「もういいの。平気よあたしは。だってあたしが転ぶの予測なんてできないでしょ？」

「でもしっかりムギユツとつかんでたわよねえw」

「そ、それは・・アタ、（；△；ゞ||ゞ；△；）ノフタ」

彼の焦っているのを見ているとなんだか可愛く見えちゃうのはあ
たしだけなのかなあ？

●森田卓の手記より

今日の彼女は季節感を漂わせるような淡い色のフレアスカートを履いていて、いつにもまして清楚で爽やかな天使のように見える。

そんな彼女に対して、よりによって彼女のオッパイを思い切り握ってしまうなんて・・僕はとんでもない奴だ。わざとじやないってことをわかってもらえるかなあ・・

それにしても彼女の胸、柔らかかったなあ・・あ、ヤバイ。ダメだこんなこと考えちゃ！ また疑われちゃうじゃんか！ 全く自分が情けない。

お茶の入ったカップが床に散乱していた。幸い熱いお茶をかぶって火傷をした人はいなかった。床に転がったカップを回収してテー

ブルに置いた。でも3つのカップのうち、ひとつが見当たらない。
僕と彼女と翔子さんと、あちこちキョロキョロしながら探していると突然彼女の叫ぶ声。

「あ、森田さん危ないっ！足元！！」

そのとき後ろを向いていた僕は、すぐに振り向き直ったものの、足が先に進んでいたので、丸いカップの上に足を乗せてしまった。後ろに倒れそうになるところを踏ん張ってバランスをとろうとすると、今度は前のめりに倒れそうになった。

「わ、もうダメだーっ！」

僕の顔はすでに床と平行になっている。

それでも僕は倒れながら必死で何かにしがみ付こうと両手を上へ伸ばした。

すると何か布のようなものが手に触れて、すかざずギュツとつかんだ。

『しめた！カーテンだ。。』

と、そう思ったが、そのカーテンは僕が床に叩きつけられるのと同時に一緒に地面に落ちた。

「やんっ！」

彼女の声が聴こえた。

『え？やんっ！って・・・なんなんだ？』

前のめりに倒れた僕は、おそろおそろ自分の伸ばした両手の先を見ると、そこには彼女の履いていたスカートを握っている手があった。

そう、僕は彼女のスカートをずり下ろしていたのだ。

少し上を見上げると、下着姿のあらわな彼女が赤面していた。

「うわー！またまたごめんなさあい。」

床に叩きつけられた痛みなど、どこかに吹っ飛んでしまった。

僕は土下座して彼女に謝った。

翔子さんが意地悪なことを言った。

「あんた、土下座しながら下からチラチラ見てるじゃないの！えっち！」

「いや決してそんなことは。」

ないとは言えなかった。これが男の嵯峨なのか。。；^|^A
アセアセ・・・

第7話 元彼登場

●須藤ゆりかの手記より

森田さんはドジが多いけど、すぐに必死で謝るところが可愛い。彼には裏表がない証拠。素直な心。人を騙す要素なんてみじんも感じられない人。

あたしの出会いは今まで長くは続かなかった。

いつも男性の方から言い寄って来るのに別れを切り出すのも男性側。

「ゆりかさあ、お前重いんだよ。俺はもっと楽に付き合いたいんだよね。」

3年前に別れたマサトのセリフだった。

「ゆりかといるとなんか疲れちゃうんだよなあ。」

2年前に別れたシローのセリフ。

「ゆりか、毎日じゃなくても週末会うくらいでいいだろ？ダメか？」

1年前に別れた慎也のセリフ。

どれも共通して言えるのはあたしを重荷だと感じていること。

この前の食事会后、森田さんが帰ってから翔子に聞いたことがある。

「ねえ翔子、あたし好きな人とはいつもイチャイチャしたいのに

男性っていやなのかな？」

「そんなことないよ。どして？」

「だって・・・うざいって顔で見られるんだもん。」

「Σ（´◇´＊エエッ！？あの森田が？」

「違うわよ。あたしの過去の話。」

「男の人の照れもあるのかもね。」

「そうなのかなあ？お弁当作って持って行っても喜んでもらえないのはなぜ？それも照れ？」

「ああ・・・そりゃ普通は嬉しいはずだけど・・・でもゆりかの場合
はちよっと違うかもね・・・」

「なにになに？気になる！はっきり言って。」

「あんね、別にゆりかの行動のせいじゃないのよ。」

「???」

「つまり、ゆりかと付き合う男の性格の問題なのよ。」

「よくわかんないけど・・・」

「あたしもゆりかの付き合ってきた男いっぱい知ってるけど、共通して言えるのはみんなクールで超2枚目だったこと！」

「それが何か問題でも？」

「こう言ったらあたしがひがんでるように聴こえるから言いたくないんだけど・・・」

「ううん。そうは思わないわ。言って。」

「じゃゆうわよ。ゆりかの付き合ってきた男ってみんな目が妖しいの。常に女を品定めしてるかのような目・・・」

「うん・・・確かにみんな、何考えてるんだかわからない瞬間があったわ。」

「でしょ。だから女はゆりか一人に決めてるわけじゃないのよ。
数いる中のひとり。」

「だからあたしに毎日つきまとわれたくないわけね。」

「ゆりかももう少し男を見る目を養わないとね！」

「うん。実は半年前に別れた彼にもはっきり言われたことがあ

るの。」

「なんて？」

「『ゆりかだって俺のことただのセフレだと思ってたんじゃなかったのか？・・・これじゃ気楽にえっちもできないじゃん！』って。」

「あららら・・・決定的な言葉ね。だからそのあとしばらく元気がなかったのね。」

「うん。翔子にだけ話すけど、さすがにあたし、精神的に不安定になってカウンセリングに通うようになったの。」

「Σ（￣◇￣＊エエッ！？それは初耳だったわ。で今はもう大丈夫なの？」

「うん。行って良かったわ。あたし自身変わったわ。そのおかげで森田さんに出会えたような気がするの。」

「たしかに男の趣味は思いつきり変わったようね・・・（＾―＾；）」

今、あたしは心に強く思っている。

森田さんとならずと長くやっていけそう。

彼のおちゃめな部分がだんだん見えてきた。

自分自身、だんだん彼が好きになっていくのがわかる。

でも未だに不思議なことがある。友達にもよく聞かれることだけど、最初の出会いで森田さんのどこに惹かれて付き合い出したのかということ。

これはなぜかあたしにもわからない。。。

そのとき携帯が鳴った。あたしは着信を見てびっくりした。

1年前に別れた慎也からだった。

あたしったらまだ削除してなかったんだ。。

「よお、ゆりか。元気か？」

「どうしたの？なんか用？」

(ノ。ρ。)ノ オオオ・オ・オ・オ・・・・・。そんな言葉が彼女の口から出るなんて、これは夢か幻かホントかウソか。嬉しさを飛び越えて感激から有頂天へと昇り詰める僕。
しかしすぐによぎる一抹の不安。。。

彼女の元彼と対面だなんて・・・

第8話 3者会談

●森田卓の手記より

彼女の元彼と対面する土曜日が来た。一体僕はどうすればいいんだろう？

まず何を着て行けばいい？と考えたところで、僕には一張羅のスーツしかない。

でもなあ、やっぱラフな格好の方がいいよな・・別にお見合いするわけじゃないんだし。

そう決めた次に考えたことはお金。前に大失敗してるからなあ・・今日は絶対ちゃんとおろして行かないと・・でも僕が3人分払うんだろうか？彼女の分はもちろんだけど、わざわざ知らない男の分までなんて・・きつと自分の分くらいは自分で払うだろ。うん、違くない！

それにしてもなんか行きづらいなあ・・一体どう挨拶したらいいんだろう？『はじめまして。よろしく願います』とか言うのかな？いやそれはおかしい。彼女の元彼にそんなこと言うのはバカ丸出しだ。うーん・・悩むうー！

そうこうしているうちに出かけの時間が来てしまった。また遅刻したら大変だ。

今日の待ち合わせ場所は駅前のカフェで直接会うことになっている。とにかく早めの行動だ。

僕は少し焦り気味で自宅をあとにした。

今日はちゃんとお金を用意するつもりで、近くの銀行のATMに立ち寄ったものの、人があまりにも大勢並んでいるので徐々に時間的余裕がなくなってきた。

なんでこうついてないんだろう。20人は並んでいる。でもここで放棄すると僕の財布には105円しか入っていない。当然お茶代も払えない。僕ってホントにバカだ。普段から財布に余裕を持たせないからこうなるんだ。次からは絶対気をつけよう。せめて千円は入れておこう。

かなり待って、やっと自分の順番があと2番目になった。なんとか時間までには間に合いそうだと思ったのに、僕の前のばあちゃんが、ATMをうまく使えずに何度も何度もやり直していた。

「あのー、おばあちゃん、僕が手伝いましょうか？」

「あんた誰じゃね？知らない人に何でわしのお金を触らせにやいかんのかえ？ふんっ！」

このクソババアー！！人が親切で言ってあげてるのにいー！

と言いたいところも口に出しては言えず、素直に引き下がって待った。それでもばあちゃんはまだ作業が終わらない。

「あのー、おばあちゃん。銀行の窓口行った方がいいんじゃないですか？」とやさしく聞いてみる。

「バカかあんたは！土曜にどこの銀行が開いてるんかえ？え？」
しまった。そうだった・大ボケかましてしまった。でもそれにしたって何で僕がこんなに怒られなきゃなんないんだ？ババアが

トロいからじゃないか！ちつくしょう！と心でジダンド踏んでいるだけの僕もなんかみつともない。。。

そこへ後ろからチンピラ風の男が僕の肩を叩いた。

「おい、兄ちゃん。うちのおかんに何ガンつけとんじやい？あ？」

「Σ―11（▽、；）―1い、いえ・・めっそうもない・・
教えてあげよう。」

「何コラ！？年寄りから金ひったくろうととったんじゃないんかい？ワレ！」

僕はむなぐらを捕まれ上に押し上げられた。体が宙に浮いた。

「ぜ、ぜ、ぜ、絶対そのようなことは・・」

「はん！なんや、度胸のねえただのうじ虫野郎やないけ。もうええわ。でもいいか！調子こいてんやないで！」

「は、はい。すいません。」

僕のTシャツの丸首部分が伸びておなかのあたりまでダラリと垂れ下がってしまった。

やっぱ3着500円で買った安物はダメか。。。

結局僕はここで大きなロスタイムを過ごした。お金はキャッシングできたものの、とにかく急がなくてはならない。僕は走った。とにかく走った。待ち合わせ時刻まであと1分。街角を曲ると正面100m先に約束のカフェが見えた。

「あともうすぐだ。なんとかなった。」

ちょうど僕が入り口の近く30mくらいまで来たときに自動ドアが開いて、お客さんが二人、中から出ようとしているのが見えた。

「よしっ！ダッシュであのドアが開いているうちに中に入ろう！」
僕は喜び勇んでラストスパートをかけた。が、それが大きな間違이었다。

自動ドア入り口の手前には1段高い石段があって、僕にはそれが目に入らなかった。

当然のごとく僕は蹴つまづいたのである。

●須藤ゆりかの手記より

あたしは約束の3分前にカフェに着いた。でも慎也はすでにそこに来ていた。

「早かったのね。だいぶ待ったの？」

「いや、10分前くらいだ。約束に遅刻はあり得ないだろう？」

「そんなことはないと思うけど？」

「それは今の彼のことをかばった発言か？」

「そんなことないわ。彼はちゃんと時間通りに来るわよ。」

「もし来なかったら別れるか？」

「なんでそうなるの？そのときは何か理由があるからよ。」

「ホホウ（。＊）ずいぶん入れ込んでるようだな。」

「当然でしょ。あたし彼大好きだもん。今までに出遭ったことのない人よ。慎也みたいなタイプは散々付き合ってきたわ。あなたに個性なんか感じられないわよ。」

「久々に会ったってゆうのに、こりゃ手厳しい言い方だな。お前をそこまでさせる男って一体どんな奴なんだ？くっそおっ・・・早くそいつに会ってみたいぜ。」

「もう時間だから着くはずよ。」

そう言うあたしは自動ドアの方を振り向いて様子を見た。ちょうどお客さんが二人会計を済ませてドアから出て行くところだったと、その瞬間、二人のお客さんは急に両脇に体をよけた。

すると、まだ開いている自動ドアの中央から、猛烈なスピードで前転しながら入って来る男の人がいた。

「なんなんだあれ？どこのバカだ？」

「も・・・森田さんっ！」

「知ってるのか？ゆりか」

「あたしの彼よ。悪い？」

「工工工工（ハ）エエエエ工・・・」

前転がおさまった森田さんは、頭を抑えながら立ち上がった。

「いってえ〜。あ・須藤さん。こ、こんにちは。」

「それより体大丈夫なの？森田さん。ケガしなかった？」

「ええ。なんとか・・・。」

「良かったわ。じゃ紹介するわ。あたしの元彼の慎也。全然気にすることないからね。」

「ど、どうも。。よろしくお願いしま・じゃなかった；へへ

A あの・・・こんにちは。」

慎也は怪訝そうな目で森田さんを見ていた。

「マジで君がゆりかの彼氏？ホントマジで？」

「ええ・まあその。。」

「こんな登場のしかたって、今流行ってるのかい？（・∀・）ニヤニヤ」

「いやこれは偶然で。。ちょっと。。」

「もう慎也！森田さんをいじめないで！とにかく席にちゃんと着いて話しましょう。」

なんとか慎也につきまとわれないようにしたいわ。。

第9話 3者会談その2

●森田卓の手記より

地べたを転がりながらこの店に入ってきたので、体も痛いし服も汚れてみっともなかった。おまけに他のお客さんに笑われるし、須藤さんの元彼も僕を見下したような目で笑っている。救いは彼女だけが笑わずに心配してくれていること。

すごく嬉しいことだけど、こんな僕は彼女に何か答えるだけのことができるんだろうか？不安もよぎる。

「とにかく何か注文しましょ。話はそれから。森田さん好きなも

の注文して。」

「う、うん。。えと・・・」僕はすぐにメニュー表を見ながら即決した。ここで注文に時間をかけるとイメージが余計悪くなると勝手に考えたからだ。

「じ、じゃ僕、パスタランチBで。」

「わかったわ。あたしはアイスティーでいい。慎也は？」

「ああ、俺もそれでいい。」

Σ—11（▽₁；）—1 みんな飲み物だけなのかあああ？
？なんだそりゃあ？？なんか食おうよおお！と心で叫んでみても口には出せず、ただ僕は緊張したまま座っていた。そのとき元彼が僕に話しかけた。

「そのTシャツも今流行ってるのかい？」

「いやこれは安物で・・・」

「最初からそんなに首の部分が垂れてるTシャツなんて初めてみたよ。」

「あ！こ・・・これはちよつと・・・」

さっきATMでチンピラに絡まれたときに緩んだからだ。。

やっぱり今日もマイナスイメージが先行する僕だった。

第10話 VS元彼

●森田卓の手記より

ドジと緊張の連続だけど、冷静になってよく考えればなににも僕がおどおどしてることはない。あくまで今対面してるのは須藤さんの元彼。もう終わった人なんだ。

僕が引け目をとることなんてないじゃないか！堂々としてればいいんだ。

とは思うものの、目の前の元彼は僕よりもっと堂々としていた。彼は明らかに背も高いしスリムだしカッコいいし、いつも自信がみなぎっている感じだ。それにひきかえ僕は自分に自信のある要素

が全くない。。

元彼はストレートに話しを突っ込んできた。

「正直びっくりしたんだけどさ、なんで君はゆりかと付き合うようになったのかは知らないけど、はっきり言わせてもらうと全然ゆりかとは似合わないね。」

「慎也いきなり何よそれ。あたし慎也のそんな傲慢なところが大嫌いな。自分のこと何様だと思ってるの？」

「別に俺だって自惚れ屋じゃないさ。でもこのずんぐりむっくりの男を一目見たら・・なんで俺よりこいつなんだって腹がたつてきのさ。」

「森田さん、黙ってることないわ。慎也に好き勝手なこと言わせないで。」

「はあ・・でも慎也さんの言う通りだと思いますので。僕なんて見た目も冴えないし、人に自慢できるものなんて全然ないし。」

「そんなのあたしだってないわ。森田さんが慎也に引け目を感じることなんてないのよ！あたしが森田さんを一方的に好きになったんだから。」

「信じられない・・ほんとにほんとなのか？ゆりか！気の迷いじゃないのか？」

「いいえ全然！だから付き合ってもらってるあたしの方が満足してるんだからもうそれでいいじゃない。もう慎也の出る幕じゃないのよ。」

「お前、1度変わったタイプと付き合ってみただけじゃないのか？」

「そんなことはありません！」

「だいいち、付き合ってるクセに苗字で呼び合ってるのはなんなんだ？」

「いいじゃない。ほやほやカップルみたいでさわやかだわ。」

「ものは言いようだな。じゃ森田って言ったっけ？お前に聞くが、ゆりかのどこが好きなんだ？」

「そ・・・そりゃ、落ち度のないくらいに全てが・・・何もかも好きですが・・・」

「なるほど。わかった。やっぱりそうか。」

「?」

「お前はゆりかじゃなくてもいいんだ。」

「そんなことは・・・」

「失礼よ。慎也!」

「いや、この男は普段からモテそうもない。たまたまゆりかがこいつに声をかけたから、幸運だと思って飛びついてきただけなんだろう。もし、ゆりか以外の女がこいつを誘ったとしても、喜んでついて行くはずだ。違うか? おい」

図星だった。僕は凍り付いた。たしかに須藤さんのような超美人の人から告白されるなんて奇跡のような話だ。だから僕は喜んで彼氏になった。でも、もし仮に他の女性から同じことを言われたとしたら・・・須藤さんじゃなくてもきつとOKしただろう。。

「どうやら図星のようだな。ゆりかのことなんてろくに知りもしないくせに、結局ゆりかの顔と体だけで有頂天になってるんだろが。」

「もうやめて慎也!」

そのとき、ゆりかと慎也が注文したアイステイーが運ばれてきて、妙な無言の間ができた。二人は気を落ち着かせるためか、妙な間を埋めるためか、しゃべりもせずにアイステイーを一気に飲み干した。僕のパスタランチが来たのはそのあとだった。

二人が見てる前で自分だけ食べるなんて・・・なんて最悪なタイミングだ・・・

「気にしないで食べて。森田さん。」

「はい・・・あはは；^|^A」

「ふんっ。こんなときに自分だけ食うもんかね？」

「慎也うるさいわよ！」

「あーはいはい。」

第11話 VS 元彼その2

●森田卓の手記より

みんな飲み物しか注文しないなんて思ってもみなかった。僕ただひとりだけ、二人に見られながら食べてるなんて・・・味もそっけない。

「もっと落ち着いて食べていいのよ。森田さん。」

「そ・・・そう言われても僕だけダラダラ食べてるわけには・・・」

「じゃ食うなよ！」

「こら慎也！」

そう言われると益々焦って、パスタなんか丸呑み状態だった。

「お前、きったねえ食い方だなあ。パスタをズルズルすすって食べんな！」

「あ、す、すいません・・・」

「いいじゃないのよ。別に気取った席じゃないのよ。」

「マナーってもんがあるだろが！」

「慎也の前でマナーなんてないわよ。森田さん少しあたしにも食べさせて。」

「え・・・？いいですけど・・・別なフォークを頼まないと・・・」

「森田さんのでいい。ちょっと貸して。」

そういうや否や、彼女は素早く僕の手からフォークを取った。

「あたしだって・・・そんなお上品に育ってきたわけじゃないわ。」
彼女はそう言うのと僕の Pasta をフォークに絡ませるのではなく、救い取ってそのまま口へ運び、ズルズルと豪快な音をたててすすった。

「須藤さん・・・」

「うん。おいしい！気取らずに豪快に食べるのが1番ね！」

彼女は僕に合わせてくれたんだ。。なんて優しい人なんだろう。こんな彼女に報いることが果たして僕にできるんだろうか？

第12話
VS元彼その3

●須藤ゆりかの手記より

「あゝあ、見てらんねえよ。ゆりか、お前いつからひ弱な男がタ
イプになったんだ？よく言う母性本能くすぐるってやつか？」

慎也は平氣でイヤミや毒舌を言う。

「森田さんはひ弱じゃないよ。優柔不断な慎也の方が精神的にひ弱でしょ！ 安心して頼れなかったもん。」

「（・。・）　ほー！言ってくれるじゃねえか！じやなにか、この男には頼れるってのか？」

「もちろん。」

「わけわかんねえよ。　　ったく！」

「森田さん、気にせず食べてね。そんなに慌てて食べると・・・」

あたしがそう言いかけると同時に森田さんはパスタを口に運んだままむせてしまった。かなり咳こんで苦しそう・

「ゴホッゴホッ・・ゲホッ・・!!」

「ごめんなさいね。森田さん。見苦しいとこ見せちゃつて。」

「いえ・・ゲホッ・・もうなんとか・・だいじよぶです。」

そう言った森田さんの鼻の穴からパスタが1本飛び出ていた。

慎也もそれに気づき爆笑した。

「
;
..
;
;
、
;
..
;
、

(
;
;
ヰ;
;
;

)
ヅ
ッ
ウ
ヒ

ヤヒヤ（ $\geq$ ∇ $\leq$ ）ノノノ☆バシバシ。こんな男が頼れるなんて、ゆりかバツカじゃねえの？」

「そうよ。バカよ。これで秀才の慎也と相性合わないのがはつきりしたわね。さよなら。」

「おいおい、こりゃ手厳しいな。てか、恋は盲目とはよく言ったもんだ。ゆりか、お前は今まさに盲目だ。」

「ええ。どうとでも言って。もう慎也とは関わり合いにならないから。」

「・・わかった。これじゃちが明かないな。いったん俺は手を引こう。もし気が変わったらいつでも電話してこい。」

「ありえないわ。番号も削除しちゃったし。」

慎也はこのあと、無言でこの場を立ち去った。

森田さんが言った。

「いいんですか？あの人の方がどう見てもカッコいいですよ？」

「そんな男はもう飽き飽きしたの。」

「そう言われるとなんか僕も複雑な心境ですけど（へーへ；）」

「あ、ごめんなさい。そういう意味じゃ・・」

「いえ、いいんです。もう慣れてますから。」

「森田さんは森田さんでカッコいいとこいっぱいあるのよ。でもできれば・・」

「?? できれば？」

「鼻の穴から出てるパスタをなんとかしてもらえたらもっとカッコいいんだけど・・」

「Σ―11（▽；）――1 こりゃ失礼しましたああああ！」

彼はパスタの麺を鼻から吸い込んだ。

「キャ！」

「；へへA アセアセ・・すいません・・」

第13話 渦巻く脳裏

●森田卓の手記より

昨日は冷や汗が出っぱなしだったな。。。

でも何はともあれ須藤さんはあの元彼より僕を選んでくれた。

なんか少し自信が出てきたような気がするぞ。よし！これからはドジらないように細心の注意を払ってデートしなきゃ！

・・・でも・・・待てよ？今までこれだけハマしても彼女は僕を嫌わないでいる。なぜなんだろう？ドジが母性本能をくすぐるとか？んなことはないだろう。だとしても故意にドジなんてできないし・

僕はベッドに寝転んで天井をじっと見つめながら次のデートをどんな風に過ごそうか考えていた。ファーストキスって・・・いつごろすればいいんだろ・・・もうそろそろしとかないと逆に変かなあ・・・？てか、何て言えばいいんだ？「須藤さん、チュ・・・チュウしていい？」だっせえ（「ん」；；；それとも「す・・・するよ？」かな？いやダメだ。なんかやらしい（「ん」；；；そうだ！しゃべってはいけないんだ。目をつぶってそっと顔を近づけて唇をとがらせ・・・ってビンタくらいそうだ（「ん」；；；）

でもなあ・・・これくらいクリアできなきゃ頼りないと思われるのも嫌だし。。

キスがヘタだと本当に嫌われるかもしれない・・・最初から舌とか入れてもいいのかな・・・うわやばっ！考えただけで・・・僕は股間を押さえた。

ダメだ！こんな不純なこと考えてたら僕はただの変態になってしまふ。

どこか上品な場所に行けばいいんだ！美術館とか？でも無理だ。僕に絵心はない。お笑いライブ？彼女が漫才好きかどうか知らないし・・・映画が無難かなあ？でも何観る？あ、あれがいいかなあ・・・電車の中で女性は酔っ払いに絡まれてるところをひとりの男性が救ってあげる。彼の職業は琴の師範で、女性はその彼に心動かされ、彼の元で琴を習い始めるあの映画『電車お琴』。

そのときタイミングよく須藤さんの手が握れたらしいな・・・

と、そのとき携帯に着信があった。なんと須藤さんからだった。
「す、須藤さん！ど、どうもこんにちはです。」

「くすっ。ごめんなさいね急に。次のデートまだ日付決めてなかったでしょ？」

「あ、はい。そうでした。つ、次の土曜ではどうでしょう？」

「全然OKよ。でも昨日は元彼もいたし、まともなデートできなかったから土曜まで待ち遠しすぎるわ。」

どっひゃあああああ~~~~イエイq(・ q)イエイ(p・ q)イエイ(p・ q)イエイ(p・) p イエイ!! 彼女の口から待ち遠しいなんてえええ~~~~!!

「森田さん？森田さん？どうしたの？聴こえてる？」

僕は我を忘れて一瞬放心状態になっていた。

「あーだいじょぶです。だいじょぶです。ではどうすれば・・・？」

「あのね・・・実は森田さんの家の近くまで自転車で来てるの。」

『Σ—11(▽;)——1えええええ？』

「お家にいないの？森田さん。あたしが勝手に突然来たし、都合が悪かったらこのまま帰るから気にしないでいいよ。」

「いや、用事なんて何もないですけど・・・じゃすぐ支度して外に出ます。」

「あの・・・もし良かったら外じゃなく・・・森田さんの部屋見たいわ・・・。」

ひえー！(◎O◎)にゃ・・・にゃにいいいいい~~~~???

僕は飛び上がった。この散らかった男やもめの部屋を見られたら、さすがの彼女も後ずさりするに違いない。でも・・・彼女の申し出を断るなんてできない。

「い・・いいですけど・・ちょっと片付けるまで・・」

「嬉しい。ありがと。すぐ行くわ。」ブチッ！ツーツーツ・・

すぐ来るのかあああああああああゝゝゝ！！！！

一体何から片付ければいいのかわからなかった。とりあえず、テーブルの上の汚れた食器やおやつのおかしを片付けよう！僕は今までにない猛ダッシュで行動に出た。そのわずか3分後。

ピンポン（・・―・）σ 「須藤です。こんにちはー。」

は、はやすぎるうううううううううう！！

一体、これからどうすりゃいいんだろお？？

第14話 ぬきうち訪問

●森田卓の手記より

「す、須藤さん、すみませんがもう少しだけ待ってて下さい。」

「慌てさせてごめんなさいね。あたしが突然来たものだから・・。」

「

「いえ、別にそんなことは関係ないんですが・・」（あるんだけ

どねえホントは（へ―へ；）

「なんか悪いからあたし帰ろかな・・」

「いえいえいえいえ、もう少しですから。せっかく来てもらったのにそんな・・ちょっと部屋が散らかってるだけなので。」

「そう？じゃあやっぱりお言葉に甘えて待たせてもらいますね。」

「は、はい。」

僕はなおいつそう、早送りのような猛スピードで、部屋を駆け巡り片付けに邁進した。

『バカだな僕って。そのまま帰ってもらえばこんなに焦らなくていいのに。。でもまあとりあえず食器は台所にぶち込んだし、ゴミも1箇所にとめたし、雑誌もベッドの下に隠したし、あとは・・・』

そのとき僕はふと気が付いた。やばいっ！この部屋すげえ臭い！僕には慣れてしまった匂いだが、彼女にとっては間違いなく異臭だ！普段から部屋の換気もろくにしていないうちに・・・どうしよう・・・アタ、（；△；ゞ||ゞ；△；）ノフタ

僕は困り果てながらも急いで窓を開け、締め切ったカーテンも両脇に引くと、そこになんと、天の助けか神のご加護か、窓のサンに『お部屋の消臭スプレー』があった。

（！o！）オオ！助かったあ！これを買っておいたのすっかり忘れてた！よしっ！す、すぐスプレーしよっ！

●須藤ゆりかの手記より

あたしは森田さんの部屋の前でずっと立ち尽くしていた。

いきなり勝手に来たあたしが悪いんだけど、そんなにバタバタするものなのかしら？何か部屋の中からすごい音が聞こえてる・・・（
^ | ^ ; ）

「森田さん、そんなに気をつかわないで。あたし別にお嬢様でも何でもないんだから。足の踏み場もないわけじゃないんでしょ？」
森田さんが中から小声で応えてきた。

「えと・・・それは・・・その・・・」

Σ—11（▽；）——1ギクッ！まさかそんな・・・

「も、森田さん、なんなら部屋の掃除あたしも一緒に手伝いまし

ようか？」

「とととととんでもない！いいですよそんな。」

「遠慮しないで。どんな汚くて臭い部屋でも森田さんを軽蔑したりしないわよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

急に無反応になっちゃった。。。

あ、あたし・・今余計なこと言っちゃったかしら？；^|^A

そうよ。あたしが進んで手伝ってあげればいいのよ。そうしてあげよう。

「森田さん鍵あけて。手伝うわ。」

あたしはそう言っただアのノブに手をかけた。

ガチャ・・

「あ・・開いてる・・」

あたしはドアを開けてそっと中を覗いた。

するといきなりスプレーがあたしの顔に噴射された。

「キャ！！うぐっ・・コホッコホッ・・」

「うわああー！しまったああ！須藤さんごめんなさああい！」

あたしはスプレーにむせながらも彼の慌てふためく態度に悪気はないとすぐ見て取った。

「い・・いいのよ。気にしないで。でも何のスプレーなの？」

「部屋の消臭スプレーなんです・・ホントにすみません。」

「少し吸っちゃったみたい・・うがいさせてもらえない？」

「あ、はいすぐに！この部屋、洗面所がないので台所でもいいですか？」

「水があればどこでもいいわ。」

●森田卓の手記より

彼女にまたまたとんでもないことをしてしまった。今日で完全に嫌われてもおかしくないよなあ・・

そう思いつつ、彼女を台所に案内するとこれまたヤバイ光景を見られてしまった。汚れた食器や食べ物の残りなど、超汚い台所をしっかりと見られてしまった。

彼女はそれを見て一瞬小声で「うっ・・」と発したがすぐに笑顔で僕に振り返り

「も、もう大丈夫みたい。座って少し落ち着きましょう。」

なんという素晴らしいj女性！苦情も言わずにここまで辛抱してくれるなんて。僕にはあまりにもったいなさすぎる彼女の存在。

ほんとにいいんだろうか？僕が彼氏で。。

第15話 I n m y r o o m

●森田卓の手記より

貧乏ひとり暮らしの僕んちには、ソファなどという贅沢品などなかった。

いつも小さな折りたたみテーブルの前で地ベタに座りこんでいるだけだった。

でも彼女は何のためらいもなくそこに腰を落ち着けた。

「あの・・須藤さん、そこ汚いですから座らない方が・・」

「え？何で？森田さんいつも座ってないの？」

「いや、僕は座りますけど、最近あんまり掃除機かけてないもんで須藤さんをそんな所に座らせるわけには・・」

「優しいのね。森田さんのそういうところが好きなのよね、あたし。」

うわー！またモロに好きって言われちゃったああー！（くく、＊）
テヘヘ

「さっきも言ったけどあたし、お嬢様じゃないんだから余計な気遣いはいいのよ。森田さん。」

「は、はい・・・でも本当にすみません。ソファもない部屋で。」

「全然気にしてないわ。あ、でもソファがなくてもそこにベッドはあるのねw」

「こ・・・これは・・・」

「ちよつとベッドに座らせて。」

「いやちよつとそれは・・・」

僕がそういうより先に彼女は立ち上がり部屋の壁側に横づけしてあるベッドに早々と腰掛けた。

「あら・・・？少し硬い？このベッド。」

「と思います。（^| ^;）」

「硬くて少し沈んでるような・・・」

「その通りだと思います。（D_ ; ; ;）」

彼女はすぐにベッドの下を覗き込んだ。もうバレバレだ。

「へえー森田さんすごい！インスタントベッドね。」

「お恥ずかしい限りで・・・（#^・^#）」

「でもこの台だってどこから買って来たんでしょ？」

「いえ、スーパーにあるコンテナをタダで6個もらってきただけです。それを土台にしてコンパネ（木の板）を1枚敷いただけなんですよ。。」

「森田さんてあったまいい♪だからコンパネがなくなって沈んだような感じがしたのね。演出効果バツグン！！」

「あはは・・・はは（1_ ; ヒヤッ）」

言えなかった・・・。それは演出なんかじゃなく、換気の悪い部屋

でコンパネが腐って沈んでしまっていることを。

「須藤さんに褒められるようなことは何にも・・・こんな弾力もない硬いベッドなのに・・・」

「硬いベッドは健康にもいいのよ。姿勢も良くなるわ。」

「でも僕ほとんど横向きに寝るんで・・・」

「（（ノ―ω―）ノバタ」

●須藤ゆりかの手記より

彼の部屋に初めて入って感動した。これがひとり暮らし独身男性の普通の部屋なんだわ。。ちよつとよくわからない匂いがする部屋だけど、生活観がしっかり感じとれる。以前の元彼たちはみんな高級マンションに住んでたけど所詮親のすねかじり。今考えればみんなガキだったわ。

ふとベッドの頭の下あたりのゴミ箱にティッシュの山を見つけた。

「森田さん風邪？すごいティッシュね。」

「あっ！！あ、あ、あああの、それは・・・僕少しチクノウ症で。」

「そうだったの。何も知らなくてごめんなさい。あたしに気にせずティッシュうんと使ってね。」

「は・・・はい。。（「」；ヒヤリ」

「ところで森田さん、お昼食べた？」

「いえ、まだですが・・・」

「（〇―ハ―ハ〇）ウフツ。良かった。あたしもまだなの。一緒にいい？」

「はい。喜んで！僕がごちそうします。すぐに出かける仕度しますから。」

「いえ、ここで一緒に食べましょうよ。」

「え？」

「ごちそうしていただけるならあたし、あれが食べたいの。」

あたしは彼の部屋の隅のダンボール箱に山積になっているカップ麺の数々を発見していた。しかもそれは同じものではなく、ほとんどがバラバラの種類。たまにTVのCMで観る新製品も少なからずあった。

「すごい森田さん。新しいもの好きなのね。」

「いやいや・あはは・カップ麺に限ってなんですけど。あれこれ新製品やコンビニ限定品を探して味見するのが趣味というか。」

「あたしもカップ麺大好きよ。家で食べたら親に怒られるけど、翔子の家に言ったときにいただいてるの。」

「へえ・・そうだったんですかあ。なんか僕、嬉しくなってきましたw」

「新製品じゃないけど、あたしペヤングが大好きなのね。この中にあるかしら？」

「あ、あると思います。僕もそれ大好物です！日清焼そばUFOよりペヤングの方が絶対好きなんです！」

「同じ同じ。嬉しい！森田さんとあたしって相性バッチリね！」

「(～ん) ッデヘヘ」

彼は相当照れていたようだった。でもあたしは本当に嬉しかった。やっと彼との共通点が見つけられて心から安心して頼れるような気がした。

第16話〜30話

第16話 ファーストキス

●森田卓の手記より

『ペヤング』は1個しかなかった。

僕はそれを彼女に譲り、『一平ちゃん夜店の焼そば』を食べることにした。

「ダメよ森田さん。ふたり同じもの食べましょうよ。」

「半分コずつになりますけど・・・それでいいんですか？」

「ええ、あたしはそれで充分。」

「そうですか、須藤さんがそれでいいのなら。。」

とても言えなかった。半分ずつじゃ僕の胃袋には足りなすぎるってことを・・・

といって、僕だけまた別なものを食べてしまうと印象がかなり悪くなりそうだし。

仕方がないや。夜多めに食べればいいさ。

と、そこで僕はハツとした。

「す、須藤さん。そういえばウチ、取り分ける皿がなかったような・・・」

「1個もないの？」

「いえ、台所にあるにはあるんですが、まだ洗ってないもので・・・」

「じゃあたしが洗うから森田さんはお湯沸かしといてくれる？」

「とんでもない！うちに来てもらって須藤さんに洗いものなんてさせられませんよ。」

「そんなにあたしに気を使わなくていいのに。」

「いえ、僕がサッと皿くらい洗いますんで。須藤さんは座って待ってて下さい。」

僕はそう言う台所に急いで向かい、洗い物の山の中から1枚だけ皿を選んで作業を始めた。

「森田さんは除菌ジョイを使ってるのね。」

いきなり真後ろから彼女に声をかけられた。

「うわっ！そこにいたんですか。」

「あ、ごめんなさい。びっくりさせちゃった？」

「いえ、そんなことは・・・」

「あたしね、花王のキュキュットが好きなの。ジョイよりおすすめだから使ってみて。手にも優しいわよ。」

「そうなんですか。僕は台所洗剤の銘柄なんて全然気にしてなくて。」

「男の人はみんな普通そうよ。」

「最初、スーパーでママレモン探してたんです。でもみつからなくて。それで店員さんに聞いたら、今はそんなのもう存在しないって笑われました・・・」

「ええ？いくらなんでも笑うなんて失礼だわ。」

「でも勉強になりましたよw」

「もう、いつも謙虚なんだから。森田さんて。」

こんな会話をしながらも準備は整い・・・と大げさに言ってみても、ただお湯を注いで数分間待っているだけなのであるが。

なぜかその間、僕たちはじっとペヤングを見つめたまま黙って座っていた。

何か話そうと思っても、何も思い浮かばなかった。ただ、彼女とふたり僕の部屋でカップ麺を食べようなどとは夢にも思っていなかった。たので、妙な緊張感が絶えず働いていた。

やがて彼女はうつろな目でカップ麺から僕の横顔に視線を移した。僕はその視線は気づいていたが、振り返れなかった。それでさえもピツタリと密着して座っていて鼓動がドキドキなのに、彼女の顔

をこんな超至近距離で見ることなんて今の僕にそんな勇氣などなかった。

「森田さん・・・」

「は、はいっ！」

彼女の吐息が僕の横顔にかかる。僕の心拍数が上がる。

ど、どうしよう・・・これってきつと・・・チュウするタイミングなんだ。

こ、これを外したら彼女は冷めてしまうかもしれない。僕に幻滅するかもしれない。でも・・・一体どうすれば・・・いきなり振り返って強引に顔を抑えてチュウすればいいのかな？ いやそれはあまりにも乱暴すぎる・・・歯がぶつかってしまってもいいし・・・うゝん。

そう僕が思案している最中、彼女がまた口を開いた。

「ねえ森田さんてばっ！ 3分経ったから、お湯もう捨てた方がいいよ。」

「え？ あ、ああ・・・お湯ね。そ、そうそうだった；^|^A
アセアセ・・・」

「何か考えごとでもしてたみたいね？」

「あ、はい。いえ、別に何も。。ちよつとだけ。」

「そう。。ちよつとだけなんだ。あたしたくさん森田さんのこと考えてたよ。」

「あの・・・実は僕もそうだったんですが・・・なんか恥ずかしくて。。」

「もう、シャイなんだから！ まずはペヤング食べましょうよ。」

「そ、そうですね。あははは（^|^;）」

食べる直前、大変なことに気が付いた。

そういえばハシが1人分しかない。。。。ガ——ΣΣ（。D。;）

——ン！！

「須藤さんから先にハシ使って食べて下さい。僕はそのあとでいいですから。」

「え．．？あたしが使ったあとのハシで？」

僕はハツとした。

「いえ、その・・・ちゃんと洗ってから使いますんで。なんなら持ち替えて反対側の太い部分で食べますので。」

「 $(\ast \geq m \leq \ast)$ クスツ」

「あの・・決して変態チックとか・・やましい気持ちなんてありませんから。」

「森田さん。そんなの気にしないでいいよ。一緒に食べましょう。」

「Σ 1 1 (∇₁ ;) — 1 えええええ？ マジっすかああ？」

「ひとくちずつ食べさせようかしら？」 W

「(°ρ°)ノ オオオ・オ・オ・オ・で、ででで
でも・・・」

「でもって？」

「僕の食べたハシで須藤さんが食べるなんて・・・」

「全く何言ってるのよ。森田さんこっち向いて。」

「うぐつ!!」

か、彼女の唇がいきなり僕の唇に重なった。僕は目を見開いて仰天の眼差しだったが、彼女はじっと目を閉じている。まつ毛が長くて可愛い。唇がすごくやわらかい。僕は自然に溶け込むように落ち着きを取り戻し、彼女と一緒に目を閉じてキスの感触を体全身で感じた。

かなりキスの時間は長かった。僕が薄目を開けると彼女も薄目を開けて僕を見ており、たまらず僕はまた急いで目を閉じた。そんな

まなこで見られると僕はどうかなくなってしまいそうだ。

「 $(*) \geq m \leq (*)$ クスツ」と彼女がまた笑った。

僕たちはゆっくりと唇を離した。

「森田さん、これでハシなんてどっちが先に使おうと平気でしょ？
w」

「は、はぁ・たしかに。」

僕はトロロンとなったうつろな目で余韻に浸っていた。

第17話 波乱万丈なデート？

●須藤ゆりかの手記より

あたしたちのデートはいつも楽しかった。

特に、特別な面白いことをするわけでもない。一緒にごはんを食べに行ったりショッピングしたり映画を観たりカラオケに行ったり・
極々ふつうのデート。

でも不思議なことに森田さんは毎回いつも運が悪かった。

この間の雨のデートでは、二人で舗道を歩いていると車に水をはねられ、瞬時にあたしをかばった森田さんがまたびしょ濡れになった。

別な日の一緒に中華を食べた日は、酢豚にむせてしまい、彼はしばらく咳が止まらず苦しんでいた。

人気映画を観に行った日は、やっとひとつだけ空いていた席をあたしに譲り、彼は最後まで立ち見だった。

あたしのスカートをめくって逃げた小学生を追いかけてゲンコツを食らわしたものの、その場面を子供の親に見られて逆に説教されてしまった。

公衆トイレの前であたしが出てくるのを待っていてくれたのに、不審者と間違われて通報されてしまった。

普通、絶対コントにしか出てこない路上に落ちているバナナの皮を踏んですべって転んだ。

本屋であたしを付け狙うストーカーに間違えられて店を出された。食事をしようと思ったお店の店員にいきなり顔にパイをぶつけられ、どっきりカメラ収録のえじきになってしまった。

翔子と美智代と4人でテニスをしていたとき、前衛の彼はペアを組んでいた美智代に思い切り後頭部にスマッシュを浴びてしまった。

森田さんには気の毒だけど、あたしはこんなことも含めてすごく楽しいデートを経験している。

次のデートは、久々にドライブに行く予定。

彼の車のエアコンが壊れているけれど、涼しい季節になったし、もう必要ないと思ったから、あたしが提案してみた。

今度の週末に彼があたしの家に迎えに来ることになっている。

すごくく楽しみ♪(★・∩)(∩・★)ネー

●ナレーション

やがて、この幸せなデート三昧な日々が、一気に崩れ去ってゆくとは、まだこの二人には知るよしもなかった。。。

第18話 とあるクリニックにて

「他の方も僕と同じ悩みでここに来る人が多いんですか？」

「そうですね。若い方にはよくいますよ。失恋からくる精神的心の病ですね。」

「で、皆さんはすぐに心のモヤモヤが消えてすっきり解決してゆくんですか？」

「あなたね、私は神様じゃないんだから1回来ただけで治るはずな

いでしょう！」

「そ・・そうですね。」

「焦ってはいけません。心のケアは特に大切ですからある程度時間をかけてゆつくりと治さなくてはなりませんよ。」

とあるクリニックの1室。ひとりの男性が心の病で初診に来ていた。

対するここの先生は、ちまたでは評判のカウンセラーで、完治率がほぼ100%という驚異的な数字をはじき出していた。

「僕は・・自分に自信が持てるようになるのでしょうか？」

「それは問題ないでしょう。でもあなた自身も努力しなければ無理ですよ。」

「先生は男性なのに女性の心も治せるんですか？」

「あなたは人の心配しなくていいから自分のことを考えなさい。」

「す、すいません・・」

ここのカウンセラーは、テキパキとはっきり物事を言うが、話し方は物腰があつてとても穏やかだった。年齢は40歳中半くらいの痩せ型で、アゴにちょびヒゲがあつた。

「まずはあなたが失恋に至った細かい事情から詳しく教えてもらわなければなりません。言いにくいこともあるでしょう。でもそれが治療の段階を区分けできて、効率良く短期間で完治する要因にもなるのです。隠し事はいけませんよ。守秘義務はもちろん守りますから。」

「はい。。じゃあ、それによって治療の方法が違うんですか？」

「もちろんですよ。患者さんひとりひとり全員違います。」

「僕が聞いた噂の例の治療も・・全員がしてもらえるわけではないんですか？」

「それも話を全部聞いてからです。例の療法も段階に応じてやり

方が違いますし。」

「わ、わかりました。でも僕から切り出すことはなかなか。」

「もちろんそうでしょう。そこは私がリードしますから、もっとりラックスして話し始めて下さいね。」

「はい。。。」

カウンセラーと患者の男性との会話は1時間に及んだ。

患者をうまく話の波に乗せたカウンセラーは、根気強く耳を傾けていた。

やがて。。。。

「事情はよくわかりました。随分複雑そうですが。。。大丈夫です。」

「ほんとですか？僕は立ち直れますか？」

「ええ。あなたの病の状態で、すでに3つの成功例があります。」

「そうですか・・・なんとか希望が持てそうです。」

「ちょうど今、あなたと似たようなケースで現在も通院しておられる患者さんもいます。そういえば・・・ここ3ヶ月ほど来てないな。」

「そんなんでいいんですか？」

「いえ、ダメです。最低1ヶ月に1回は来てもらわないと！」

そう言うときカウンセラーはインターホンで受付の女性を呼び、あるカルテを取り出して言い伝えた。

「この患者さん、3ヶ月も来てないんだが・・・どんな様子か自宅に電話して来るように言いなさい。」

「ああ、この方でしたら私もチェックしてまして、今朝方、自宅に連絡しておきました。」

「そうかよしよし。君はいつもよく気がつくね。ありがとう。」

「はい。では失礼します。」

と、部屋のドア付近で振り返って一礼すると、受付の女性は出て行った。

「あ、すみませんね。気になるとほっとけなくなるものですから。」

「いえ・・・」

「あなたにもこの患者さんと同じことを試みてみようと思うのですが。。」

「お任せします。」

「では今日は初診ということでこの辺で。次までにあなたのデータを整理して正しいカウンセリングと治療を進めていきましょう。」

「はい。よろしく願います。」

こうしてこの男性も部屋をあとにした。

カウンセラーがふと窓の外を見ると、入り口からひとりの女性が入ってくるのが見えた。

「お、噂をすればなんとやら。3ヶ月ぶりにやっと来たな。須藤ゆりか。。。」

第19話 ゆりかの異変

須藤ゆりかがカウンセラーのそばの席に着いた。

彼女は少し息を切らしていた。どうやら何か事情があって慌ててここに来たとはいえないとカウンセラーは見て取った」。

「須藤さん、しばらくぶりでしたね。」

「すみません先生。。つい来るのを怠ってしまってます。」

「私と約束したでしょう。1ヶ月に1度は来るようになって。」

「はい・・・でも先生のおかげで私、元気になりましたし、充実した毎日を過ごしてたような気がしてたものですから・・・つい足が遠のいてしまってます・・・」

「気がしてた？今は充実してないということですか？」

「それが何がなんだか・今朝から少し頭が混乱してしまってる・」
「しつこいようですが、1ヶ月に1度は絶対来るように言っただけです。あなたの治療はまだ途中段階なのですから。今日でちょうど3ヶ月目ですよ。だからうちの受付があなたに電話したのです。治療も振り出しに戻ってしまいましたからね。」

「本当にご迷惑おかけしました。でも・昨日まで私、すごく幸せだったような気がします。それがなぜか急に・」

「それは仕方ありません。予想の範囲内です。」

「どういことですか？」

「その前に、私はあなたに日記を毎日書くように指示してましたよね？ちゃんと守って書きましたか？」

「あ、はい。それはちゃんと先生の言われた通りに守ってました。」
「今日、持ってきてますか？」

「はい。ここに・」

「プライベートなことでしょうが私が指示したことなので読ませてもらいますよ。あなたの過去3ヶ月間を知らなければ、的確なカウンセリングはできませんからね。」

「はい。。。」

カウンセラーは彼女から日記を手に取り、目を通し始めた。

2、3分ほど経つと彼は黙読しながらゆりかに話しかけた。

「あなたは3ヶ月前、ここを出てからわずか6時間後に、早々と彼氏ができてるみたいですね。」

「そ、そうみたいです・ね。」

「人事のように言いましたけど、今はその男性とお付き合いされてないんですか？」

「それがその・今朝その人が来て。」

●森田卓の手記より

今日は須藤さんと約束のデートの日。

しかも久しぶりのドライブだ。もうエアコンは必要ないから故障したままでも構わないだろう。今日はちょっと遠出でもしてみよう。

今まで僕はいつも遅刻していた。なぜか約束の時間より必ず5分は送れてしまう。余裕をもった時間に約束を設定しても、やはり5分遅刻してしまう。僕ってそういうタイプのルーズな人間なのだと最近気が付いた。

でも今日は違う。今日はこの通りほら！まだ約束の時間5分前なのにちゃんと彼女の家の玄関前まで来ている。(O^_^O) ワクワク♪僕は車から降りた。

と、そのとき突然突風が僕を襲い、かぶっていた帽子が一瞬で飛ばされてしまった。僕は慌てて帽子を追いかける。かなりの強風で数十メートルは飛ばされた。

運が悪いことに交差点のほぼ中央で僕の帽子が止まり、行き交う車の往来の中で、踏まれまくっていた。

「あゝああ。。。」「僕は信号が変わるまで見ていたしかなかった。やっとのことで信号が変わり、僕が自分の帽子を手取る寸前、いきなり野良犬が僕の帽子を咥えて走り去った。

「なんなんだよ。あの犬！こら待て！！」

僕はまたまた帽子を追いかけるハメになった。

100メートルほど走っただろうか・野良犬がやっとな走のを停止した。

そして咥えていた僕の帽子を口から離す。

「お、やった！今のうちだ！」僕は急いで近寄る。

しかし、野良犬が僕の帽子を置いた場所は電柱の下で、しかも犬の野郎、その帽子にオシッコをひっかけやがった！！

Σ—11（▽₁；）——1。。。おう（ノ≡◇≡、）のう！！！！

僕はそんな帽子を拾って持ち帰る気力も失せ、なんとか気を取り戻して彼女の家へ戻った。

そして再び着いたときには約束の時刻より15分が過ぎていた。

結局、また遅刻してしまった。。。。（――――）

「すいません。森田です。須藤さん遅れてすみません。」

彼女は奥の部屋の扉からそっと顔を出したが、玄関までは来なかった。

「え？ あたしあなたと何か約束しました？」

「いや・・・そのドライブの約束を。」

「あ・・・そういえばそんな約束してた気もするけど・・・ごめんなさい。社交辞令みたいなもんよ。」

僕はショックだった。社交辞令・・・だって今までだって何回もデートしてきたはずなのに・・・なんで今更社交辞令なんだ？

「須藤さん、今日都合が悪いのならま今度でいいですよ。僕は構いませんから。」

「いえ、そういうんじゃない。今度も次もないの。あなたキモいから早く帰って！！しつこいと人呼びますっ！！」

ガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！ガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！ガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！

そこへどこからか彼女に電話が入ったようだった。

「はい・・・はい・・・すみません。。色々あって行けなくて。。はい、今朝はどうも私、混乱してるので今からすぐ伺います。」

そうだ。そうなんだ。彼女は何か考え事をして混乱してるだけなんだ。落ち着けばきつとまた・・・

「あなたまだいたの？ 今日、うちのパパがいないの知っててわざと来たの？ あなたストーカー？ あたしが警察呼ぶ前に早く帰って!!」

何でこうなるんだろう。。？

やっぱり今までのことは全て彼女の気の迷いだったんだろうか。。

第20話 本当の気持ち？

「なるほど・・・それであなたは電話が終るとすぐにうちに駆け込んできたというわけですね？」

「はい。。あの人がまだ玄関先にいるかいなかのうちに裏口から出てきました。」

「そうでしたか・・・」

カウンセラーは深いため息をついた。

「あの・・・私、何か間違ったことしたでしょうか？」

「うーん・・・ポイントはやはりあなたが僕の所に定期的に来なかったことなんですが・・・それを予測できなかった私にも責任があるのかもしれない。」

「先生、そんな不安になるようなこと言わないで下さい。一体あたしに何があったんですか？」

「では・・・隠していてもしょうがありませんから言いましょう。」

「は、はい・・・」

カウンセラーはゆりかに向って真っ直ぐに向き直り、おだやかに話し始めた。

「実はですね、3ヶ月前、あなたに暗示をかけたのです。」

「暗示って・・・催眠術とかですか？」

「そう・・・あなたの精神はあのときかなり重症でした。ことに、あなたが過去にお付き合いされた男性たちとのトラウマが、あなた

の生活全体に重くのしかかり、現実逃避と絶望が交錯していました。」

「はい・・・」

「須藤さん、あなたはあのとき言いましたよね？『男って誰も信用できない。そんな男を愛する女も信じられない。なんでみんなは平気な顔で暮らしているの？』みんなウソや騙しあいや世間体の中で生活して何が面白いの？』って。」

「はい。。憶えています。」

「今でもそう思ってますか？」

「え・・・？いえ・・・その・・・はい。少しは。」

「以前よりはそんな思いは和らいだんですか？」

「はい・・・なぜかわかりませんが、3ヶ月前のような、かたくなに思いつめてた感情は今はないような。。。」

うむ。。全く振り出しに戻ったわけでもなさそうだ。。

カウンセラーは再び穏やかに話し続ける。

「あのとき私は、まずあなたに人間不信、特に男性に対して偏見を持たないようにするために暗示をかけようと思いました。というのも、あなたはあの時点で、男性とすれ違うことすらできずに、外にもろくに出かけられない状態だったからです。」

「ええ・・・そうでした。」

「だから私はあなたに対して、男性を怖がらない暗示をかけました。」

「そうだったんですか。。。」

「それだけではありません。単にそれだけなら怖がらないだけで男性への不信任は募ります。ですから私は追加の暗示として、あなたが今までに会ったことのないタイプの男性に興味を持つように指示したのです。」

「でもそれって・・・もし会った人が変質者とかだったらどうするんですか？」

「はい。ですから更に細かい暗示もかけましたよ。あなたに1番最初に、優しく触れてくれた人。イケメンではない人。あなたに対して一生懸命何かをしてくれている人。そういう人が現れたときに、あなたは心身共に癒されていくようにしたのです。」

「なぜそこまでするんです？だってそんなの偽りじゃないですか！」

「失礼だが、以前ここで話してくれた内容から察すると、あなたは過去、あまり良い男性と巡り逢っていません。全員同じようなタイプで、2枚目でクールで思いやりに欠ける。でも世の中の男性はそれだけでありません。あなたはそんな男しか知らなかっただけで、世の中全体の男性に不信感を抱いてしまっていた。私はそこを知ってもらいたかったのです。」

「でもなぜ暗示の条件にイケメンではいけないのですか？」

「イケメンは自信過剰だからです。人を服従させたり、他人を低く見るのです。」

「たしかに・・・そんなことばかりでした。でも・・・」

「でも？」

「森田さんて人はすごく汗っかきで見た感じオドオドしてて気持ち悪かったんですけど・・・どうしてあたしがそんな人に。」

「さっき読ませてもらった日記で全てわかりましたよ。あなたはいい人に興味を持ったようだ。一見、ドジな男性のようだが、あなたに対しては真剣だ。最初の出会いもあなたの服に飲み物がかかったのを拭いてくれたことから始まっている。」

「あ・・・そうだ。そうだったんだ。あるとき彼があたしに触れたから。」

「それだけが理由じゃありません。その行為に対して、あなたは彼に優しさを感じたからです。」

「本当にそうなんですか？今はただ近くに來てもらいたくないと思ってるんですけど。」

「そこが私にもミスがありました。あなたの日記だと、毎週かかさずデートをする間柄になってますよね。1ヶ月で私は暗示を解くは

ずでした。それならば、深い仲になる前に歯止めがきくからです。でも予想以上にあなたは彼に出会ったのが早かった。なにせ、ここを出てから6時間後には彼と接触してるわけですから。」

「そしてあたしがここに3ヶ月も来なかった。。。。」

「ということになりますので、今に至っているわけです。でも私の責任でもありますので。特に相手の男性にしてみれば随分お気の毒なことをしてしまいましたね。彼の方もかなり混乱していることでしょう。」

「なぜ急に今朝、暗示が解けたんですか？」

「万が一のために、どんなケースにおいても3ヶ月経つと自動的に解けるようになっていいるのです。」

「そうだったんですか。私が今朝起きて日付と時間を確認した瞬間、何かが冷めていったような孤独感に襲われたのはそのせいだったんですね。」

「しかし須藤さん、あなたの精神状態は良くなってきてますよ。全てが元に逆戻りしたわけではありません。」

「一体私、これからどうすれば。。。？森田さんにどう言えば。。。？」

「暗示が解けたからといって、あなたは彼の全てが嫌になったんですか？今までの彼との記憶は残っているんでしょう？」

「それは・・・ありますけど・・・なぜあんなことしたのか。見た目じゃ絶対パスする人なのに。」

「それがいけないんですよ。もっと彼の内面を見てあげなさい。暗示にかかっていたときのあなたは、彼をよく理解してたはずですよ。」

「先生には失礼ですけど・・・私は所詮、催眠術なんかで騙されただけじゃないですか。その効力はなくなった以上、偽りの世界は演じられません。」

「別に無理に演じなくてもいいですよ。ただ、私はあなたに彼を紹介したわけではありません。あなたが選んだのです。あなたが彼の

優しさに惹かれていったのです。それは紛れもなく、あなたと彼の偽りのない世界だと思います。それに。。」

「それに？」

「それに私は、出会いのきっかけについてはは暗示をかけましたが、継続性については全く手をかけていません。あなたが彼に飽きるか幻滅したなら、この恋は成立していなかったと思いますね。」

第21話 再会の行方

●須藤ゆりかの手記より

あたしは心身共に疲れ果てていた。

カウンセリングを3ヶ月ぶりに行ったあとの3日間、仕事も休んで食事の時間以外は部屋からも出なかった。

そんなあたしを見て、両親が心配しているのは充分わかっていたけれど、空元気に笑顔を振りまく気力さえなかった。そして親たちもあたしに対しては、腫れ物でもそっと触るように言葉を選びながら話しかけてくる始末だった。

「ゆ・・・ゆりか、買い物行くけど・・・一緒に行かない？無理にとは言わないけど。。」と母。

「うん・・・そうしょっかな。気晴らしにもなるかもしれないし。」
あたしがこう言うと言母はとても喜んだ。

「そうよ。そうでなくちゃ！たまには外の空気吸わなきゃね！」

気晴らしになるとは到底思えなかった。

ただ、ここ数日、両親に心配ばかりかけていたから、あたしの方から気を使っただけだった。

気がならないまま、漠然と夕飯の買い物を済ませ、あたしは別行

動がしたいと母に主張した。

「ママあたし、少しひとりで散歩したいから先に帰ってて。」

「ゆりか・・・」

「心配しないで。あたしは大丈夫だから。」

「じ・・・じゃあ寒いから早めに帰って来るのよ。」

「うん。」

こうしてあたしは遊歩道をゆっくりと歩き始める。とにかく静かに何も考えず、ただ歩いてみたかった。木枯らしが吹いていた。

心身共に疲れていたあたしには、この寒さが特に身にしてみた。

なんだか体がだるくなってきた。それに熱っぽい。体力のない自分が情けない。

別に目的もなく歩いていたはずなのに、無意識的になのか、気がつくると自宅の近所とは違う別の見慣れた場所を歩いていた。

「あっ・・・ここは。。森田さんの・・・」

そう、あたしは彼のアパートの近くまで歩いて来ていたのだった。そして見覚えのある顔が何か買い物袋を提げてこちらに近づいて来る。

それはまさに彼。森田さんだった。

あたしの心臓がドクンと大きな脈をうった。彼は近視なので、まだあたしに気づいてないようだ。どうしよう・・・どこかに隠れようか。。でもこんな道端でそんな場所はない。それよりも何よりも、あたしの意識がもうろうとなってきた。

急に立ちくらみが起きて、足元がフラフラして立っていられなくなった。

その場にしゃがみこむあたしがいた。

そして耳の遠くから声が聴こえたような気がした。

「す・須藤さんっ！ど、どうしました？須藤さんしっかり！」

第22話 看病の結末

●森田卓の手記より

僕は焦った。突然、須藤さんが目の前で倒れて一体どうすればいいのか悩んだ。

救急車を呼ぶことも頭によぎったけど、来るまでには時間がかかる。こんな寒空の中で彼女を放置しておくわけにはいかない。

彼女は小刻みに震えている。そうだ、まずは彼女を暖めないと。。

僕のアパートはすぐ目の前だった。

ハテ？須藤さんは僕に会うつもりで来たのかな？

いや、この前あれだけ僕を嫌ってたんだからそんなことは・・でも理由はともかく、彼女を部屋まで連れて行こう。。

僕は彼女に肩を貸してみたが、意識が朦朧をしている上に足元もおぼつかない。

ほとんど抱きかかえるような格好で、なんとか彼女を僕の部屋にあげた。

あ・須藤さん、熱がある。。

僕は自分の即席ベッドに彼女を寝かせた。

部屋も暖かくしなくちゃ。。

僕は半年前の春先まで使っていたファンヒーターを押入れから引っ張り出した。

灯油も玄関に半年前の残りが少しある。

よしっ！これでなんとかなりそうだ！

スイッチを入れて点火した瞬間は少し匂ったが、順調に部屋の温度は上がっていった。

僕が次にはることは・・えっと・・あ、そうだ！何か暖かいものを食べさせてあげればいいんだ！でもそんな食材うちにあったけなあ・・？

そのとき僕は戸棚からいいものを発見した。

それはレトルトのおかゆ。。。僕が数ヶ月前、風邪で寝込んだときに食べていた残り在庫だ。この玉子がゆはまだ封も切られていないし、使える！

僕は台所でお湯を沸かして、レトルト食材を袋のままお湯の中につけ込んだ。

そういえば、昨日りんごも買っておいたはずだ。それもあとで皮もむいてあげよう。準備だけ先にしておこう。

数分後、彼女はゆっくり目を覚ました。

「ハッ？（〃。〃。〃）！！ここは・・」

「気づかれたようですね。まだゆっくりして下さい。」

「なんであたしがあなたの部屋に・・あ、そっか。あたし倒れちゃったのね。」

「す、すいません。救急車呼ぶのもどうかと思ひまして・・」

「あたし・・帰ります。お邪魔しました・・うつ。」

急いで立ち上がりとした彼女に立ちくらみが襲ったようだった。「いけません。まだ落ち着くまで横になって下さい。僕の汚いベツドですみませんが・・」

「汚いってゆうか・なんか臭いわ。」

「Σ―11（▽；）―1・・・すいません。そこは何とか我慢を。」

「じゃもうちょっとだけいるわ。あまりこっち来ないでね。」

「・・・はい。。でも、今玉子がゆが出来ましたんで持ってきてますね。」

「え・・・？」

僕は袋からおかゆを開けどんぶりに盛った。

僕ひとりの部屋には自分の茶碗ひとつしかなかったし、それはまだ台所で洗ってないまま放置していた。あとは平皿数個だけ。もうどんぶりしかなかった。

「すいません。こんなのしかなくて・・・でも暖まりますから食べて下さい。」

僕はベッドのそばにテーブルを移動して、そこに玉子がゆを置いた。

「これ、あなたが味付けして作ったの？」

「いえ、レトルトのやつです。たまたま買っておいたのがあったんです。」

「そう・・・あなたはいつもこのどんぶりでご飯食べてるの？」

「いえいえ、決してこれでご飯は食べてないです。自分の茶碗がありますから。このどんぶりの役目は、作ったおかずを詰めてラップして冷蔵庫に入れておくためのものです。」

「そんな必死に説明しなくてもいいわよ別に。」

「あ・・・そ、そうですね。アハハハ・・・」

彼女はどんぶりのおかゆをじっと見つめていた。

「僕がそばにいと、きっと食べづらいですよねw 僕、向こうで洗い物してますんで、ゆっくり食べて下さい。もし良ければ、りんごもあるんで。。」

そう言って僕はそそくさと台所へ移動して作業をしようとした。すると、

「ねえちよつと。。。」「須藤さんが僕に話しかけてきた。

「はい、何か？」僕はおどおどして返事をしていた。小心者の僕では、そうならざるを得なかった。今や、明らかに彼女の口調や態度が以前に比べて180度変わってしまったからだ。

「ねえ、あなたがいくら食べろって言ったってハシもレンゲもないじゃない。。」

「あ！そうだった。ごめんなさい。今すぐに・・・」
ちようどタイミングよく、コンビニでカップ麺を買ったときにもらった割り箸が1膳あった。

「須藤さん、こ・・・これを。。」

「おかゆはレンゲの方が食べやすいんだけど・・・ないなら仕方ないわよね。」

そう言いながらも、なんとか彼女はゆっくり食べ始めてくれた。部屋もだいぶ暖まってきて、僕もじんわり汗ばんできた。どうやら彼女も同じだったようだ。

「εー（；ーωーA フウ：部屋の中もあつくなくなったわね。おかゆで体が暖まったせいもあるし・・・ちよつと1枚脱がせてね。」

「あ・・・いや。。はいご自由に。」僕は動揺しながらもそう言うしかなかった。

彼女は更に、中に着ている服の胸元も緩めた。

「あついわ・・・熱っぽいせいもあるのかもね。。」

「あの・・・須藤さん・・・？」

「・・・はい。」

「聞いても・・・いいですか・・・？」

「今はイヤ！」

「わかりました。。」

僕はすぐに質問を諦めた。損な性格だよ、僕って。。

●須藤ゆりかの手記より

森田さんが聞きたいことは充分にわかっていた。なぜ突然、森田さんを遠ざけるようになったのか。でもあたしは、そのときは拒否するしかなかった。彼とこの数ヶ月、楽しく付き合ってた記憶はちゃんとある。確かにそのときは楽しかった・・・と思う。でも・・・今は彼に対する感情など何もない。むしろ嫌悪感が強い。今、こうして倒れたあたしをここまで看病してくれているのには感謝しなくちゃいけないんだろうけど・・・でもそんな気になれない。あたしってこんなに嫌な女になっちゃったんだろうか。。。

そのとき突然、彼の部屋の玄関から人の声が聞こえた。

「警察です。職務質問です。ドアを開けなさい。」

「は??」彼は面食らったように驚いていた。

そしてドアを開けるといきなり2人の警察官が部屋に入ってきた。

「お嬢さん、大丈夫ですか？」

「え?は・・・はい。まあ。。。」

「ちょっと汗ばんでますね。この男にイタズラされてたんじゃないですか？」

森田さんがびっくりして反論した。

「ちょっと・・・ちょっと待って下さい。僕がなんでそんなことを！」

「近所から通報があったんですよ。あんたがぐったりした女性を部屋までかついで連れてったってね。これは犯罪だよ君！」

「いやそれは誤解・・・」

「ほら。お嬢さんの衣服の乱れが物語っている。」

「いえ、それは彼女が部屋が暑くて。。。」

「それにこの果物ナイフ。これで彼女を脅かしながら。。とんでもない野郎だ！」

「それはリンゴを剥いて・・・」森田さんが小声で何を言おうが警官は聞く耳持たずで、最後にはドラマでもよく使われる決まりゼリフ

を言った。

「言い分があるなら暑で聞くから同行しなさい。」

あつという間の逮捕劇で、彼は連行されて行ってしまった。

あたしはもうひとりの警官に自宅まで送ってもらった。

「お嬢さんにも後ほど、あらためて事情を伺いますのでよろしくお願ひします。」

「。。。。」

あたしは返事ができなかった。いくら冷めてしまった仲とはいえ、あの場ですぐ森田さんを弁護できなかった自分がどうしようもなく許せなかった。

第23話 第3者登場

●森田卓の手記より

なんとか一晩泊まっただけで僕は警察から開放された。

須藤さんがあとから来て、詳しい事情を説明してくれたそうだ。

全くとんだ災難とはこのことだよ。厄年でもないのについてない。

近所の人の通報って誰なんだろう？隣の1人暮らしのばあちゃんかな？

それとも反対となりの出戻りおばさんかな？

どっちも普段から意地悪そうだし・・・これから顔合わすのやだなあ。

開放されすぐ、彼女にお礼を言おうと思ったけど、すでに彼女は帰ったあと。

自宅へ挨拶に行くべきか、僕はその場で迷っていた。

でもそのとき、おまわりさんが彼女から僕への伝言を受けていた。
「あんたに言っとくように頼まれたよ。『看病してくれて感謝してるけどもう会う気はないので家にも来なくていいです。』ってさ。」
「はぁ・・・そうですか。。。」

僕はトボトボと歩きながら家路に向った。
最初は何も考えられずに呆然と歩いていた。
でも徐々に悲しみがこみ上げてきた。

ほんとのほんとに嫌われちゃったんだな。
やっぱ、ドジばっかしてたし、こんな性格にも嫌気が差したんだろ
うな。。

もう須藤さんの家にも行けないや。。
なんだか一気に離れて違った世界の人になっちゃったみたいだ。。
いや、これが実際の普通の世界なのかな。。

僕はいつの間にか泣きながら歩いていた。
須藤さんとの回想シーンが頭の中でグルグル巡っていた。

失恋したときって、みんなこんな気持ちになるのかな。。

この寒空に、僕は涙も拭かずに歩き続けている。
舗道ですれ違う人はみんな僕を見るなり、気持ち悪がって遠回りに
避けた。

それでも僕は構わなかった。今の感情を押し殺すなんてできない。

ひとりの小さな女の子が突然後ろからツンツン足元をつついてき
た。さっきすれ違った親子のひとりのようだ。

「ね、おじちゃん。」

「・・・おじちゃんて・・・」

まあこの子から見ればおかしくもない。僕もそれなりの『ミテクレ』だし。

「はいこれ。ハナいっぱい出てるからふいてね。」

そう言って、ティッシュ手渡してくれた。少し遠くで母親も見ている。

そうだった。全然気にせず歩いていたせいで、あおっぱなが長く伸びて地面まで届きそうになっていた。

これじゃみんな避けるはずだよ。。

「ありがとうね。ママにお礼言っただね。」

「これ、まりのだもん。ママのじゃないよ。」

「え・・・？」

女の子は自分が持っているプリキュアのちっちゃなポーチからティッシュを見せてくれた。

「ほらー。ねっ！」

そのとき遠くから見えていた母親の声が聞こえてきた。

「まりちゃん、早く戻って来なさい。早く早く！」

いかにも迷惑そうに、僕をげんなりな顔で見ている。

そうだったんだ。この子はこんな小さいのに自分の意志で知らない大人に。。

「ごめんね、まりちゃん。ほんとありがとうね。」

「うん。じゃおじちゃんバイバイ！」

なんだか恥ずかしくなってきたよ。。

一方、須藤ゆりかには新しい展開が待っていた。

●彼女の手記より

熱が下がって数日後、体調も良くなったあたしの家に宅配便がやってきた。

「あのー。お荷物をお届けに来たんですが・・僕のそそうで箱の角がつぶれちゃったんです。本当に申し訳ありませんっ。」

その男の人は深々とおじぎをした。

「いえ、中身さえ大丈夫だったら箱なんて気にしませんから。」

「そうですか、それなら安心しましたが、以後気をつけますので、どうかお許し下さい。」

あまりにも丁寧な人なので、あたしは思わず笑ってしまった。

「では・・お渡しますが・・少し重いですから気をつけて下さい。」

」

「え、ええ・・あっ!!」

あたしの想像よりはるかに重かった荷物は、あたしの手と一緒に、床に叩き付けられそうになった。

「あぶないっ!!」とっさに出た宅配便の人の手。

あたしの腕の下から支えてくれて、なんとか荷物は壊れずに無事だった。

でも彼の手と、あたしの手が思い切り重なってしまった。

少し動揺したけど笑顔でお礼を言った。

「どうもありがとうございます。」

「いえ・・そんな・・あ、あのー。」

「はい?」彼の方は明らかに動揺しているように見えた。

「あのー。初対面でなんですが・・もしよろしければ僕とお付き合ってもらえないでしょうか?」

「!?!?!?!」

「ひ・・一目惚れし・・しちゃったみたいです・・僕。」

突然のことに衝撃を受けた。

でも・・ルックスは悪くない。

しかしゆりかは知らなかった。
この男もゆりかと同じクリニックスで、暗示をかけられている最中であることを。

第24話 初レポート

●さくみちしょうじ作道昌吾の手記より

カウンセラーから、毎日の日記をこまめに書くように指示された。普段、日記なんて書いたことのない僕が、いきなり書けと言われても何をどう書けばいいのか見当もつかなかった。昨日までは。。。。

今日、僕には素晴らしい出会いがあった。しかも仕事中に！

いつものように宅配業をソツなくこなしていると、玄関先にすごい美人の女性が出てきた。

僕が彼女に荷物を手渡したとき、その女性がバランスを崩し、落としたそうになったので、とっさに僕の腕を差し出して支えてあげた。彼女と僕の手が重なったとき、突然の衝撃が僕に走った。

彼女が照れて少し赤らんだ顔を目の前で見ていると、僕は今まで言ったこともないセリフをすでに発していた。

「あのー。初対面でなんですが・・・もしよろしければ僕とお付き合ってもらえないでしょうか？」

彼女も相当驚いたのは僕にも見てとれた。

僕はなぜかお構いなしに自分勝手に次の言葉をしゃべっていた。

今、この瞬間に一目ぼれしてしまったことを。

「あの・・・いきなりそう言われましても・・・私。」と彼女。

そりゃ当然だろう。僕が逆の立場でも同じことを言う。

「す、すいません。知らない人にこんなこと言われてびっくりされるのも無理ないと思いますけど・・・僕も言わずにはいれなかった

んです。黙っていたらあとで絶対後悔すると思って。」

「はぁ・・・でも私、しばらく誰ともお付き合いする気にはなれなくて。」

「え・・・？それは失恋したからですか？」僕は初対面の人に平気で立ち入ったことを聞いてしまう。

「・・・なぜそんなことを聞くんですか？」

「あ、気に障ったら申し訳ありません。ただ僕も以前、大失恋してそんな気持ちになっていたもんですから。」

「そう・・・今はもう平気なんですか？」

「いえ、そうとも言えなかったんですが、あなたを見た瞬間、なぜか胸につかえていたものが吹っ飛びました。」

「うまいこというのね。でも・・・その気持ちわからないわけでもないわ。」

「というと、あなたも一瞬で一目惚れを経験したことがあると？」

「ええ。。確かにありました。でも・・・でもそれは偽りで。。」

「偽り？」

「い、いえ、何でもありません。。」

「僕の気持ちに偽りは絶対ありませんので。どうかお願いします。メル友からでもいんです。」

「少し考えさせて下さい。」

「はい。それは当然だと思いますので。。」

「あの・・・失礼なこと聞くかもしれませんがごめんなさい。あなたは、お金持ちのボンボンですか？」

「?? いえ・・・全然違いますよ。金持ちなら宅配便なんてやってませんし。」

「そう・・・」

「やっぱり、女性にとってはお金持ちの男性の方が良いですよね・・・」

「いいえ、その逆です。お金持ちのボンボンはもうこりこりなの。」

「うわ、やった！なら僕には脈があるってことですね。」

「（〇へーへ〇）　ウフツ　どうかわかりませんよ。」

「僕、昌吾。作道昌吾っていいます。よろしく。」

「須藤ゆりかです。」

僕は積極的に行動に出た。

「これ、僕のケータイアドレスと番号です。良かったら連絡下さい。」

「一応、受け取っておきますけど・・・まだ私自身の心の整理もついでないので。」

「はい。わかってます。」

僕はこうして彼女の家を出た。まだ配達はたくさんあるというのに、僕の心は浮かれていた。作業も波に乗った。仕事がこんなに楽しいなんて！前の失恋がウソのようだ！

でもこれからが本当にわくわくする。須藤ゆりかさんか。。

一体、どんな内面を持った人なんだろう？

返信が来たとき、僕はこれからどんな付き合い方をすればいいんだろう？

カウンセラーに相談してみようかな？この日記だって読まれるわけだし。

とにかく細心の注意を払っていかなければ。。。

不思議だけど、僕のような同性愛者が異性を突然好きになるなんて、今回生まれて初めてのことももん。。。

第25話

ランチタイムにて

●須藤ゆりかの手記より

「うん、おいしい！このコリコリの食感がたまらないわね。」

美智代がそう言いながら新鮮なカンパチの握りを口にしている。

この日はあたしが美智代をランチに誘った。

「何食べる？」って聞いたら美智代はすぐに

「回転寿司!!」と叫んだ。こういうところはまるで子供と変わらない。

「だってここんどこ、外食は肉ばっかしなのよ。」

「なんで？」

「んー、こないだは昔の友達と焼肉バイキングでしょ。その前はちやんこ屋さん。」

「ちやんこ??？」

「うん、だってそんなときの合コンはマッスル系なんだもん。鍋に鶏やら豚やらモツやらごった返しててさ、みんな食うわ食うわで。」

「そして美智代もでしょ? w」

「そそ。おかげでこんなにあっちゃんってどうしてくれんのよ! って感じ。」

こういったわけで、月末の給料日前ってこともあり、1皿オール100円の回転寿司屋さんに来ている。

前にも書いたけど、この美智代は野次馬根性丸出しで、人の話になると自分の耳を3倍にも4倍にも大きくして、好奇心むき出しで話に乗ってくる人。

でも食べてるときにその能力は発揮されない。神経がしゃべることには廻らないようだ。あたしが話しかけても半分聞いているかどうかわからない。

「美智代、あたしこの前、突然告られたの。」

「いつものことじゃないの?」とあっさり彼女は答えながらも、視線は右から左へ流れてくる寿司皿を、顔は動かさないで目の玉だけで追っていた。

「でもね、初対面の人なのにいきなりだよ!」

「え? それって自慢?」美智代はイクラの軍艦巻を食べながら答え

た。

「傲慢なんかしてないよ。びっくりしたの。うちに荷物を届けに来た宅配業者の人が玄関でいきなりよ。あり得る？」

「あり得るから起こったんじゃないの。あ、ゆりか中トロ取って。」

「もう、自分で取りなさいよ！」

「だってイクラ食べてんじゃん。早く早く！中トロ流れて行っちゃう。他の人に取られちゃうよ。」

「（へーへ）はいはい。やっぱり美智代と食事しながら話すのって無理みたいね。」

「そんなことないよ。いいお寿司を見逃したくないだけよ。」

美智代はすでに中トロに手をつけていた。

「あたし・・どんな人かわからないけど、1度連絡はしようと思ってるの。」

「そうそう、それでいいのよ。何事も当たって砕けろよ！でゆりか、しょうゆ取って。」

「（ー；・・・」

「でもさあ、あの森田とかいう変な動物とあんなに楽しそうに付き合ってたのにねえ。」相変わらず、口も悪い美智代。

「あたしにもよくわからない。」

「美男子は見飽きるけど、ブサイクは飽きないってゆうのにね（＊ $\geq m \leq *$ ）ププッ」

「誰がそんなこと言ったのよ？」

「さあ、知らないけど・・うっ！」美智代が手を口と鼻を押さえた。

「どうしたの？」

「このイカわさび効きすぎ・・！（。ーA）ホロリ」

「あたしの話ちゃんと聞かない罰かもね。」

「聞いているわよお。あ、ゆりかゆりか！カリフォルニア巻取って取って！」

「（；、D、）ハア・・・」

「でもねゆりか、こう言っちゃなんだけど、森田と一緒にいたあんたが1番幸せそうに見えたよ。キモい男だったけど、ゆりかとは意外と長く付き合っていていきそうだって思ってたんだよ。あたしも翔子もね。」

「そうなんだ。。。」

「あ、でも終ったことは仕方ないからね。これからの積極性が大事よ！」

「うん。あたしもそう思えるようになってきたの。その都度凹んでも自分の神経が参っちゃうもん。」

「そうよ。ゆりか、揚だしどうふ取って。」

「あ、うん。。」

相変わらず人づかいが荒い美智代だった。

そんなとき、ひとりの男性があたしたちの3席ほどとなりのに座った。

あたしは少しチラ見しただけで誰であるかすぐわかった。

森田さんだ。。。どうしよう。。。

第26話 恐怖の回転寿司

●森田卓の手記より

どのくらいぶりだろう？半年ぶりくらいかな。回転寿司に来たのなんて。

この日、僕は買出しに来ていた。給料も入ったばかりだし、部屋のカップ麺たちも底をついてきたので、激安ショップでケースごとまとめ買いにやってきたのだ。

時間も昼2時をまわっていたし、帰宅までに空腹も我慢できない。というわけで、どうせ外食するなら僕の食生活の基盤であるインス

タント麺から離れようと思って、久々に寿司屋さんに来たのだった。

「へい、らっしゃい！何か握って欲しいのあったら遠慮なく言って下さいよ！」

「は??」

僕は一瞬とまどった。だって回転寿司なんだからお客が黙ってたって寿司が勝手に廻ってくるものだとか確信してたから。。

レーンを見ると、確かに多少は廻ってはいるが、もう何回転もしてのような半分乾いたネタが寂しそうに流れていた。しかもまばらに転々としか廻って来ない。

理由はすぐにわかった。もう2時過ぎでお客さんも数えるほどしかない。新鮮なネタを作りまくって流してももしようがないからだ。

（；、ㇿ、）　ハア・・参ったなあ。注文するの苦手なんだよなあ。

すると、バイトらしき女の子が元気よく僕のすわった後ろから話かけてきた。

「お客様、貝汁・荒汁・かに汁・赤だしがありますが、ご注文はよろしかったでしょうか？」

（！o！）　オオ！　わざわざ聞きに来てくれるんだ。こりゃいいや。

「じゃその・・・えと何だっけ?・・・な、なめこ汁ひとつ。」

小心者の僕は半分照れながら注文する。すると、

「あのーお客さん、なめこ汁はございませんがー！」

女の子のでっかい声が店内に響く。

僕は顔が真っ赤になった。

「え？あ・・・なかったつけ・・・えと・・・さっきあなた何て言いましたつけ・・・？」

「貝汁・荒汁・かに汁・赤だしと言いましたよ？」

「ああ・・・そうでしたね。す、すみません。じゃその中だしを。」

「・・・（「」∇「」；）赤だしでいいんですね？」女の子が聞き返す。

「は、はい。。僕今なんて言いました？」

「・・・中だし。」彼女は冷たい目線で僕を見据えていた。

僕は極度の緊張状態に陥っていた。

だから人前でしゃべるのはイヤなんだよなあ・・・

せめてウケてくれたらいいのに。

でも僕が言うといつもみんな引いちゃうだけだし。。

そのとき、僕の席から3つほど離れたところに座っている女性がクスクス笑っているのに気づいた。こっちをチラ見しているので、きっと僕のことを笑ってるのかもしれない。まあいいことだよ。冷めた目で見られるよりはさ。

・・・ん？なんか見覚えがあるぞ・・・あの笑ってる人。。

ひょっとして以前合コンしたときの。。

それより僕がもっとびっくりしたのは、その女性の向こう隣に座っている人だった。

Σ―11（∇「」；）―1・・・す、須藤さん・・・

僕は顔をすぐ前向きに直し、彼女に気づかないふりをした。

彼女だってこっちを見てなかったし、気づいてないかもしれないし。いや、友達は僕に気づいたはずだ。すぐ須藤さんにしゃべるかもしれない。

どうしよう。。今さらこの店を出るわけにもいかない。

僕があれこれ迷っていると、今度は職人の店員から声がかかった。
「お客さん、まだ何も食べていないんじゃないっすか？注文して下さいよ。」

「す、すみません。。じゃその・・・えと・・・かんぱちを・・・」と言いかけたとき、

「あなごちよーだい！！」と須藤さんの友達が、僕よりはるかに大きな声でオーダーした。

「へい！あなご1丁！」

なんでだあゝ！こっちの方が早く言ったじゃないかあゝ！

僕は心の中では反論していたが、むろんそれだけの話。

店員に文句を言う度胸なんて全くない。

「お客さんも言って下さいよー！」とまたまた店員が僕にふる。

さっき言ったんだよお！（T◇T）うおおおおお！！！！

「お待ちどうさまでした。赤だしです。」

これはホントに助かった。いいタイミングで来たよ。

これ飲んで一息入れて、そのあとは気合でネタの注文だっ！！

僕は赤だしをズズツとすすった。だが、それは猫舌の僕にとってはものすごく熱い汁だった。勢いよく飲んだ分、勢いよくリバーズした。

「、；；…；；；、；…；；、（；。；ヰ；。；）ブツ！！！！あつちいいいい！！」

勢いよく飛び出た赤だしは、たまたまレーンを廻ってきた納豆巻

にもかかってしまった。

「お客さん、困りますねえ、この皿の代金も払ってもらいますからね！」

「す、すみません。」

僕はまたチラッと横を見た。須藤さんの友達が腹をかかえてウケまくっていた。

須藤さんとは・・・ついに僕と視線が合ってしまった。

僕は気が動転した。この場をしのぐには、とにかく食べて気を紛らわそう。とっさにそう思った僕は、何回転も廻っている古いネタもお構いなしに手にとって、夢中で口に詰め込み始めた。

よしっ！少し度胸が出てきたぞ！注文してみよう。

「お、おとおくあはいっ！」

「・・・へ??あのーお客さん、口に入れすぎですよ。ちゃんと飲み込んでから注文して下さいよ。」

またまた恥をかいてしまった・・・（Д」；；

そしてまたまたとに笑われている。

緊張の連続の中、その後なんとか口の中いっぱい寿司を飲み込んだ。

今度はちゃんと胃に入れたから大丈夫だ。

「お、大トロ下さいっ！」

「へいまいど！大トロ1丁！」

やったああああ1!o(<▽>)9”うっしや♪ひとりで注文できたあああ！

「お客さん、大トロだけ高級ネタなんで、1貫1000円です。2貫握ってもよろしいですか？」

ガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！ガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！

「んと・・1貫で・・いいです。」僕はまた小声に戻ってしまった。

それを見ていた須藤さんの友達はまだまた笑いをこらえるのが大変そうで、体全体が小刻みに震えていた。

須藤さん本人と言えば・・僕から顔をそむけているだけだった。

さすがにもうここで食べるムードじゃない。僕はおいそすることにした。

「毎度ありがとうございます。1800円になります。」

またまたガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！

ほんの少ししか食べてないのに・・赤だして汚れた納豆巻は100円だったけど、大トロが高すぎた。。お金がもったいないや。。そのとき気づいた。

σ（、、Ⅱ）ン！ト・・あらら？ちとサイフが。。。

「すみません。。車の中にサイフがあると思うんで取ってきます。。」

「お客さん、それは困ります。警察呼びますからこのままここにいて下さい。」

と会計の女の子にきっぱり言われてしまった。今までのドジで完全

に店員にも見下されてしまったんだ。

「絶対、逃げたりしませんから・・お願いです。車に行かせて下さい。」

「店長どうしますか？」振り返るとそこには背の高い男性が立っていた。

「じゃ、君がこの人の車まで一緒について行きなさい。」

「工エエエ（´Д、）エエエ工」

この女の子は僕を心底嫌がっているようだった。（。Д、）。。

「じゃ私が行こう。」と店長がすぐ切り替えた。

「すみません。助かります！」この言葉を僕と女の子が同時にしゃべった。

全く同じセリフなのに、お互いの意味あいが全然違うのは誰にでもわかることだろう。（；´Д、）ハア。。

いくら車の中を探してもサイフは見当たらなかった。

焦りまくる僕。けわしい顔になってくる店長。

「しょうがないね。警察に行ってもらおうよ。」

「絶対、あったんです。。無銭飲食する気なんて全然なかったんです。」

「それはわかるさ。車の中にこれだけラーメンが積んであるんだ。

どっかの店で買って来たんでしょう。でもうちも商売だからね。許すわけにはいかない。」

「そ・・そうですよね。。ついてないや。。ホントに僕って何もかも。」

そのとき、後ろから僕の肩を叩いた人がいた。

振り返るとそこには須藤さんが立っていた。となりにはウケまくっていた友達もいる。

「これで払っていいよ。」須藤さんはうつむき加源で僕に2000

円を手渡してくれた。

「あ、ありがとうございます。あとでちゃんとお返ししますから。」

「いいえ、あげるから返さなくていいです。森田さんとは・・・距離を置きたいんです。」

そう言う彼女たちは足早に立ち去ろうと歩き出した。でも途中、須藤さんが立ち止まり、僕の方に振り向いた。

「森田さん・・・あたしとあなたが付き合ってた時間は・・・全てウソなの。」

「・・・・・・・・」

「あたしは催眠術にかかったの。すべては暗示のせい。。もう覚めてしまったから・・・あなたとは付き合えない。。ごめんなさい。」

僕は立ち尽くしたまましばらく放心状態だった。

店長がポンと僕の肩を叩いた。

「気の毒だとは思うが、早くそのお金払ってくれないかね？」

僕は無言のまま、店長にお金を渡し、またその場に立ち尽くした。

はつきり言われちゃった。。

涙がじわじわ溢れてきて止まらなかった。

第27話 期待と不安と勇氣

●作道昌吾の手記より

須藤ゆりかさんの家に届け物をしてから1週間が過ぎようとしていた。

まだ彼女から何の連絡も来ない。あれから浮かれまくっていた僕の勢いも、今ではため息に変わって

いる。
そりゃそうだよな。。一方的に僕が告白して来ただけなんだもんな。
冷静に考えれば、いきなり両思いなんてなるはずもないじゃん。
自分のバカさ加減に飽きれてきたよ。

この1週間、僕は過去の大切なものを処分してきた。
少し前に別れた信利のぶとしからもらった宝物の数々。。

僕の誕生日にくれたピンクのトランクス・・

ホワイトデーにお返しでもらった信利の使用済みタオル・・

付き合って1周年記念にもらった宝石が散りばめられた高価な数珠ゆず・・

でも結局は別れてしまった。完全にフラれてしまったんだ。

そして僕が信利のために編んだマフラーも、別れると同時に返品された。

すごく辛い毎日だった。あんなに優しくかった信利に別な男ができるなんて。。

・・いや、僕が負けたんだ。僕の魅力が足りなかったんだ。
だから自然に信利の心は僕から離れて行ったんだ。。

この宝物たちも今までは捨てられなかった。

でも、カウンセラーのおかげで須藤さんに巡り逢えた。

この思いを大切にしたい。だから僕は決意したんだ。

信利関連のものは全部捨てさることを。

これから女性と付き合うのは未知の世界だけど、僕自身の再出発のために積極性が必要なんだ。凹んでではダメだ！

明日までに彼女から何も連絡が来なかったら、また家に訪問してみよう。

あ！そうだった。僕の携帯から信利の画像も削除しなくては！
たしか50枚は保存してるはずだ。

日替わりで彼のいろんな写真を待受けにしてきた日々も、もう終りにするんだ。

でもやっぱり僕の心境はおだやかではなかった。

落ち着いて座ってはいれなかった。何かしてないと・・・耐えられない。

よし！家の掃除しよう。

僕はまず、トイレ掃除から始めて、便器も舐めていいほどテカテカにした。

そのあとは換気扇にこびりついたしつこい汚れの掃除。そして風呂掃除。

部屋にも全部掃除機をかけ、明日の燃えるゴミを出す準備もした。

εー(；ーωーA フウ…いい汗かいたよ。

と、そのときメールの着信音が鳴った。

僕は素早く携帯を手にとって内容を確認した。

『こんにちは。須藤です。この前のお話の件・・・1度お会いしてゆっくりお話する機会が持ちたいと思ってます。場所と時間はそちらで決めて下さい。私が合合わせますので。ではご連絡お待ちしております。』

キタ——(。△。)—………!!——— O (≡△≡) O イ
エエエエエイ♪

僕はすぐさま返信した。

僕…『ありがとうございます。めちゃくちゃ嬉しいです。で、場所と時間ですが、今度の土曜日の正午、僕の家でランチしませんか？』
すると彼女からすぐ返信が来た。

須藤さん…『いきなり作道さんのご自宅へですか？…うーん、ちよつと考えちゃいます。』

あ、そっか。。怖がらせてしまったんだな。。

僕…『説明不足ですいません。僕、趣味が手料理なもので、良かったら食べて批評でもしていただけませんか。』

須藤さん…『へえ、男の人で料理が得意なんてすごいですね。是非、食べさせていただきたいです。どうしようかな。』

僕…『ご心配なく。明るいうちに必ず須藤さんの家まで送り届けますから。』

須藤さん…『わかりました。作道さんて、いい人そうですね。よろしく願います。』

僕…『では、土曜の11時に車で向えに行きますので待っててください。』

こうしてメールのやりとりが終った。

よしっ！頑張るぞお！今までは信利にいっぱい食べてもらっただけど、今度からは須藤ゆりかさんに喜んでもらおうと！（o^ー^

o）ウフツ

第28話 お呼ばれ

●須藤ゆりかの手記より

いよいよ今日は作道さんさくみちの自宅で食事をする日になった。

あとで本人が車で迎えに来てくれるらしい。彼のお誘いに簡単にOKしちゃったのが少し不安だった。きっと夜の食事ならたぶん断ったかもしれない。ランチのお誘いだったから・そして夕方までには家に送り届けてもらえるということだから。きっとそれが作道さんの誠実な優しさなのでしょう。私はそう判断して彼のお誘いを受けただ。うん、そうよ！そう決めたんだもの。もう迷わない！

そこへ突然1通のメールが来た。

作道さんかしら？私はすぐさま携帯を確認した。

Σ—11（▽；）——1・森田さんからだ。。。

「須藤さん、お元気ですか？この前のお寿司代、本当にいいんでしょうか？できれば僕としてはやはり、きちんと返したいのですが。」

私はこのメールを無視した。

午前11時半頃、作道さんが迎えにやってきた。

「こんにちはー。今日はホントにありがとうございます。」

「いいえ、あたしの方こそこれからご馳走になるんですもの。お礼を言わなくちゃ。」

「なにもそんなかしこまったこと言わなくていいですよお。」

「じゃあ、作道さんだって同じですよ。かしこまったことは抜きね！」

「あはは・・・はい。そうします。」

外は雨だった。私が作道さんの車に乗り込むまで、彼は自分の傘

で私を雨から守ってくれた。このちょっとした気遣いが嬉しい。
走る車の助手席で、私は彼に言った。

「なんか照れくさいわ。まるで皇室の方々をお迎えに来たみたいになんか。」

「皇室の人なら助手席じゃなくて、後部座席に案内しますよ。あはは。」

「（オハーハ） ウフツ それもそうですね。」

「僕はゆうべから緊張してあまり眠れませんでしたよ。さっき傘を持つ手が震えてたんです。気づきましたか？」

「いいえ、全然。だってあたしも緊張してて、前しか見てなかったんですもん。」

「お互い様ってやつですか。あははは。」

作道さんて爽やかそうでやさしい人・・・女性のエスコートも自然に見についてるような感じだわ。

そういえば・・・森田さんも必ず車のドアを開けてくれて、乗り込むと優しくドアを閉めてくれてたな。。

？（〃。〇。〃） ハッ！！・・・いけない！なんで今森田さんのことなんか・・・

彼とは・・・もう終わったのよ。。もう。。だいいち全然タイプじゃないんだし。

「どうしました？」作道さんが声をかけてきた。

「え？」

「いや、なんか考え事してるような感じに見えたもんで。」

「あ、ごめんなさい。なんでもないの。」

「すみません。逆に僕は、須藤さんの不安をあおってしまったのかもしれませんね。いきなり自宅に呼んだりして。」

「気にしないでいいです。もうそんな不安はないので。」

「だったらいんですが・・・僕は一人っ子なんで、自宅には母と父と

3人暮らしだったんですよ。でも今日は、父はゴルフで留守だし、母はパートに出てるんでいません。そして・・・」

「あたしは作道さんがてつきり1人暮らしなものだとはっかり・・・」

「ああ、それはすいません。説明不足で。さあ、着きました。うちはここです。」

作道さんの自宅は閑静な住宅街の中の1軒家だった。

ガレージに車を停めると、彼は私をさっきのように、傘でエスコートして玄関まで誘導してくれた。

「あれ・・・玄関の鍵があいてる。。」

彼はそっと家の中に入った。私もその後ろに続いた。

「おじゃましまーす。。」と私は小声で囁いた。

「あれまあ、いらっしやい！」

いきなり背後から言葉をかけられて飛び上がった私。

彼もびっくりして振り返るところ言った。

「ば、ばあちゃん。。もう帰って来てたの？ゲートボール大会は？」

「こんな天気にあるはずなかるが！昌吾はバカじゃなかか？」

「そ、それもそうだね（へーへ） いやはや計算が狂った。。」

「あ？なんて？昌吾。」

「い、いやなんでもないよ。ばあちゃん。」

「今日は暇になったけん、家におるよ。しかしまあ、昌吾、やっとオナゴ見つけて来ったか？」

「ばあちゃん、あの・・・悪いけど自分の部屋行ってってくれる？」

「ありやりや、そうだったそうだった。ワシとしたことが気がきかんで。お嬢ちゃん、まあゆっくりしていきなっせ。うひゃひゃひゃひゃ！」

「ちよつとばあちゃん、変な笑いしないでくれる？・・・ったくもう。。」

そう言つて、彼のおばあちゃんはこの場からいなくなった。

私は、彼のおばあちゃんの元気なキャラに可笑しくなった。

「須藤さん、さっき車の中で言いかけたことがこのことだったんです。」

「3人暮らしだったってことね？」

「さすが須藤さん。その通り！元々ばあちゃんは九州にいたんだけど、半年前にじいちゃんが死んでから、うちが引き取ったんだよ。それ以来、今は4人暮らし。」

「でもお元気そうで楽しそう。」

「それが口も達者で元気すぎて・・・；^|^A アセアセ・・・」

「（O^ー^O） ウフツ でもいいことだわ。」

「そ、そうかな・・・」

そのとき、少し遠くから声がした。

「おーい、昌吾。台所にご馳走いっぱいあつから少しもらったけんねー！」

「Σ（。▽。――）はあうっ！ばあちゃんっ！！それは須藤さんに出す料理だあああ！」

彼は一目散にキッチンへ走って行った。

私は笑いをこらえ切れずにその光景を見ていた。

第29話 昌吾とばあちゃん

●作道昌吾の手記より

ばあちゃんがキッチンで、僕の下ごしらえをしていた食材を食べていた。

「ちよつとばあちゃん、それ今のお客さんに出すやつなんだ。困るよ食べちゃ！」

「こぎゃんいっぱいあるけん、少しくらい良かるが？」

「ばあちゃんにはあとで残ったらあげるから勘弁してよお！」

「ワシに残りもんば食えとねー？なんちゅう孫かいこりゃ！」

「ごめんばあちゃん、久々の大事なお客さんなんだ。今日だけわかってよ。」

「お客さんて・・・あのオナゴはお前の好いた人じゃなかと？」

「そうだけど・・・まだ始まろうとしてるところだから。」

「ホホウ（。・。・） お前もやっとその気になったとかい。」

「どうにかね；^|^A だからばあちゃん、大人しく部屋にいてくれないかな？2、3時間くらいでいいからさ。」

「そうかもしれないけど、昼ごはんの時間じゃけん・・・」

「僕がこれからはあちゃんの分も同時に何か作るからさ。部屋で待ってて。」

「そうかい。そんならそれまで部屋でNHKのど自慢でも見てるけんね。なんか作ったら必ず持って来てや。」

「うん。わかったわかった。テレビでも観ててw」

ε—（；|ω|A フウ：やっぱあちゃんが大人しく自分の部屋にこもった。。

まだまだ元気なばあちゃんだけに、口も達者だし、勘も鋭い。気をつけないと。。

その後僕は須藤さんをリビングに案内した。

「須藤さん、ここに僕の手料理を運んで来ますから待ってて下さい。下ごしらえはできてますんで。」

僕はエプロンをしてキッチンへ行こうとした。

「あの・・・作道さん？」

「はい？」

「それ可愛いエプロンですねw」

「あ、このスヌーピーのやつ？（～ん） ムデへへ なんか恥ず

かしいな。」

「で・・・下ごしらえって、これから作るのならあたし、お手伝いしましょうか？」

「いやいや、ゲストにそんなマネはさせたくありません。まあゆっくり待って下さい。」

「ええ、ええ・・・」

「そんなに時間はかかりません。すぐにできますから。」

女性に僕の料理を食べてもらうなんて初めてのことだ。なんかドキドキする・・・

でもその一方わくわくするような気分もする。ホント不思議な感覚だ。

「はい、お待たせ。まずは最初のができましたー！」

「うわー！おいしそう！これエビマヨ？」

「はい。車えびを使いました。熱いうちに食べてみて下さい。」

僕は嬉しかった。彼女が遠慮がちにもならず、すぐに箸を取って食べてくれたからだ。

「すっごくおいしい！えびがプリプリね！味も濃厚。」

「ありがとうございます。ではゆっくり食べて下さいね。次を作ってきますから。」

「・・・え？」

「コース料理なんで、順に作りたてを食べてもらいますね。」

●須藤ゆりかの手記より

私は戸惑った。初めてのふたりの食事会。彼の手料理をいただけるという話を聞いて以来楽しみにしていた。

そして現実にエビマヨもすっごくおいしかった。なのに・・・なのに・・・

二人で一緒に食事ができない・・・（へーへ；）

彼は作り専門で運んで来るだけ・・・しかも1品になぜかすごい量・

2品目はバンバンジー、食べきれずにいるうちに3品目のカニクリ
1ミイコロツケが10個も来た。

そしてそのあとにレバニラが・・・

「あの・・・作道さん？料理がすごいボリュームで。」

「あ！すいません。気づきませんで・・・のど詰まりしちゃいますよね？スープも準備してたのにうっかり。今すぐ持ってきます。ついでにクラムチャウダーも出来上がってるんで持ってきますね！」

「そ、そういう意味じゃなくて・・・」

「あ、出す順番間違えた！レバニラの前にサーモンのカルパッチョだった！ごめんなさい。須藤さん。」

「いえ、そうじゃなくて、これだけのお料理、あたし1人じゃ食べきれないの。何人前作ってるつもりなんですか？」

「え？僕は須藤さんひとりのために・・・食べきれませんか？」

「Σ―11（▽；）――1 信じられない。。よっぽど大食漢の人じゃないと食べれない量よ？それに・・・」

「は、はあ・・・」

「ふたりだけの食事会なんだから、作道さんとご一緒に食べたいです。あたしひとりで黙々と食べてるなんて・・・」

●再び作道昌吾の手記より

僕は？（〃。〇。〃） ハッ！！とした。

しまったああ・・・そんなことに全く気づかなかったなんて・・・

・
今までは信利が相手だったからこれが普通だった。

彼はラガーマンで食欲も旺盛だった。僕の作るものはいつも豪快に食べてくれたから、毎回作るのに必死だったし、出来立てをその都度食べてもらうことで、僕自身の快感にもなっていた。

それにスタミナ料理ばかり作って量的にもこれがちょうどいいと思
い込んでいた。

でも今回は女性なんだ・・メニューの中身やボリューム的なことな
って全然考えてなかった。まして一緒に食べることなんて。。。

「すいません。全然気づかなくて・・女性に料理を作るの初めてな
んです。」

「え？以前、大失恋したという人には作ってあげたことなかったん
ですか？」

「いえ、ありまし・・いやいやいや、全然なかったですはい。今
回が初めてなんです。（「」； ヒヤリ」

「じゃあただけ特別に？」

「は、はい。」

「嬉しいけど、やっぱり一緒に食べましょうよ。」

「では・・あともう少し予定してる料理があるので、一気に作って
からここで一緒に須藤さんと食べます。」

「あと何が来るんですか？」

「えと・・天津飯と坦々麺と茶碗むしとマンゴープリンとコーヒ―
です。」

「なんか最初から和洋中がごちゃ混ぜね（「」；）しかもまだそ
んなにあるなんて。。。」

「す、すいません。」

「あ、ごめんなさい。作道さんが謝らなくていいの。お料理はとて
もおいしいの。すごく感動してます。」

「そう言っていたけると救われますが。。。」

「あ、そうよ！作道さんのおばあ様も呼んで一緒に食べましょうよ。
これだけの量、二人でも食べきれるかどうか。」

「ワシはもう来とるけん。」

僕と須藤さんが横を振り向くと、すでにばあちゃんがイスにちょこ

んと座っていた。

「（ノ　ω　）ノバタ　ばあちゃん、はやっ！」

「いい匂いに誘われてのお、昌吾が部屋に持って来るまで我慢できなかったばってん。」

「のど自慢は観終わったの？」

「それは明日やった。今日は土曜じゃけん。うひゃひゃひゃ！」

「（ノ　―　―　）ノコケッ！！ばあちゃん・じゃあ、まあいいよ。須藤さんもこう言ってくれてるし。じゃ僕はキッチンに行ってメニューを全部作り終えてきますんで。」

「おばあ様と待ってますね。」

「おばあ様だなんて・・あんたどこの上品な娘っ子かえ？こんな可愛い顔して昌吾にはもったいないのお。あひゃひゃひゃ！」

このままばあちゃんと須藤さんが二人きりでリビングにいるなんてすごく不安だ。。。

まずいな・・なんか余計なことしゃべらなければいいけど・・ペラだしなばあちゃんは。（　D₁　）；；

第30話　アットホーム

●須藤ゆりかの手記より

作道さんがブツブツ言いながらひとりでキッチンに戻って行った。リビングには私と彼のおばあ様の二人になり、先に出ているお料理を食べ始めることにした。

「おばあ様、お昼ごはんはまだなんでしょう？あたし、けっこういいただきましたので、あとはどうぞ。」

「そぎゃんか、ありがとしゃん。もう腹ペコじゃったけん。」

「あたし、全部この取り皿に分けて食べましたので、汚くないです

から。」

「そんなの全然気にしとらんとばい！ あんた病気持ちじゃなかるが？」

「え・・ええ、それはもちろん；^|^A」

「しかしまあ、この料理は年寄りにはこってりしすぎちよるばってんなあ。」

「それにすごいボリュームですもんね。」

「前菜の先付けも小鉢もなんもありやせんし・・口直しの料理もなかとなあ。」

「おばあ様、詳しいですね？」

「そりゃ昔、何年も旅館で仲居ばしちよったけんね。」

「へえ、そうだったんですかあ。重労働でしたね。」

「それにしても昌吾のハナタレめが！！」

「ハ・・ハナタレ？ (^|^;)」

「あ、違った。あのバカタレが！！」

「(ノ|ノ)ノコケッ！！」

「量ばかりこぎゃんいっぱいあって、これじゃ豚のエサに見えろ。」

「おばあさまはそうブツブツ言いながらも箸は進んでいたようだ。」

「ほんとならワシは、おしんこがないとご飯食べれんばってんが・・まあ今日はしょうがないわ。」

私はなぜか、彼のおばあ様のキャラクターがとても個性的で、もつと色々しゃべってもらいたくなった。

「でも作道さんはお料理がとても上手ですね。彼はよく家で普段から作ってるんですか？」

おばあ様はエビマヨを食べながらこう言った。

「客人が来たときだけ作っとったかの。ここしばらくは全然料理はしなかったけんが、オナゴに料理ば作りよるとは・・時代も変わったのー。」

「じゃ彼は今までどんな人にお料理を作ってたんですか？」

「ごつつくて、バカでかい男がひとり来とったばってん。」

「え・・・？男性がひとりだけ？お友達大勢とかじゃなくてですか？」

「うんにゃ、他の人は呼ばんけん。その男が食うわ食うわで、我が家の食費払ってもらいたいくらい食って行っただってん。」

「・・・へえ・・・そうなんですかあ・・・」

「でもやっとなんたが来て、昌吾もようやく普通に帰ったことを思えば、褒めてやらんといかんかね。あひゃひゃひゃ！」

「普通に帰った・・・？」

私はいまいち意味が飲み込めなかった。以前来ていたその大きな男性とは誰なんだろう？学生時代の先輩なのかしら？それともたったひとりの親友だったりして？

その後、しばらくして作道さんが、最後の料理とデザートを持ってきた。

「さあ、お待たせ！じゃあ僕もみんなと一緒に食べるかな。」

「アホか昌吾！ワシもお嬢ちゃんも腹いっぱいじゃい！」

「え？でも、この海鮮天津飯と坦々麺、自信作なんだけどな・・・」

「じゃあ作道さん、あたし残しちゃうかもしれないけど、いただきますわね。」

「は、はいっ！ご遠慮なくどうぞ。」

「遠慮は全然してないんだけどね・・・（へーへ；）」

「このお嬢ちゃんと、前のバカでかい男の胃袋と一緒に考えてどうするとね？全くうちの孫は・・・」

「Σ―11（▽、；）――1ばあちゃん・・・前の人のこと、須藤さんにしゃべったの？」

「よう食った男じゃけん、ワシの印象にも残つとるよって。」

「ガ――ΣΣ（Δ。；）――ン！！！」

「作道さん、そんなにショックなことなの？おばあ様は別にそんな詳しいことなんて話されてないですよ。」

「そ・・・そうでしたか。」

なんかワケありのようだけど、私は無理に聞かないことにした。私自身だって、人に穿り出されたくない過去がある。

それは誰にでもあるものなんだ。それを引きずってはいつまでも前には進まないもの。

「悪いけどワシ、屁えこくけんね。」

「え!?! え!?! ばあちゃんいきなり何言うんだよ! ここじゃなくて・
・」

ブビッ!! ブフォオオオオ!!

「おう（ノ≧◇≦）のう!?! 遅かった。」

「う・・・! おばあ様、すごい。（ ー ； 」

イスに座っていたおばあ様は、ガスの勢いで体が持ち上がったように見えたので、私は仰天した。

「あー、すっきり爽快!」

「だろうね・・・ばあちゃん（ ー ー ∇ ー ー ； ）」

みんなでご飯を食べたあとの片付けは私も手伝った。彼は断ってきたが、そこは私が譲らなかった。

ふたりで皿洗いをしているときに1番彼と話をしたような気がする。

「なんか楽しいね。ふたりで同じ作業なんかしてる。」

「すみません。須藤さんに色々やってもらっちゃって。でも・・・僕も今が1番楽しいです。」

「（O^ー^O） ウフツ なんかキッチンでこうしていると新婚さんになったみたい。」

「“○（〃 ー ー ∇ ー ー 〃）○”ドキドキ・・・そうですね。」

「おばあ様も楽しい方だし、アットホームな家庭でうらやましい。」

「いや、ばあちゃんは元気すぎて暴走するんです。」

「でも作道さんはおばあ様に優しいわ。」

「ええ・・まあ、子供のころからよく可愛がってくれましたし、口は達者ですが良い人なんです。」

「でも今度は本当にふたりだけで、そして外で一緒にお食事しませんか？」

「はい！是非！須藤さんから誘ってくれるなんて光栄です！」

「作道さんのお料理、とってもおいしかったですよ。食べきれなかったけど味に感動しました。」

「お持ち帰りも用意しましたんで、自宅へ帰ってから召し上がって下さい。」

「（＊≧m≦＊）クスッ。しっかりしてるのねw」

帰りも約束通り、家まで作道さんの車で送ってもらった。

雨はまだ止んでなかったので、彼はまた玄関先まで傘でエスコートしてくれた。

そしてそのとき・・私がお礼を言おうと振り返った瞬間、思いがけない彼からのキス。。。

でもそれはほんの1秒以内の軽いフレンチキス。

彼は優しく微笑んでいた。

「ではまた、来週の土曜日に。」

「はい。」

私は気分が学生時代に戻って、たった今初恋を経験しているような感覚になっていた。

作道さんの爽やかで優しいキス。。軽く微笑みながら瞬間で終わってしまうキスだけど、

口元が離れてからも、お互いの目と目は反れないでじっと合っている。すごく余韻が残るキス。。。

私は元気よく玄関に入った。

「ただいまーっ!!」

その光景を偶然見てしまったひとりの男性がいた。
ゆりかの元彼になってしまった森田卓、その人であった。

第31話〜39話

第31話 せつなさとやるせなさと

●森田卓の手記より

僕はどうしても須藤さんに借りた2千円を返さなければならなかった。

あの回転寿司屋の駐車場で、彼女からお金をもらわなかったら、前科者になるところだった。

彼女は返さなくてもいいと言ったけど、そういうわけにはいかない。毛嫌いされようがどうしようが僕の気持ちに納得いらない。

でも、いざ返すと決めた当日が来ると、僕の心に緊張感が走った。

行っても会ってもらえず、門前払いだったらどうしよう・

須藤さんが返さなくていいと言ったんだし、やっぱやめとくか・
いや、それではあとから絶対後悔する。きつとする。

それに正直言うと、少しの時間でも須藤さんと会っていたい気持ちがあるのは事実だ。

僕の潜在意識の中では、お金を返すことも、それを口実にしているだけかもしれない。

嫌われてるのに会いに行くなんて、我ながら未練がましくて情けない男だと思うよ。

僕ってホント、どうしようもない人間なんだな。。

雨が降りしきる中、夕方まで待って、僕は彼女の自宅へ車で向った。

留守だったらどうしよう？あり得ることだ。彼女に直接お金は返したい。家族には嫌だ。

そういう思いを駆け巡らせながら僕は須藤さんの自宅前の門より、少し手前で車を停めた。

そして僕が車から降りようとする寸前、1台の車が横を通り過ぎ、彼女の自宅の正面に停まった。

僕は慌てて車の中で、身を低くして様子をうかがう。

なんと、その車から出て来た人物は、須藤さん本人と男性ひとり。しかも僕よりカッコいい。

まあ僕よりカッコ悪い男を捜す方が難しいかもしれないけど。。

その男は傘をさして須藤さんをエスコートして玄関先まで送って行った。

僕は恐る恐る正面の門の端からそっと覗き見をした。

するとなんてことだ!! 須藤さんが・・須藤さんが知らない男とチユウしちゃったよ。。。

もちろん僕がその男を知らないだけの勝手な言い分なんだけど。。

でも僕だって彼女と数ヶ月も付き合って来たのに、1度もチユウなんてしてないのに・・

それを意図も簡単にしちゃうなんて・・(TロT) ダアアアゝ

あ、男がこっち来た!

僕は急いで自分の車に戻り、ドアを開けて載ろうとしたが、ドアが開かない。

ひえー! (◎O◎) しまったあああ! ドアロックしちゃったああ! 鍵が中に刺さってるぅぅ! !

もちろん僕のオンボロ車なんて、キーレスエントリーのような代物じゃない。

降りしきる雨の中、僕の体もどんどん濡れてゆく。

そこに追い討ちをかけるように、例の男の車がUターンしてこちらに向って来て、勢いよく僕のそばの水溜りを飛び散らせた。僕は呆然と立ち尽くした。

『……』（――；）また顔から下まで泥だらけのびっしょり……

それなのにおバカなこの僕は、この汚れた格好で、彼女にお金を返そうと玄関をノックしていた。このときの僕は、須藤さんのキスを見てしまい、精神状態が不安定になっていた。

以前も、泥だらけで家にお邪魔して迷惑をかけたときの反省など、思い浮かびもしなかった。

「はい。」彼女の声が近づいて来た。

「あの……その……お邪魔します。」

「!!!!」

彼女が玄関で固まってしまった。

「すみません。。どうしてもお金を返したかったもんで……程なくして彼女が口を開いてくれた。

「……………いいって言ったのに。。」

「はい。そうなんですけど。。」

「それにまた泥んこで来たのも何か理由でもあるんですか？」

「いやこれは今そこで。」

「待ってて。タオル貸してあげるから。」

彼女はすぐに走ってタオルを取って来てくれた。

「すいません。また迷惑かけちゃって……」

「それが森田さんだもの。わかってるわよ。わざわざお金ありがとう。」

「はい……」

「じゃあさよなら。元気でね。」

そっけない挨拶だった。『元気でね。』と言われたものの、その言葉には何の感情も含まれていない社交辞令的なもの。僕も結局、片言しか言えずに家をあとにすることになった。

もう須藤さんのことは忘れなければならぬだろうか？ そんなこと僕にできるだろうか？

初めて心から好きになった彼女を。そして初めて味わった失恋。立ち直って行くというより、まだ未練が残って仕方ない。立ち直りたくない！ 須藤さんが今でも大好きなんだ！

僕は・・・僕はこれからどうしたらいいんだ？

●須藤ゆりかの手記より

少し森田さんに冷たすぎたかしら・・・

でも本当に今のあたしは彼に何の感情もない。

たしかにかつては、泥だらけになった森田さんを見てるだけでもいとおしくなった。

彼の行動全てが可愛くて、素直な純真な人だと感じるときがあった。

いけない。こんなこと考えてちゃ。全ては暗示だったのよ。催眠術のせいよ。

あのときの感情は、あたし本来ではなかった。これからは作道さんと新たな時を過ごすの。

そうよ。そうしなくちゃ。

そう思っでは見たものの、私はかつてカウンセラーに言われた言葉も思い出していた。

カウンセラー曰く、

『私はあなたに彼を紹介したわけではありません。あなたが選んだのです。あなたが彼の優しさに惹かれていったのです。それは紛れもなく、あなたと彼の偽りのない世界だと思います。』（↑第20話参照）

「そんなの・・・ウソよ。」

第32話 感情の捌け口

●森田卓の手記より

最近、全く食欲がない。何かを作る気力もない。

だからここ数日はカップめんばかりだ。

袋のラーメンも近くのスーパーの特売日に、5ケースまとめ買いしてるけど、

鍋にうつして火をかけて麺をほぐす作業さえもおっくうになっている。

今日の休日も昼前にやっと起きて、おもむろに日清のUFO焼そばを作ろうとしている自分がいた。

何も考えることができずに、ただ無意識に食べるための行程をぼーっと進めている。

具材のかやくを入れ、お湯を注ぎ、ソースを入れて・・・

Σ—11（▽；）——1わ！！

しまったああ！！お湯捨てる前にソースも入れちゃったああ！！

こんなことならどん兵衛を選んでおけば良かった。

いつも僕は正しい選択ができないでいる。

麺類までも僕を見限ったのか？僕に食べてもらいたくないのか？

・・・バカだな。。こんなこと考えるなんて。。ホント精神おかしいよ。

自分でおかしいってわかるうちはまだ、大丈夫なのかな。。？

そういえば・・・須藤さんここでペヤング食べたよなあ。。

あ！！そうだった。確かそのときチュウしたんだ！うん、そうだった、そうだった！

そうだよ。あまりに不意打ちなチュウだったから、興奮しすぎて僕の意識がすっ飛んでたんだ。。

この前、須藤さんが自分んちの玄関前で、知らない男とチュウしてたけど、僕の方が先だったんだいっ！

・・・エヘヘ（＊'ー、）

・・・・・・・・・・・・・・・・（；'Д'）ハア・・・・・・・・

それが何だっていうんだろう。。。

今となっては何の意味もないや。。。

あのときの現実がまるで、夢でも見てたような幻想の世界へと変わってしまったようだ。

しかもはるか遠い昔の出来事のように。。。

僕はここで我に返った。

そうだ、この日清焼そばUFOをなんとか食べなきゃなんない。

お湯を捨てたらソースも流れる。うちには予備のソースなんて置いてない。

かと言ってこのままお湯を捨てずに、ソーススープとして食べたとしても・・・ダメだ、きつと吐く。

とにかくお湯は捨てよう！

僕はお湯を容器から捨てた。もちろん理屈通りに、ソースも流れた。

ここから何か、代わりの物をスパイスとして振り掛ければいいのさ！

とりあえず、コシヨウでもかけてみるかな。

僕は戸棚からこしょうを取って来て、UFOの上から降りかけてみたけど、目詰まりしてるのか、コシヨウがなかなか出てこない。だから僕は大幅りに、地面に叩きつけるような力の入れようで何度も何度もコシヨウを振りかざした。でもそれが間違いのもとだった。

ガ——ΣΣΣ（。；）——ン！！ひえー！（◎◎◎）

コシヨウのフタが全開して、一気に麺の上全体にドバァツとかかってしまった。

普通こんなの誰も食べるはずがない。でも僕はなぜか、どうにかして食べてやろうという気でいた。

きつとコシヨウでかなり辛いんだから、酢をかけて味を中和させればいいんだ。。。

僕はすぐに実行した。ひよつとすると、コシヨウと酢でドレッシングのようになって、イケる味かもしれない。

スパイシーな香りが鼻につく。

よしっ！食べよう！

こんなとき、普通なら警戒して食べるはずなのに、今の僕には何の抵抗もない。

なぜなんだろう？

きっと何かに集中していれば、須藤さんのことを思い出さずに住むと僕の心の奥底では考えているのかもしれない。

たかがカップ麺のことだけど、全く関係ない話題であれば、喜んで飛びついてしまう有様の僕だった。

ゴホッ！ゲホッ！ゲホッ！オエッ！！ゲホゲホゲホッ！！
(T) ダアアア〜！！

UFOを食べた瞬間、僕は思い切りむせた。これは生ける者の食べる代物じゃない。

自分のアホさ加源につくづく飽きた。

・・・須藤さん。ダメだ。忘れられない。全然忘れられないよぉ〜！

(T◇T) うぉぉぉぉ！！！！

僕は泣き叫びながら、なぜかまた麺をすすり、再びむせて苦しみながらも更に食べ続けて泣き叫んでいた。

◆◆翌日◆◆

一夜明けると、僕は冷静さを取り戻していた。

日曜日の今日、僕にできることって・・・

僕は人前だと緊張しまくってほとんど話ができない。でも書くことはある程度できる。この手記もこうして書いてるように、僕の正直な気持ちを伝えられる。

須藤さんにメールを試みよう。何の反応もないかもしれないけど、何もしないよりはいい。

僕は頭の中で文章をまとめ、打ち込む決心をして携帯を開いた。

あ・・・充電してなかった。。。 (ノ|ω|) ノバタ

第33話 心のはざ間で

●須藤ゆりかの手記より

この日はちょうど作道さんと外食を共にしていた。

彼はハンバーグランチで私はミックスフライランチ。

お互いのメニューが運ばれて揃ってから同時に食べ始めた。

私の食べるペースは特に早い方ではないのに、作道さんはその私よりはるかにペースは遅かった。

それに気づいたのは半分ほど私が食べ終えてから。

それなりに会話はしていたけど、無我夢中で話していたわけではないし、食べるのを中断していたわけでもない。

彼はまだ3分の1程しか食べ終えていなかった。

でもその理由は、少し彼を観察しているとすぐにわかった。

なぜか彼はおちよぼ口で食べているのだ。そして一口ごとにナプキンで口を拭く。

食べられるハンバーグは、ナイフで一口大より更に細かい欠片に分解されて口に運ばれていた。

「作道さん、ずいぶんお上品に食べるんですね？」

「え？そうですか？」

「そこまで小さくハンバーグを切るなんてあたしでさえしないですよ。」

「ああ・・・僕、口小さいし、大きく切るとデミグラスソースが口のまわりにベツトリついちゃうでしょ。そんなとこ須藤さんに見られ

たくないですよ。」

「気にしないでいいですよ。男性は豪快に食べた方が似合ってます。」

「そ、そうですよね。。確かにそうだ。。でも、もう全部細かくしちゃったしなあ。」

「いえ、絶対そうして食べてとは言っていないから。；へへA」

「でも須藤さん好みの男になるには、豪快な食べっぷりの方がいいんですよね？」

「無理にそんなことは・・・」

私が言い終わらないうちに、作道さんはハンバーグ皿を両手で持って、自分の口のそばに平行に持って行き、

皿と一緒に持っていたフォークで、細かく刻まれたハンバーグをかき集めながら、口に流し込み始めた。

私は啞然として見ていたが、彼もそれに気づいたようで、

「やっぱりおかしいですよ？慣れないことすると自分でも不自然なのがすぐわかりましたよ。」

「（ $m \geq n \leq m$ ）クスッ！さっきのでもいいですよ。無理なことはしないでね。」

「はい。（#へ・へ#）」

「作道さんは、今まで付き合った人と一緒に外で食事をされたことはないんですか？」

「それがないんですよ。家に呼んで僕の手料理を食べてもらってばかりでした。」

「あれだけの量を？（1,1;）」

「はい・・・い、いえ・・・こないだは久々に張り切り過ぎちゃったもので。」

「そうですよね。おばあ様も言ってましたけど、以前来られてた大柄の男性のお友達ならそれくらい食べたんでしょうけど、女性にはすごい量でしたもの。」

「へ（ω——）へぎくッ！うちのばあちゃんそんなこと言っ

てたんだ。。」

「でもおばあ様は、食べに来るのはその男性のお友達だけって言うてたような。。彼女は呼ばなかったんですか？」

「う・・・いやその・・・ばあちゃんとは、半年前に九州からうちに来たばかりなので、僕のそれ以前を知らないんです。」

「あ、そうですね。ごめんなさい。過去のことを穿り返すつもりはなかったの。」

「いいんですよ。今はこうして須藤さんに巡り逢えてるわけですから、辛い過去なんて吹き飛んじやいますよ！」

「恥ずかしいです。そんなこと目の前で言われると。」

そのとき、私の携帯にメールの着信があった。

「ちよつとすいません。確認だけね。」

「いいですよ。どうぞ。」

私は携帯の背面ウィンドウに表示された名前を見て動揺した。

森田さんからだ。。。何でこんなときに。。。

それに今までだって森田さんの方からメールをくれることなんてほとんどなかった。なのに。。。

「須藤さん、どうかしましたか？」

「い、いえ・・・大丈夫です。。。」

今はとにかくこのメールは読みたくない。かといって、なぜか削除する気にもなれなかった。

とりあえず保存BOXに入れて置こう。削除はあとからでも。。。

「ごめんなさい。食事終わったらどこに行きましようか？」

「映画でもどうです？今日はちょうど月始めだから、男女とも1000円の日ですし。」

「そういえばそうですね！お得ですものね。行きましょ（〇＾－
＾〇）　ウフツ。で、何観るんですか？」

「今上映してる話題の韓国映画でも観ませんか？」

「恋愛物ですね。あたし泣いちゃいそう・・ハンカチ1枚で足りるかしら。。」

「僕も持ってますから貸してあげますよ。」

「はい。じゃあそのときはお言葉に甘えて。」

映画の上映中、作品のストーリーに感動しながら、作道さんは顔をぐしゃぐしゃにして泣きじゃくっていた。

「（TロT）うわぁあん。うつつ・・ジュルジュル。。ズル。。すいません須藤さん・・ハンカチ貸してもらえますか？ティッシュでもいいです。」

使っていた彼のハンカチは、止まらない涙と鼻水まみれになって、すでに使い物にならない。

「ハンカチは1枚しかないから、このティッシュ使って。」

「あ、ありがとうございます。。（；〇；）うつつ。。」

「でもそれ使ったらもうないから、なるべく鼻水はこらえてね；ハ

ハ　A　アセアセ・・」

「はい・・できるだけ我慢します。。」

作道さんという人は、見た目は爽やかそうな男性なのに、なんだか女の子っぽいところが随所に見られてきた。

でもきつと心の優しい人なんだからだと思う。いい人には間違いない。森田さんとも似てるようで違ったタイプだ。

（。〇。；）　ハッ！！・・・・私の頭の中にはまだ森田さんがいるんだろうか。。自然に名前が出てくるなんて。。さっきのメールどうしよう。。やっぱり削除した方がいいかもし

れない。

でも・・・あとでしょう。うん、とりあえずあとで。。。」

第34話 恋愛の頂点

●作道昌吾の手記より

須藤さんとの初デートから今日で4回目を終えて帰って来た。

2回目のデートで僕は映画を観て泣きじゃくり、大失態を演じてしまったが、3回目のデートは1日中ドライブ。

誰でも1度は行ったことのある近場の観光名所ばかり巡っていたが、須藤さんと一緒ならどの場所も新鮮に感じられた。

それは彼女も同じく感じていたようで、

「あたしここ何度も来てるけど、すごく久しぶりなの。今日はとても新鮮。」

すがすがしくて気持ちいいし、やっぱり1人で来るのとは全然違うもの。ありがとう。作道さん。」

そう言いながら須藤さんはすごく明るい笑顔で、デジカメと携帯の両方で写真を撮りまくっていた。

そして今回のデートは、雨が降っていたせいもあり、小上がりがあるってゆっくり食事のできる店で彼女と過ごした。

そのせいか、今日は彼女からの質問攻めにあってしまった。

「あたしたち、まだお互いのことあまり知らないわよね？」

「そう言えばそうですね。こないだはドライブであちこち景色を楽しんだだけだし、その前はうちのばあちゃんがいたし。」

「今日はゆっくり話しましょうよ。あたしもっと作道さんのこと知りたいです。」

「なんか突然そう言われると照れますね（＃＾・＾＃）」

「ごめんなさい。あたし元々、思ったことすぐ言ってしまうわないと

「気がすまない性格なの。でもそれで失敗したこともかなりあって。」

「僕はその方が好きです。サバサバしてるストレートな人の方が何でも話せます。」

「良かった。あたし人見知りしちゃうから、慣れるまでにはストレートにはなれないんですけどねw」

「誰でもそうだと思いますよ。で、どんなことが聞きたいですか？」

「そうね・・・じゃまずは基本からね！」

「基本の質問であるんですか？w」

「ありますよ。作道さん、初恋っていつだったの？」

「お、早速来ましたね。僕は中2かな。同級生でした。」

「遅くないそれ？小学生のときとかは誰もいなかったの？」

「うーん、いないわけじゃなかったけど、みんな平均して好きだったから。」

「（；；え？作道さん、気が多いの？」

「いえいえ、そのなんていうか、恋まで発展するような段階でもなかったもんで。」

「あーなるほどね。男子ならそうかもしれないわね。じゃ中2で好きになった人ってどんな人？」

「体育会系で部活に命を燃やしてたような熱血的な感じの人ってゆうのかな・・・」

「きれい系な人？可愛い系？」

「カッコ良かったな。。」

「カッコいい???宝塚みたいな？」

「あー・・・いやいや・・・か、可愛い系だったかな。なんかうる覚えで。」

「随分前のことでももんね。テニスとかバスケとかしてた人なの？」

「野球部かな。」

「野球部???」

「（。；；）ハッ!・・・や、野球・・・じゃなくてソフトボールだ！」

ハハ・・（ハハズ）」

「そうなんだ。で、その恋は実ったの？」

「いや、僕の一方的な片思いだよ。彼は・・あ、いや彼女にはすでに付き合ってた人がいたからね。」

「Σ（・◇・＊エエツ！？それは辛かったでしょう？告白もできなかったでしょうね・・」

「それが僕もバカでしてね、一代決心して卒業前に告白しましたよ。」

「すごい！偉いわ、作道さん。で、どうだったの？」

「そりゃもちろん拒否されましたよ。『なんだお前、気持ち悪いからあっち行けっ！』って。」

「ええええ？（◎〇◎）何それ！いくらなんでもそんな断り方ってひどいじゃない？口も普段からそんなに悪い人だったの？」

「僕はそれが当たり前だと思ってたんで別に何も。で、当然といえば当然の結果だったかし、それでキッパリ忘れようと思いましたよ。」

「それにしても随分、男まさりな人だったのね。」

「ま・・まあそれは。。精神的にも肉体的にもたくましい人でしたから。」

「たくましいって・・筋肉もりもりの女の子ってあまり可愛くないような。。それも中2で。」

「でも僕は・・好きでした。」

「あ・・ごめんなさい。あたしって、何も知らないのに勝手なこと言っちゃって。。」

「いえ、全然平気です。過去のことです。」

「でもあたし、体力なんて自信ないし、たくましくもないですよ。作道さんのタイプに合ってるのかしら？」

「須藤さんは特別です。宅配に行った瞬間、あなたに一目ぼれしました。そして今、あなたに告白して本当に良かったと心から思っています。あなたの話し方、声、笑顔、しぐさ、全部が今の僕を虜に

しています。これをタイプ以外のなんと言って説明できると思います？」

数秒間の後、須藤さんが感激した声で言った。

「ありがとうございます。その言葉、すごくあたしの心に響きました。あたしもあなたの真っ直ぐな気持ちが好きです。そして益々あなたを好きになっていく自分を感じています。」

「そんなこと言ってもらえるなんてすごく嬉しいです。僕も感激しました。自分の気持ちを率直に目の前で表現してくれる人なんて、めったにいるもんじゃありません。」

「あたし、自分の心をあまり隠しておけないんです。」

「なんかこれからはもっと楽しいデートができそうですね？」

「そうですねw」

「じゃあ、こうしませんか？今日は雨ですけど、来週のデートがいい天気だったら、少し遠出してのどかな温泉でも行きませんか？」

「いいですね。温泉大好きです。一泊するんですか？」

「あ、いや、僕は日帰りでもいいと思ったんですが・・・一泊した方がリラックスはしますよね。」

「あたしは構いませんよ？」

「須藤さんが構わないのなら・・・うん、そうしましょう！あ、部屋はちゃんと別々に取りますんで・・・その点は安心して・・・」

「あたしたち、付き合ってるんですもの。別々な部屋は逆に不自然ですよ。一緒にして下さい。」

「は・・・はいっ！！」仰天のあまり、思わず即答してしまった僕であつた。

こうして4回目のデートが終了して、僕はいつものように今、この手記をしたためている。

そして明日はカウンセラーのところで1カ月ぶりの定期健診の日だ。約束どうり、この日記も見せて先生の診断を仰がなければ。。。

須藤さんと出会ったおかげで、きっと僕は立ち直ってるはずだ！
カウンセラーも褒めてくれることだろう。

第35話 悲しいショッピング

●森田卓の手記より

僕が須藤さんに思いをメールしてからどのくらい経っただろう。。
まだ2、3週間のはずなのに、もう1年以上経っているような気がするよ。

やっぱり見てくれてないのかな。。見る前に削除されてるのかな。。
せめて見てから削除されるんだったら。。。。

バカだな。どっちにしたって削除されたら同じじゃん。何考えてんだ僕は。

こんな精神状態じゃ体がもたないよ。鬱の毎日から開放されたいよ。
それにこんな寒い時期ならなおさら体調が崩れそうだ。

現に今も鼻がグズってるし、のども痛くなってきた。

明日も冷え込みがきつそうだし、厚着して出勤しなくちゃ。

とは思ったものの、そういえば僕にはコートが1着もなかった。

去年の冬の終わりに8年間着ていたヨレヨレのコートを燃えるゴミに出してしまったんだ！

あのコートも実家のお父さんが15年使って譲ってもらったやつだから、足掛け23年の代物のはずだ。

去年まで同僚によく、コロンボもどきと言われたもんだ。

よし！今日は新しい自分を探すきっかけとして、コートを新調しよう！

あまり高いのは買えないから、激安衣料スーパーに限るけど；、ハ

^A

30分後、僕は近くの店でコートを選んでいた。

たまたま激安ワゴンセール開催中で、主婦の人たちが鼻息も荒く、ワゴンの中身を荒らしまくっていた。

僕もその中に少し紛れてみたが、女性陣に白い目で見られた。

「お兄ちゃん、あんた何欲しいの？」

「え？ ぼ、僕は安いコートがないかと。」

「バカじゃないの！ いくらなんでもコートがワゴンに入ってるはずないでしょ！」

「そ、そういえばそうですね（ー）； ヒヤリ」

「邪魔だからあっち行きなさい。ここは下着ワゴンよ。あんたもしかして変態？」

「Σ（ー◇ー＊エッ！？ そうとは全然・・・」

「キヤー！ 変態がいるわよぉ！」

「いや、違い・・・」

「やらしいー！ 堂々と下着眺めてるうー！」

「あんた早く行きなさいよ！」

僕はおもくちやにされながら、主婦たちに、手に持ったブラジャーや下着で叩かれながら逃げようとしたが、これまた落ちていた下着に足をとられて前のめりに倒れ、ワゴンの中に顔をうずめてしまった。

焦る僕はすぐさま顔をあげると、なんとしたことか僕の顔にパンティがしっかりと貼りついていていた。

皮肉にも鼻風邪のせいで、僕の鼻水に下着がくっついてしまったんだ。

「キヤー！」 「キヤー！」 「キヤー！」

そんな一斉に同じセリフ叫ばなくてもいいのに。。。

当然のことながら、僕はバツが悪くなってこの店を後にした。もちろん、鼻水をくつつけてしまったパンティは買うハメになってしまった。

レジの女の子にまで、変態を見るような痛い視線を浴びせられながら。。。

次は少し離れた隣の店に入った。今度はワゴンセールなんてやってない。

コートのコナーには数多くのアイテムがズラリ並んでいる。

僕は1着1着、値札を確認しながらコートを選んでいた。

そばを歩いていた女子高生の二人組が少し離れた距離から囁くのが聞こえた。

「（||・m・）　クスクス・あの男の人、超ビンボーくさいよね。」

「やっぱ見た目と比例するよね。一＊、m・）ノ彡☆プププ！！
バンバン！☆」

大きなお世話だよまったく。

さっさと選んで帰ろう。夜になると外も寒くなって来るし。

と、突然開いたドアから冷たい風が入りこみ、くしゃみの連発をしてしまった。

ヘックショイ！！ヘックショイ！！ヘックショイ！！こんちくしょう！

なぜかくしゃみの最後にこんちくしょう！が出るのが僕のクセだ。それを見ていた女性店員が僕のそばに寄って来た。

「お客さん、困ります。洋服にツバキがこんなに飛んで。」

へ・へ・・ヘックシヨイイイ~~~~!!

僕の振り向いた先にいた女性店員の顔に青っぱなが飛んだ。

僕の鼻から彼女の顔へ長く伸びた青っぱなが切れずに繋がっているのだ。

彼女は驚きとショックのあまり、呆然と立ち尽くしていた。

5分後、僕は新しいコートを精算していた。

さっきの女性店員はあのあと、同僚に支えられながら控え室へ連れられて行った。

僕はツバキの飛び散ったコートを弁償代わりというか、彼女にも申し訳ない気持ちで購入した。

値札を見て仰天・・・59,800円(∇, ;)
59,800円(∇, ;)
59,800円(∇, ;)
59,800円(∇, ;)
59,800円(∇, ;)

頭の中で何度も輪唱していた。

「すみませんが・・持ち合わせないんで、カードで払います。5回払いで。」

「ああそうですか。」と、つつけんどんなレジの女性。

「あ、すみません・・やっぱり10回払いで。」

「はあ？」

「いえ・・5回でいいです。」

こんなんで、これからの僕は立ち直れるのだろうか？

●須藤ゆりかの手記より

ただ呆然とした日々が何日も続いて、この手記を書く気にもなれなかった。

今までは一体何だったんだろう？

一瞬のうちに始まって、一瞬で終わった恋。

私は何度、失恋で打ちのめされなければならないの？

私のどこがいけないの？

理由も言わずに作道さんは私から去って行った。

彼が電話で言い放った衝撃な言葉。

「ごめん。今までののは間違いだっただ。もう付き合えないよ。悪いとは思ってるけど。」

あまりの突然なことに、私はしばらく金縛りにあったように一言も口を開けなかった。

更に彼は続けた。

「僕は自分の気持ちに正直に生きたいんだ。何度も考えたけど、須藤さんとはやっていけない。」

ここで私はやっと震える口調で言葉が言えた。

「作道さん・・今まで私には・・正直な気持ちじゃなかったの？偽りで付き合ってたの？」

「いえ、そのときは正直な気持ちだったように思いますが。今現在ではそれが偽りになってしまいました。」

「わからない！そんなの全然！次は二人で温泉旅行しようって話したこともみんなウソなの？」

「あのときは・・僕も行きたいと思ってました。」

「あたし、作道さんが怒るようなことした？」

「いえ、そういうことはありません。」

「こんな話、電話でするなんて・・・」

「すみません。面と向かうと話せなくなりそうな気がして。こんな形で終わるのを許して下さいとも言える立場ではありませんが。」

「理由を教えて下さらないのね。」

「・・・・・・4回目のデートの後で次の温泉旅行の話を計画したときは僕も楽しみにしてました。」

「それならなんで・・・」

私はこらえ切れなくなって泣いてしまった。

彼は少し罰が悪そうに、

「とにかくごめん。もう会わないから。。じゃ。。」

と言って早々に電話を切ってしまった。

こんな短い会話だけで納得できるはずもないのに私から電話する勇氣ももうない。

今まで付き合って来た男の人たちはみんな私を重荷にしてきた。

いつもそれが原因だった。ひとりを除いて。

でもこんな終わり方はどれほどショックなことか。

私に非があるのなら教えてもらいたいのに、それすらわからない。また昔の私に戻ってしまいそう。。やっと男性を信じれるようになるうとしてたのに。。

やっぱり信じるものではないのかもしれない。

もう私、外には出ない。以前のように引きこもりでいい！

表に出なければ自分は傷つかなくてすむ。そうよ。それが安全なのよ。。

こうして私は再び手記を書き始めている。

思い出したくないことでも、自分に課せられたひとつの義務として。

そしてこれからの未来、自分の軌跡をたどる意味で。

でも・・・その未来って・・・あたしにあるのかな。。。

明日はカウンセラーの所に行ってみよう。

今頼りになるのはあの先生だけかもしれない。

外に出るのは嫌だけど、寄り道しなければいい。

まっすぐカウンセラーのところに行って、まっすぐ帰って来るだけよ。

それだけでいいのよ。

それだけで。。。。

第37話 カウンセラーの誤算

●作道省吾の手記より

かなり後味が悪いが、ああするしかなかった。

深入りしすぎて取り返しがきかなくなる前に終わりにした方が、自分にも須藤さんにとっても絶対いいはずだ。

それにしてもあのカウンセラーのこんなやり方って・・・一体どうなんだろう？

余計に人を傷つけてしまうんじゃないか？

こんなん僕のものからカウンセラーに任せていいんだろうか？

あの日、4回目のデートの翌日、僕は自分の手記を携えてカウンセラーのいるクリニックへ向かった。

僕はそのとき、須藤さんとの温泉旅行を控えていて、嬉しさのあまり満面の笑みを隠せなかった。

僕は開口一番、こう言い放った。

「先生、ありがとうございます。僕、この1ヶ月で彼女ができました！」

「ええっ？もうですか？」突然驚くカウンセラー。

「はいっ！次のデートは1泊で温泉に行く予定です。」

「そ・・それはまた急な話ですね。彼女も納得したのですか？」

「そうですよ？何かありました？」

「うーん・・思ったより最近の子は展開が早いな。。」

「は？」

「いや別に。ではまず、私が指示しておいたここ1ヶ月の日記を見せて下さい。」

「はい。これですが・・」

僕はカウンセラーに今までの出来事なるべく細かく書いたこの日記を手渡した。

そしてすぐさま開いて読み始める先生。すると、

「あの一、作道さん？」

「はい？」

「あんた、ずいぶん字が小さいねえ。」

「あ・・す、すみません。いつもこうなんです。」

「まあ読めるからいいですけど、もっと大きく堂々と書くように心がけてみたらどうです？字にも性格が出ますし、気持ちも現れます。」

「はあ・・気をつけます。」

数分の間、カウンセラーは僕の日記と格闘していた。そのためか、先生の表情は悩んでいるように硬く、眉間にしわも寄せていた。

途中、先生は何かにびっくりしたような顔をしながらも読み続けていたが、全部読み終わると、一息ため息をついて僕に話し始めた。

「作道さん、早速ですが1ヶ月前にあなたにかけた暗示を今すぐ解きましょう。」

「は、はあ・・」

「1ヶ月じゃ遅すぎたかな・・」と先生はボソツと囁いた。

「え？」

「いや・・まあとにかくあなたはまず、姿勢を楽にして目を閉じな

さい。いいですか？息を大きく吸って3回深呼吸を・・・」

数分後、僕は目覚めた。何かが吹っ切れたような、新鮮な感じがした。

「気分はどうですか？」

「ええ、なんか頭が軽くなった気がします。」

「そうですね。今、あなたにかけた暗示を解いたのですから。」

「これで僕は精神的に良くなったと言えるんでしょうか？」

「それはこれからのあなたの努力にもよります。どうですか？さっき言ってた彼女と温泉旅行に行く気持ちは変わってませんか？」

「は？彼女って・・・あ、須藤さんのことですか？」

「・・・ええ、そうです。」

「んーん・・・何であんなこと言ったんだろう。先生も知っての通り、僕は同性愛者ですから女性と付き合う気持ちには全然なれませんよ。」

「やっぱりそうですか・・・」

「暗示でもこればかりは治らないようですね。」

「だがあなたは以前、失恋のショックから精神面でかなりの打撃を受けていました。その点、今はどうですか？」

僕は数秒、自分の気持ちに自問自答して確信した。

「ああ・・・はい。それは確かに今はないですね。信利にフラれたことに関してはすっかり割り切れています。」

「そうですね。この治療法は自分をある一定の期間、接触変化させることによって、過去の心の傷も治癒させる効果もあるんです。」

「接触変化？」

「はい。つまり普段のあなたでは知り合うはずのない、繋がりのない人たちとの交流や、その人たちへの興味を沸かせることで、あなたの苦しんでいた過去を軽減させる役目があるんです。」

「なるほど。。それが僕の場合、須藤さんだったわけですね。」

「そうです。あなたに優しく触れた女性、あるいはあなたから優しく触れた女性に限定して催眠をかけました。」

「でもなぜそれを男性にしてくれなかったんですか？先生も意地悪ですね。」

「自分を治癒するためには、今まで全く経験のないシチュエーションの中で行動することがベストなんです。つまりあなたにとっては、女性に好意を抱いてみるのが大事だったんですが・・・」

「大事だったんですが・・・って？何か問題でも？」

「ええ・・・この暗示はいずれ解けてしまうものですが、なるべく早い時期に私が解かなければなりません。」

「なぜですか？」

「恋愛対象の相手が現れた場合、深い仲になってしまうと暗示が解けたときには・・・わかりますよね？」

「あ・・・はい。。そうですね。僕はともかく、このことを知らない相手の人のショックが大きい・・・」

「そうです。このまま付き合いを継続できるなら別ですが、あなたにはできないでしょう？」

「・・・無理ですね。元の自分に戻ってしまうともう、さっきの瞬間で彼女への思いはなくなりました。」

「ですから、あなたの日記を読んでみて、あまりにも恋愛の加速度が速いので、彼女にダメージを与えてしまうのではと思ったのです。通常は本格的な恋愛にまで発展しないうちに暗示を解くのですが。。」

「カウンセラーの言葉に僕はハツとした。」

「そうだった。。僕は彼女に対して、これからのお付き合いを断らなければならぬ。」

「きつと彼女は傷つくだろう。この短期間の中でキスまでしたのに。。でも今となっては僕だって偽りの付き合いはできない。いつかはボ

口が出る。

「作道さん、あなたにもうひとつ教えなければならぬことがあります。」

「はい？何でしょうか？」

「実は・・私にも予想のつかない出来事が起きてまして。」
「???」

「世間は狭いものです。あなたが付き合いしていた須藤ゆりかさんは、うちの患者さんなのです。」

「Σ（・◇・＊エエッ！？ほ、本当ですか？それ。」

「はい。あなたの日記を見て仰天しました。私もうかつでした。万が一のケースも考えておかなければならないのに、それを怠りました。」

「でも・・彼女は一体どこが悪くて・・」

「あなたと全く一緒なのです。同じ治療法もしました。」

「では彼女も暗示にかかっているんですか？」

「いえ、須藤ゆりかさんはあなたと接触する前に暗示は解けています。」

「では立ち直ってるわけですね？」

「まだ完全には・・あなたとのお付き合いによって立ち直り始めたはずなんですが・・」

「その僕が彼女との交際をやめたら・・」

「彼女は廃人になるかもしれませんね。」

「そ・・そんなこと言っただって、それは先生のせいじゃないですか？僕に非があるって言うんですか？」

「わかってます。作道さんを責めてるわけではありません。」

「僕は、自分にウソはつけません。彼女には悪いですが、断りの連絡を入れるしかありません。気の毒だとは思いますが、誰だって自分自身が大事じゃないですか！」

「ごもっともです。それはあなたの自由ですから。不快な気分になさ

せてすみませんでした。」

こうしてカウンセラーのところから戻って間もなく、須藤さんに電話したわけだが、冒頭にも書いたように後味がとても悪い。そしてもうこの日記も書く意味がなくなった。僕はこれで終わりにしよう。うん・・そうしよう。

新しい出会い、そして信利よりもっと素敵な彼氏を見つけて僕の手料理を食べてもらうんだ！

第38話 知らされた事実

●須藤ゆりかの手記より

今、私が頼れる人はカウンセラーしかない。

この気持ちを少しでも和らいでくれる人は先生だけ。

こんな思いをするのはもうたくさん！

そう考えて開き直ろうとしてもやっぱり無理。

過去のトラウマが私を苦しめる。

人に助けてもらわないと自分では非力すぎる。

私はこの日、朝食も食べずに朝1番のバスに乗り、クリニックへ向かった。

仕事なんてできる精神状態ではなかった。

人はよく、仕事で気を紛らわせるしかないと言うが、私にはそんな真似ができるタイプではない。

性格的なものなんだろうけど、気を紛らわすどころか、集中すらできないのは目に見えている。

通勤ラッシュの人ごみの中、サラリーマンたちがとてつもなく怖く見えた。

淡々と無表情で足早に会社へ向かう男たち。

この人たちもみんな女を手玉にとって裏切ってるんだわ。。

決してそんなことはないのはわかっている。

でもそんなふうには考えられないでいた。

もう私の思考回路が支離滅裂。早くクリニックに。。。

私はバスを降りると半ば早歩きで、いえ、ほとんど駆け足状態で先生の元へ急いだ。

その10分後、私はカウンセラーと差し向かえで座っていた。

朝1番だったので、順番も当然1番。走ったせいで少し息があがっていたけど、ほどなく落ち着いていた。

カウンセラーはじっと私を観察してるかのように見据えている。

それに何かうかない顔をしている。私が変な行動をしてるように見えるのかしら？

「・・須藤さん、走って来られたそうですね。・・大丈夫ですか？」

「はい、なんとか。先生にどうしても助けていただきたくて。」

「・・そうでしょうね。あなたの表情ですぐわかりますよ。」

「実は私・・また失恋してしまっただんです。」

「そのようですね。」

「え・・・・・？そんなこと私の表情だけでわかるんですか？」

「いえ・・表情だけではわかりませんが・・そのことで私も須藤さんにお話なくてはならないことがあります。」

「?? よくわかりませんが・・」

「あなたがこの1ヶ月間にお付き合いされた男性は、作道省吾さんでしょう？」

「Σ(ー◇ー＊エエッ!？そ、そうですけど・・なぜそんなことが。」

「彼も数日前、ここに来ました。私が書くように指示した日記を持

って。」

「!!!!!!」

「私は彼の日記をここで読んで、あまりの偶然な出会いに驚愕しました。」

「そんなことって・・・では作道さんも・・・先生の患者さんだったんですか？」

「はい。他の患者さんのことは守秘義務もあるんですが、この場合は説明するのもやむを得ないでしょう。」

「・・・」

「その前に、須藤さんの日記を拝見させていただいてよろしいですか？ 詳しい流れをつかみたいのです。持って来てますよね？」

「はい。これです。・・・どうぞ。」

私はおもむろにバッグを開け、カウンセラーに日記を手渡した。

数分の間、先生はその日記を読み続け、部屋に沈黙が流れた。

やがて先生はその日記の内容に納得したかのように何度もうなづいて、ゆっくり本を自分のデスクに置き、私の目を見て優しく話し始めた。

「ではさっきの説明をしましょう。実は率直に言うと、須藤さんと作道さんの症状やトラウマ。そしてそれに至った体験が全くと言っていいほど同じだったんです。」

「私と同じ・・・ですか？」

「そう・・・ですから私と致しましても、須藤さんと一緒に暗示療法を用いたのですが。」

「じゃ・・・その暗示で作道さんは私に好意を持ったただけだと・・・」

「はい。そういうことになります。」

「そうですか・・・そうだったんですか・・・彼の気持ちは最初からウソだったんですね。」

「・・・偶然の出来事とはいえ、私にも非がありますので、心からあなたにお詫びを申し上げます。」

「。。。。」

「たしかにあなたは計り知れないショックを受けたことでしょう。そしてその苦しみに耐えかねて私の所へいらした。そうですね？」

「はい。。」

「ではそのことを踏まえてよく聞いて下さい。私は以前、あなたにも同じ催眠による暗示をかけましたよね。」

「はい。」

「そこであなたは今まで出会ったことのないタイプの男性と巡り会いました。」

「。。。はい。」

「その後あなたは私のクリニックの1ヶ月ごとの定期健診に来なくなり、3ヶ月経過してやっといらした。」

「。。。はい。その通りです。」

「そのとき私と話した後、あなたは彼の。。ええと。。」

「森田さんです。」

「そう、その森田さんとすぐに別れてしまったようですね。作道さんの日記を読んでわかりました。」

「私、暗示とわかって演技で人と付き合えないですもの。」

「でもあのとき僕は言いましたよね？『私はあなたに彼を紹介したわけではありません。あなたが選んだのです。あなたが彼の優しさに惹かれていったのです。それは紛れもなく、あなたと彼の偽りのない世界だと思います。あなたが彼に飽きるか幻滅したなら、この恋は成立していなかったと思います。』（↑第20話参照）とね。」

「ええ。。でも。。。」

「別に須藤さんを責めてるんじゃないよ。誤解しないで下さいね。」

「はい。」

「僕が言いたいのは、森田さんの気持ちのことです。」

「あ。。。」私はそのときハツとした。

「気づかれたようですね。彼もあなたに理由もなく突然、別れを宣

告されたのですよ。今のあなたと同じ心境か、それ以上の苦しみを味わってるのかもしれませんが。あなたは作道さんと同じことを森田さんに対して行っているわけです。わかりますよね？」

そうだった。。。あたし・自分のことばかりで。。相手の気持ちなんてどうでも良かった。。

「森田さんの気持ち、今ならきつとわかりますよね？」

「・・・はい。。私・私、森田さんに随分ひどいこととしてしまっただんですね。。」

「それが理解できたらあなたは再び立ち直れると思いますよ。」

「そうでしょうか？でもお付き合いすることとは別なような気がします・・・」

「でも森田さんはうちの患者じゃありませんからね。彼の真の気持ちそのものだったと思いますよ。」

「もう・・・遅いです。終わってしまったことですから。。」

「そうですか。無理強いしてるわけではありませんので。私の役目はここまでかもしれません。」

「先生、でも作道さんだって私の気持ちに再び応えてくれる可能性もあるんじゃないんですか？」

「・・・んーん。。それはちょっと。。」

「??なぜですか？」

「たしかに彼はこの前ここに來てから、前向きになってくれたように思います。もう悲観してはいません。」

「だからなぜですか？それなら私と作道さんは元さやに戻れるような気もするんですけど・・・」

しかし、私は次に言ったカウンセラーの言葉に衝撃を覚えるしかなかった。

「須藤さん・・・彼は・・・作道さんは・・・ゲイなんですよ。」

頭の中が真っ白になった。先生がそのあとと言った言葉もうわの空で聞いていた。

でも先生の最後のメの言葉だけはしっかり私の耳に刻まれた。

「・・・ですから、作道さんは暗示でしか異性を好きになれません。彼が自分を取り戻したとき、好意を寄せる人は男性なのです。」

私は来たときと全く違った重い足取りで家路に向かっていった。

ゲイの人と付き合ってたなんて。。。。

カウンセラーには随分励ましてもらったけど、最後のカウンターはきかなかったわ。

すぐには帰りたくないような気がして、当てもなく冷たい風を浴びながら呆然と歩いていた。

30分ほど歩いただろうか、さすがに足が疲れてきたようで、近くの公園のベンチに腰を下ろした。

うつむき加減で寒さをこらえながらじっとしていると、悲しい過去ばかりが浮かんでは消えた。

私の人生って何なんだろう？人からいいように利用されてるだけなの？

そう思うと涙がこぼれるしかなかった。

そのとき、ふとなにげに散歩道を見やると、見覚えのある人がこちらに近づいて来た。

向こうも私に気がついたようで、恐る恐るのような足取りながら、

確実に私に向かって歩いて来ていた。

.....森田さん.....

第39話 揺れる思い

●森田卓の手記より

この日、僕は仕事を休んだ。

別に体調が悪いわけじゃない。極端に寒がりな僕にとって、この日の朝は布団から抜け出せないほどの冷え込みだったからだ。それにはつきり言って寝坊。ただそれだけの理由だった。昼近くになって空腹に気づき、何か食べようと思ったけど、今日はまとめ買いしたインスタント麺だけは食べる気にはなれなかった。

よし、久々に外で食べよう！

僕は、5回払いで買ったばかりのコートを着て、玄関を出た。外は路面が凍ってツルツル状態。これじゃ車で出掛けたりしたら危ない。

どうせ近くに食べに行くだけだ。歩いて行こつと。

こうして僕はカレー屋さんを足運んだ。いつもの麺じゃなくて、何か刺激のあるものが食べたかった。

激辛50倍のカレーライスでも注文しようと思ったけど、土壇場で気が変わった。

期間限定・・さぬきのカレーうどん 380円

「うわ、安っ!!」

即効、カレーうどんに決定した。僕は『期間限定』とか『今だけ!』の言葉にすごく弱い。

結局また麺類を選択してしまった。でもマジでここのカレーうどんがうまかったのは収穫だった。

食事が終わって寒い寒い外を数分歩いていると、前方の公園のベンチに女性がうつむき加減で座っていた。

しかもよく観ると、紛れもなく見覚えのある女性。須藤ゆりかさんその人だった。

こんな寒い中、ひとりで座ってるなんて。。。しかも随分薄着のようだ。

僕はゆっくりベンチに向かって近づいて行った。

すると彼女も僕に気づいたようで、ベンチからすぐに立ち上がり、僕に背を向けてその場を去ろうとしていた。

「す、須藤さん、ま、待って下さい! 待って・・・」

いつもは何事にも消極的な僕が、このときはなぜかすぐに声をかけていた。

しかし、そのあとがいけなかった。僕は足早に彼女に近づこうと急いだあまり、凍った路面に足を取られて思いつきり尾? 骨を強打した。

「うぐっ・・・!!」しばらく声も出なかった。

いったん去ろうとした須藤さんは、僕の方を振り返り、少しの間ためらっているようだったが、ゆっくりと僕に向かって歩いてきてくれた。

「……森田さん、大丈夫ですか？」

「は、はい・・なんとか。」

「立てますか？」

彼女は僕に手を差し伸べてくれた。僕はその手を握った。

すぐ冷たい手。。。凍えてかじかんでいるような手。。。

須藤さんは何か思い悩んでずっとこのベンチにいたんだ。僕なんかには手を差し伸べる余裕なんてないはずなのに、それなのに・・・

「すいません須藤さん。僕がドジなばかりに・・」

「いえ・・ケガはなかったですか？」

「はい・・おしりの穴が痛かっただけで。」

「Σ（・”・；）あ・・穴？」

「あ、いや、おしりの骨っていうか・・・その。」

「尾？骨ね？」

「そう、それです！」

「あんまり痛かったら病院に行って診てもらった方がいいですよ。」

「平気ですよ。もうそんなに痛くなくなりましたし。」

「それならいいけど。」

僕は自分のことより須藤さんの方が気になってしょうがなかった。でも・・・事情は聞けなかった。無意識に呼び止められることはできたものの、理由を聞く勇気がなかった。

ただ、彼女は今、寒さで体が震えている。手もすごく冷たい。そんな中でベンチで長い間座っていたんだ。。。

「あの・須藤さん、もし良かったらこのコート羽織って帰って下さい。」

「え・・？」

僕は、コートを脱いで、彼女の肩にかけてあげた。少し緊張したが、これは絶対してあげたかった。

「森田さん、なんかカレーの匂いが・・」

Σ（。▽。――）はうっ！

僕のコートの胸元に、にカレーの汁がいくつも飛び散っていた。・・・しまったあ。カレーうどん食べたからだあ・・こんなことだったら普通のカレーライスにするんだった。

「森田さん、このコートに黄色い染みが・・」

き、気づかれたあああゝゝ！！当たり前かもしれないけど。。

△□△；

「でもありがと。とても寒かったの。お言葉に甘えてお借りします。クリーニングしてから返しますね。」

「いえ・・それ、良かったらあげます。」

（げえええゝゝ！僕って何言ってるんだああ！！とっさにこんな言葉が出るなんてええゝ！）

「とんでもない。悪いですそんなの。」

「気に入らなかったら捨てていいのでどうか持って行って下さい。」

（またまたなんで僕はそんなこと言うんだああ？このお人よし！）

「でもこのコート、生地が高そう。やっぱり私、受け取れないわ。あとできちんと返しますから無理しないで森田さん。」

「は・・・はい。」

（あゝ、良かった。； ^ | ^ A なんせ59800円だもんな。
）

「森田さん、でもなぜ？」

「はい？」

「なぜこんなあたしに優しくしてくれるの？」

「それは・・・」

「あたしは森田さんを裏切った女。勝手にあなたの前から消えた女。恨まれてもおかしくないのに。。」

「恨むだなんてとんでもないです。僕にとって・・・僕にとって須藤さんは永遠の彼女なんです。」

「。。。。。。」

「おこがましいかもしれませんが・・・僕がドジなばかりに、あなたに迷惑ばかりかけてきました。いつまでも僕の彼女でいて下さいなんて言えません。」

「森田さん・・・」

「さっきベンチで悲しそうに座っているあなたを見ました。でも僕には何もできません。非力な僕には何も・・・だから今、はっきり悟りました。」

「え・・・？」

「僕は今まで須藤さんに未練がまし過ぎました。僕みたいな男は須藤さんには釣り合わないです。本音で言えば、須藤さんとまだまだいっぱいデートがしたいです。諦めきれません。でも・・・でも、今の立場から考えると・・・あなたの幸せを願うことくらいしかできないことがわかりました。」

「森田さん・・・ごめんなさい。あなたにもそこまで思い詰めさせてしまつて。。あたしの方こそ、誰とも付き合う資格はないんだわ。」

「で・・でも、今の彼氏がいるんじゃない？」

「あたし・・フラレたの。自業自得ね。。」

「まさか!!」

「当然、誰とも付き合う気持ちにはなれないの。でも森田さんの優しさにはとても感謝しています。しばらく時間を空けて考えさせて。」

「はい。。。」

彼女はそう言って、この場を去って行った。

僕は思った。仮に須藤さんに現在、彼氏がなくても、僕とまたお付き合いするなんてことは夢にもないだろうなって。。。

第40話 エピローグ

第40話 開封された保護メール

●須藤ゆりかの手記より

森田さんのコートを借りて私は帰宅した。

彼のコートはとても暖かった。

少しだけカレー臭がしたけど、うちのパパの加齢臭とは違う。

カレー臭と加齢臭……。ふと自分の思いつきでこんなこと書いてしまい、私は部屋でひとりツボにハマってウケていた。

しばらくバカみたいに笑っていたけど、徐々に寂しさも増してきた。でも笑うのをやめたら孤独感が襲って来そうで怖い。そんな不安定な精神状態だった。

そのときちょうど、着信メールがあった。翔子からだ。私を心配して様子を聞いている。

私は簡単に、『元気にやってるから心配しないでいいよ。』と返信した。

と同時に、あることを思い出した。

そうだった・・・森田さんからのメール、まだ読んでなかった。。。

彼のメールは保護設定になっているままだった。

この日記には書かなかったけど、以前森田さんから来た着信メールは、1通目から10分程遅れて2通届いていた。

さっき彼に偶然会わなかったら、きっとこのメールを読む気にはならなかったと思う。

私は、ようやくツボにハマった笑いから落ち着くと、1通目の保

護メールを開いた。

●森田さんのメールより

森田です。お久しぶりです。須藤さんと会えなくなってから僕の毎日が空虚です。

どうしても忘れられません。こないだ偶然に、須藤さんが別な男の人と一緒にいるところを見てしまいました。

きっと新しい彼氏なんでしょうね。そのとき、僕の出る幕は完全になくなったと思いました。

だから何度も忘れようと思いましたが、どうしても無理なんです。未練がましい男って嫌われるのはわかってます。

僕はすごく女々しい男です。このメールが削除されても仕方ありません。

でもこんな僕でも、ひとつだけ納得できないことがあります。それは須藤さんが僕の元から去って行った理由が、暗示によるものだということです。

僕と一緒にいた時間が全てウソだと聞いたときはショックで呆然となりました。

でも僕はそんなこと想像もできないし考えられません。

須藤さんは会うたびいつも優しくかった。僕が全身泥だらけになったとき／＼

????えっ?・・・ここで森田さんのメールは終わっていた。

字数制限でも超えたのかしら?そんなことは・

すぐに私は次のメールを開いてみる。

●森田さんの2通目のメールより

森田です。すみません。携帯の操作間違えて、途中で送信ボタン

押しちゃいました。

（やっぱりそうだと思った・・森田さんらしい。（～
～；））

さっきの続き書きます。

須藤さんは僕が全身泥だらけになったとき、丁寧にふいてくれたり、すぐに着る物も用意してくれました。

須藤さんの元彼と3人で食事をしたとき、小バカにされた僕をかばってパスタを下品に食べてくれましたよね。

僕の家に来たときは、一緒に同じ箸でペヤングを食べあっこしてくれました。

僕が不審者と間違われて警察に連行されたときも、必死に説明してくれて誤解を解いてくれました。

みんなでテニスをして、僕が後頭部にスマッシュを受けたとき、須藤さんは涙目で心配してくれました。

そして・・須藤さんと別れてから1度だけ偶然、回転寿司屋でバツタリ会いましたよね。

そのときだって、財布をなくして困っていた僕にお金を差し出してくれました。

須藤さんとの日々を忘れようと思っても、逆に次々とこんな思い出ばかりが蘇ってきてどうしようもありません。

この優しさは決して暗示で起きたことなんかじゃなくて、須藤さんの本当の優しさ、心の美しさから起きたことだと思います。

僕はこんなずんぐりむっくりで見た目も悪いブ男ですから、嫌いになったとか、タイプじゃないとか言われたら諦めもつきますが、このままではどうしても煮え切らないのです。

もし、このメールを読んでくれたのなら、一言でいいから返信していただけないでしょうか？

よろしく願います。

私はやっぱり森田さんを苦しめていたんだ。

随分ひどい仕打ちをしてしまった。作道さんが私にした行為と同じことを、平気で森田さんにしていたんだわ。。

それにさっき彼と会うまでに返信もしていない。

コートを借りたとき、彼はそのことについては触れなかった。よっぽど聞きたかったはずなのに。。。

森田さんはあたしを氣遣ってくれたんだ。自分の言いたいことを押し殺してまでも。

このメールだって、あたしが忘れかけていることまでもこんなに細かく書いている。

私は彼の気持ちを痛感した。

そして今でも、こんなあたしのことを真剣に思ってくれていることも。

第41話 心の確認

●森田卓の手記より

僕はひとり、部屋で考え込んでいた。

あんな寒い中、寂しそうにベンチに座っていた須藤さん。

きっと寒さなんかより悲しさの方が勝っていたんだと思う。

失恋てホント辛いよなあ・・・

それがわかってたって何もできないでいる僕。

何かしようと思っても気持ちが先走って空回りするかドジるだけ。

僕のおなじみパターンだ。

あーダメだダメだ！僕ってやっぱり未練がましい。。

もう気持ちを切り替えなきゃなんないのに。
この日記だって、とりとめのないことばかり書いている。
誰に見せるわけでもないから構わないけれど・・・

何か今夜のおかずでも作るかな。。。

めん類ばっかしもいよいよ飽きてきたし。

と言っても僕にできる料理なんて知れている。

冷蔵庫には半端な余りもの野菜がわずかばかり。

カップ麺や袋麺は充実しているのに、なんてザマだ。

僕はなんとかあり合わせで、あったか鍋を作ることにした。

ちょうど99円ショップから一人用鍋を買っていたのが目に付いたからだ。

野菜だけでもあれば、ヘルシー鍋が作れるはずだ！

早速、キッチンに向かう決心をした僕は、野菜を調理し始めた。

そして、水の入った鍋に材料を入れて火をつける。

Σ（、□、）ハウ・・・そういえばダシがない。。。

味付けはどうすればいいんだ？ええと。。んと。。そうだ！味噌でいいじゃん！

体も暖まるし、味噌鍋だ！うん。でもなんかこれだと普通の味噌汁かな？；へーへA

味噌汁にだってダシはいるし・・・ま、ないもんはないんだから仕方ないさ。

そのとき僕の携帯に着信音がした。

僕はすぐにメールを確認する。

あ・・・須藤さんだ。。。

僕はためらいもせずに、すかさずメールを開いていた。
彼女のメールにはこう書いてあった。

◎先ほどはちゃんとしたお礼もせずにすみませんでした。

本当に暖かくて助かりました。ありがとうございます。

今、クリーニング屋さんに森田さんのコートを預けたところです。

近いうちにお返ししますので、待っててください。

森田さんにひとつ質問があるのですが聞いて下さい。

森田さんのメールを読んで思ったことです。

実はあなたのメール、先程読んだばかりなのです。

どうしても読む勇気がなかったの。本当にごめんなさい。

それで質問ですが、森田さんが私と初めて出会ってお付き合いした
ときの第1印象を教えてもらいたいです。

あなたは私の優しさが好きだと書いてました。でもそれはやはり、
暗示で作られた優しさかもしれません。

ですから、まだその優しさが表現される前の私を思い出してみてください。
さい。私は嫌な女じゃなかったですか？

ここで須藤さんからのメールが終わった。

僕はちよつと考えてから、頭の中で整理し直して返信する。

◎嫌な女だなんて、全然そんなこと思ってもみませんでした。

第1印象の須藤さんは、抜群にきれいで、あのときの合コンメンバ
ーの中で1番輝いてました。

僕は須藤さんからトイレで声をかけられたとき、それだけで舞い上
がってしまいました。

ただ、須藤さんの元彼の慎也さんと食事したとき、正直彼に言われ
たひとことに度肝を抜かされたことがあります。

あのとき慎也さんはこう言いました。

「いや、この男は普段からモテそうもない。たまたまゆりかがこいつに声をかけたから、幸運だと思って飛びついてきただけなんだろう。もし、ゆりか以外の女がこいつを誘ったとしても、喜んでついて行くはずだ。違うか？おい」

凶星でした。須藤さんのルックスだけで有頂天になってました。それは認めます。でもそれはあくまで最初のうちだけです。

須藤さんの優しさ、心の暖かさは、暗示という言葉で済まされるものでは絶対ありません。

僕は生まれて須藤さん以外の女性と付き合ったことはありません。世の中には素敵な女性もたくさんいるでしょう。性格の良い子もいるでしょう。

でも僕は、須藤さんとの様々なデートがあまりにも強烈で、いくら時間が経っても思い出に変わるまでにはなりそうありません。

こんな状態で、他の女性と付き合う気持ちにもなれませんし、僕なんかにはもう付き合ってくれる女性なんていないと思います。

長々とすいませんでした。。。

僕は長い返信をしたあと、深いため息をついた。

返事来るかなあ・・・

少しボーッとしていると、我に返ってハッとした。

しまったああ！鍋が煮詰まっちゃったああ！

僕はすぐに鍋に水を加えて味を整えた。

でも野菜がすでにクタクタになっている。これじゃ食べた気にもならない。

僕は考えた。なんとか食べないと。前はカップ焼きそばでも失敗している。

10分後、ひとり鍋が完成した。

中身はクタクタの野菜に加えて、どん兵衛きつねうどんをスープごと入れてみた。

味噌とミックスされた味でなかなか良いアレンジかもしれない。

てか・・・やっぱり今日も麺類になってしまった。。。；
| ^ ^

A

早速ひとくちスープを飲んでみる。

結構期待ができそうだけど果たして。。。

ひえー！（◎◎◎）しょっぱあああああ！！

すぐさま、お湯を足して薄めたあと、再び食べてみる。

今度は恐る恐る。。。

Σ（^□^）まづうううう！！（ノ———）ノコケッ！！

ん〜ん。。。いろんな意味で前途多難。。。はあ・・

第42話 女3人のイヴ

●須藤ゆりかの手記より

「なんか女3人でクリスマスなんて寂しいよねえ。」

さんざん料理を食べまくっていた翔子が、少し酔っ払いながらそう言った。

「そりゃそうだけどさあ、こんな大事な日に男がそばにいたら余計
気い使うじゃん。」

と、美智代はタバコをふかしながらソファにもたれかかってサバサバした口調で切り返す。

私はその意味がいまいちの飲み込めなくて聞き返す。

「気を使うってどんなこと？彼に対して？」

「当然じゃない。イヴの夜は印象が大事なんだから！こんな大酒飲みで行儀の悪いオヤジみたいなことできないわよ。」

「それって美千代自身のこと言ってるの？w」

「そうよ。あたしはちゃんと自覚症状あるもんw」

「美千代はアネゴ肌だもんね。」

「あたし的には男の前で猫かぶるよっか、洗いざらいホントの自分を知ってもらった方がいいからね。だからイヴとか記念日とか、そういうかしこまったことってできないのよ。」

「そんな窮屈に感じたことないけどな、あたしは。」

「ええ？そんなことないでしょゆりかだって。去年のあんたは前の男に相当気を使ってたわよお。」

「・・・そうだったけ？」

「そうだったじゃん。着て行く服はもちろん、勝負下着から化粧の果てまで。」

「でも決めるまで考えるの楽しかったけどな。」

「そのあとあたしに相談して来たじゃない。どうやったら男を喜ばせるの？とか、どんな振舞いが彼の気持ちを惹きつける？とか。」

「だったっけ？」

「覚えてないの？歩き方やセクシー目線まで教えてあげたのに！」

「それってなんか、もう遠い過去のように・・・」

「たかが1年前程度のことを忘れるくらいなら別れて正解だったわ。印象に残らない男だったんでしょ。」

美千代はお酒が入ると毒舌が更に過激になるし、態度もでかくなる。

でもウソは言わない。いつも本音トークで凶星発言ばかり。

「だからね、デートなんていくらでも普段できるんだから、クリス

マスは女同士で思う存分騒いだ方がいいのよ。ねえ？翔子！」

「まあ、十分リラックスはできるけどね。でも外には出れないわ。カップルばかりだもん。」

「あ、翔子はやっぱり男欲しかったんだ？」

「そりゃできればね。でも今年は縁がなかったもん。美千代だってイヴまでに彼でできなかったじゃない。」

「別にあたし、イヴまでになんて目標作ってないし。作ろうと思えばできたわよ。今からだってちょっと出会い系にアクセスすれば、すぐに待ち合わせできる男が寄ってくるはずよ。」

「いえ、そういうんじゃないよ。・（～|～;）」

「とにかくあたしはこれでいいの。あんたたちは寂しいのかもしれないけど。」

次になぜか、翔子が私に話題をふってきた。

「ゆりかは慎也に相当気を使ってたもんね。その前の彼にも・・・なんて名前だったけ？」

「もういいわよ。その話は。」

「でもさ、今思えば森田と付き合ってたゆりかが1番ふだんのままだったね。」

「え・・・？」

美千代もそれに便乗して付け加える。

「そうそう、あのブ男と一緒にいるゆりかって全然気を使ってなかったし、今までで1番笑顔が多かったんじゃない？」

「・・・」

「なんで終わったのかは知らないけどさ、やっぱり顔？あれは耐えられないよね？w」

「違うわ！！」

「美千代！あんまりゆりかをいじめないで。誰にでも色々事情はあるんだから。」

「そっか。。。そうよね。ごめんゆりか。今夜のあたし、酔っぱだ

から許してえ〜!」

美千代に悪気がないのはわかっていた。

ある意味、あたしに美千代の性格が少しでも備わっていたらこんなに悩まなくてもいいのに。。。

第43話 I n m y r o o m a g a i n

●森田卓の手記より

ドアにノックの音がした。週末を迎えた土曜の午後。

僕はボーッとしながら日記の更新の内容に悩んでいた。

普段行動しているのならともかく、何もしないで家にいる僕に何が書けるだろう？

妄想の世界を書くわけにもいかず、自分の胸のうちは今までにも日記に記してきた。

これ以上は同じことの繰り返しだ。

一人暮らしを始めてから書き出したこの日記。

自分自身へ気合を入れる意味と、あとで振り返って自分を省みるために始めたことだ。

もう・・・書くのやめるかな。。

そう思っていた矢先の訪問客だった。

僕がドアを開けるとそこには須藤さんが立っていた。

あまりの想定外のことに驚いた僕は、気のきいた言葉がすぐに言えなくて、思わず

「い・・・いらっしやいませ。。」

と、わけのわからないセリフを発していた。

「あの・・・これ・・・以前借りていたコート。クリーニングが出来上

がったので持って来ました。」

「ああ・・・そ、それはわざわざすみませんでした。」

「本当にあのときは助かりました。ありがとうございます。」

「いえそんな・・・1度あげると言ったのに訂正してしまって・・・」

「違いますよ。あたしの方が申し訳なくてどうしても受け取れなかったからです。」

外は昼間なのに、曇り空で気温はかなり冷え込んでいた。

「あの・・・こんな寒い中わざわざ来てもらっちゃって・・・中に入って暖まって行きません・・・よね？」

我ながら今のセリフをこの場面でよく言えたものだと思は自分を感じた。

須藤さんは少しためらっているようだった。

「や、やっぱり無理・・・ですよね？いえ、別にいいんですけど。」

「

「じゃあちょっとだけ。」

「え？ホントにいいんですか？」

「ダメなんですか？」

「いえ、いいんです、いんです（^| ^;）ごめんなさい。僕っていつも言葉のやりとりが下手で。」

「それでは少し邪魔します。」

「外は相当寒いですからね。すぐにコーヒー入れますので。」

そのときピーッピーッという音が部屋に鳴り響いた。

「Σ―11（▽;）―1げっ！！」

ファンヒーターの灯油がなくなったお知らせ音だった。

「しまったああ！灯油タンクのの予備もなくなってるしい。。」

「あたし、買って来ましょうか？」

「と、とんでもない！僕が近くのスタンドで買って来ますんで、須藤さんはここでゆっくりしてて下さい。」

「でも・・・」

「少し部屋が寒くなりますが、この暖かいコーヒー飲んで下さい。お湯沸いてますからその。。。」

「はい。自分でできますよw」

「すいません。。ゲストにさせるなんて・・・急いで灯油買って戻りますんで。。。」

「気をつけて下さいね。道路滑りますよ。」

「は、はい。気をつけますっ!」

と、生返事をしたのがまずかった。

せっかく注意された甲斐もなく、全力疾走した僕は、凍った雪の地面に見事足を取られ、体勢が前のめりのヘッドスライディング状態で、20メートルは滑りまくってしまった。

幸い、ちょうど起き上がった場所がスタンドの前だったが、年配の従業員らしきおじさんがあっけにとられた顔で僕を見ていた。

「と、灯油下さいっ!!」 ϵ — (へ、へ; ふう」

「いいけどあんた、帰りは滑り込みなさんなよ。灯油がどうなっても知らんで。」

「は、はいっ; へ|へA アセアセ・・・」

「で、タンクは?」

「ガ—— $\Sigma\Sigma$ (Δ ;)——ン!! 忘れた。。。」

「(ノ|ω)ノバタ」

「取って来ます!」

「にいちゃん、ちょい待ち!! ウちにタンク売ってるから買えばいいじゃろ。」

「あ、そうなんですか。それなら・・・少し痛い出費だけど買おうかな。人も待たせてるし。。。」

「ほい、1個3980円。」

「高っ!!」

「ウチはディスカウントの店じゃないねんで。」

「はい・・・じゃそれで。。（足元見られた・・・）」

●須藤ゆりかの手記より

夕方、森田さんの家から帰宅した。

今日の出来事をじっくり考えて手記にしたためてみる。

彼が灯油を買いに行ってる間、私はコーヒを飲みながら彼の部屋をゆっくり見回しながら思いにふけていた。

懐かしいような気もするけど・・・遠い過去の出来事に思えて冷静に見てしまう。

そんな中、ふと森田さんの机の上を見ると、彼の日記があるのに驚いた。

森田さんも日記をつけてたなんて。。。信じられない。

私はいけないことと知りながら、どうしてもこの日記を開かずにはいられなかった。

私はどれほど彼を傷つけてしまったんだろう？

彼はどんな気持ちで今まで過ごしてきたんだろう？

そして私と付き合っていたころの気持ちは？

そう思うと私は知らず知らずのうちに彼の日記に目を通していた。

15分か、20分の間、私はずっと読み続けていた。

私と付き合い始めたときの日付からずっと。。

森田さんがこんなに几帳面だとは思わなかった。

彼の気持ちが本当に細かく繊細に書かれている。

数々の思い出が私の日記とダブっていた。

デートの待ち合わせに遅れた理由とか、デートでの失敗談。

もちろん、楽しかったことやそのときの気持ち。
慎也と3人で話し合いをしたこと。

そして私の家の玄関前で、作道さんとのキスを目撃していたことまで。

彼の私への一途な気持ちは十分伝わった。それはそれで嬉しいことだけ。

彼の日記の中の私は結構大胆だったかもしれない。

暗示にかかっていなかったら、こんな大胆に人をリードする女なのかな？あたしって。

でもこんなに思ってくれる人がいるなんて・・・

あたしの気持ちひとつで彼が救えるのかしら？

いえ・・・人を救うためじゃなくて、あたしの真の気持ちは。。。

今の真の気持ちは。。。。

そのとき、ちょうど森田さんが帰って来た。

「すいませえん。遅くなりましたあ・・・」

「コーヒーおいしかったです。ありがとうございます。あたし、これで帰ります。」

「Σ（ー◇ー＊エエツ！？灯油すぐ入れますから。」

「あたしは十分温まりましたよ。灯油は森田さんのために必要なものでしょ。」

「は、はあ・・・」

「森田さん、あたしでも・・・いいの？」

「え？」

「いえ・・・何でもないです。ごめんなさい。お邪魔しました。」

「あの・・・僕の思いはメールした通りですから。。。」

私は振り返って答えた。

「そう・・・でも森田さんはあたしの全部をまだ知らない。それを知っても同じ気持ちでいれるかしら？」

「・・・どういふことでしょ・・・か？」
「それは・・・」

ここからの話はまだこの手記には書く気になれない。

でも森田さんは、この話をあたしから聞いても全く動じなかった。私の気持ち・・・不安がつきまといっていたこの思いが安心感に変わったのには間違いない。

あとはあたしの決断次第。。。

第44話 奇跡

●森田卓の手記より

年も明けた新年早々、このとき僕は合コンの会場に来ていた。

僕の意味に関係なく、例によって人数合わせのために呼ばれただけ。ただ合コンに参加するのは本当に久しぶりだった。

知らない女の子たちと差し向かえで座るだけでも緊張の極地だ。

女性陣の視線が僕に突き刺さる。

とてもじゃないけどまともに目を合わすことなんてできない。

僕はうつむき加減で堅くなっていると、正面に座っている女の子が、口に手を当てながら隣の席の子とかすかな囁き声で話しているのが聞こえた。

「アタシの前の人、すごい油ギッシュだね。」

「うん。てかオイリー？チビで小デブで老け顔で、なんかキモイ・・・」

ああ・・・やっぱりボロクソ言われてるよ。。。もう早く帰りたいよ。。。断れば良かった。

と思っているだけで、いつも断れないでいる僕がいた。

結局のところ、女性陣の一人が急な用事で欠席になったため、男性陣がひとり多くなってしまった。

そうなる、当然溢れるのはこの僕だろうし、帰ろうとしたが、なぜか同僚に止められた。

「森田、前にも言ったはずだ！お前がいるから俺たちが引き立つんだ。帰んなよ！」

相変わらずひどい同僚だ。数が合わないんだから僕なんていなくてもいいのに。。。

その後の自己紹介でも僕は悲惨だった。

「も、森田卓と言います。す・好きな食べ物はカップめん。。特に好きなのはペヤング。

アハ（／／▽／／）」

「シーーーーーシーーーーーシーーーーーシーーーーン・・・」

誰にも何のリアクションもされず、すぐに乾杯の音頭となった。

僕は完全に浮いていた。その後も他の人の話す話題にもついて行けず、合コンの終始はほとんど聞き役だった。

わけがわからない話なのに相槌を打ったりしても、話す側の女性たちも同僚の男たちも僕の方には全く見向きもしなかった。

合コンもある程度時間が経過すると、お酒も入っているせい、トイレに行きたくなるものだ。

女性陣はひとりがトイレに立ち上がると、「あたしも！」「じゃあたしも！」というように、全員で席を外して行った。

たぶん、向こうで僕たち男性人の品定めか、意見交換でもしてるのだろう。

女性陣がない間、僕の同僚たちも次の作戦を練っている。

「おい、そろそろ2次会行くぞ！今日はどの子もまあ可愛い子じゃん。うまくいったらお持ち帰りできるかもよ？」

「だな。今日の女の子、みんな飲みっぷりいいし、もう1歩詰める
と落とせるかもな！」

「じゃ例のクラブ行くか？もっと酔わせて最後にチークを踊るころには。フフフ・・・」

「おう！2次会はムードたっぷりに攻めようぜ！」

「森田、お前も来るんだぞ！」

「Σ（・◇・＊エツツ！？僕はここで勘弁してよお。人数も合わないんだし。」

「バカ！お前の勉強のためなんだぞ！ダンスのひとつも覚えて女の子をびっくりさせてやれよ。」

「僕と踊ってくれる子なんてどうせないし。」

「いや、わからんぞ。みんな酔っぱらってるし、お前でもいい男に見えるかもw」

「（≡∇≡）ぶあっはっはっ！！」

「きゃははは（T▽T）ノ彡☆ばんばん！」

結局ここまで侮辱されてるのに、なぜか一緒に2次会会場に向かって歩いている僕がいた。

もうすでにみんなはペアを作って、手を握りながら歩道を歩いている。

僕は1番後ろからロボトボ追いかけているだけである。

僕自身どうしてここまで付き合うのかわからない。

ただあれ以来、須藤さんから連絡がまた来なくなった。

彼女から多少衝撃的なことを聞いたけど、僕の気持ちにたじろぎはなかった。

それなのに・・・

こんな優柔不断な行動も僕の不安な心の現われかもしれない。

2次会のクラブでは、同僚たちが一変、ダンディーな紳士のように変貌していた。

会話でもテンションの高いバカ笑いなどせず、クールに笑っている。僕から見れば、逆に芝居じみてておかしく見えるんだけど、そのことはもちろん黙っていた。

それにムードに弱い女の子たちも何気にトロロンとした気分になってきたようだ。

「おっ！そろそろチークタイムだな。森田も踊れよ。」

「え？で、でも・誰と・？」

「それはアミダクジで決めよう。」

すると、女性陣の方から意見が出た。

「さっきここに来たペアでいいんじゃないの？」

「それはそうなんだけど、森田の顔も立ててくれないかな？せっかく来たんだし、こいつのためにもダンスの経験くらいしとかなきゃさ。」

「工工工工（ダ）エエエ工」と、女性陣一同から。

僕ってそんなにキモイ存在なのか。。。ショボーン。。。

「森田からもお願いしろよ。どうかこのモテナイ歴27年の森田に愛の手を・・・どうかヨロシク！」

「そ、そうよね。不公平は良くないものね。いいわよ。じゃみんなでアミダクジね！」

「当たりが出た人ひとりが森田とチークしてやって下さい。」

なんか僕自身がかなり哀れだった。クジで僕の相手を決めるなんて。。

不公平だと思うんだったら、率先して「アタシがお相手します！」

くらい言えないもんなのか？

そうこうしてるうちにアミダクジは進んで行った。僕に当たらなかった女の子は、

「あゝ良かったあ。」と安堵のため息。

「みどり助かったわね！」

「次アタシ、ドキドキするうゝ怖いよお！」

僕って一体何者だと思われてるんだろう？

「(≡▽≡) キャーーーーー！！当たっちゃったあああ！！」

「きゃははは (T▽T) ノー☆ばんばん！」

「キャハハ〇 (<▽>〇) (〇<▽>) 〇キャハハ！留美当たりゝ
！」

「やだ！もおおおお！！」

非常に不本意なことだけど、僕が原因で盛り上がったのはこれが初めてだった。

同僚が留美という女性に話しかける。

「申し訳ないけど、留美さん森田をヨロシク！無理にとは言わないけど。」

「やっぱり無理よアタシには。」

「そこをなんとか。」

「留美が負けたんだからさあ。」

「そうそう、運のつきよ。」

「でもさあ、アタシ思うんだけど、せっかく楽しいひとときを過ごす時間なのに、どうして自分の意思に反することをしなきゃなんないの？全然意味わかんない！」

「そりゃそうだけど・・・」

「でしよう？そのための合コンでしょ？ボランティアじゃないのよ？」

僕は煮えたぎる心を必死に耐えていた。なぜここまで言われなきゃなんない？

確かに僕はミテクレは悪いさ。でも目の前で人にこうもはっきり言うもんなのか？

僕がお前らに何をした？迷惑でもかけたか！！？

僕は両手の拳を握り締めてテーブルの下膝の上に置いていた。

腕がもう震えている。顔が紅潮して自分で涙目なのがはっきりわかった。

同僚が留美の機嫌を取り始める。

「よく考えたらそうですね。留美ちゃんの言う通りだ。僕が間違っていましたよ。ごめんなさい。もういいです。」

「ホント？あゝ良かったあ。（Ｏ＼＼）　ウフツ」

「というわけだ。森田、残念だが諦めろ。」

「ぼ・・僕は・・」

「ん？どした森田？なんだその顔は？文句でもあんのか？」

「どこまで僕を・・」

「お前に魅力がないからこうなるだけなんだぞ。人のせいにすんなよな！」

僕は同僚に殺意を持った。このままワイングラスを同僚の顔にブチ当ててやろうと真剣に思った。

もう我慢できない。僕はグラスを手を取ろうとテーブルの下から拳を出そうとしたまさにそのとき！！

後ろから優しく肩を叩く人がいた。すぐに振り返ると。。

「私と一緒に踊ってくれませんか？森田さん。（＊・・＊）」

「す、すすすす須藤さんっ！！」

僕はあまりの衝撃に放心状態になった。

そんな僕を彼女は優しく微笑んで手を取ってくれた。

「ど・・・どうしてここが・・・？」

「美千代が別グループの合コンでここに来ててね。教えてくれたの。ほらあそこ。」

僕が彼女の示した方を見ると、確かに美千代さんが少し離れた席でこちらに向かってVサインをしていた。

「ほら、もう曲が始まってるわ。アタシが教えてあげるから踊りましょ。ね！」

「は、はいっ！」

この光景を見ていた同僚たちみんながポカンと口を開けたまま見ていた。

「すっげえ美人じゃん。。。」

「てか、半年前に合コンしたときの超美人じゃん。俺たちがモーシヨンかけたのに全員撃沈した・・・」

「あゝ思い出した！そうそう、俺あれ以来、1ヶ月は彼女の顔が忘れられなくて頭から消えなかったぞ。」

「でもほんと綺麗な人ね。。。」

「うん。女優さんみたい。。。」

同姓までもが須藤さんの第1印象から絶賛している。

僕はさっきまでのブチ切れそうな気持ちはどこへやら。今はまるで夢心地で彼女と踊っていた。

「森田、お前・・・その人を知り合い・・・なのか？」

「え・・・？えと・・・その。。。」

「アタシは森田さんの彼女ですっ！それがどうしたんですか？」

「ガ——ΣΣ（。Д。；）——ン！！そ・・・そんなバカな。。。」

一同、更に仰天して体が固まったまま口も利けなくなっていた。そんな中、須藤さんは僕の耳元で囁いた。

「森田さん、今までごめんね。私、もう迷わないから。」

「須藤さん。。僕・僕。。」

今度はさっきとは全く別な意味の涙が溢れてきた。

すごく嬉しくて嬉しくてたまらない涙。感動の涙。僕の人生で1番の涙。

そして彼女の微笑み。それが今は満面の笑顔に変わっている。

今まででも見たことのない彼女の最高の笑顔だ。

「森田さん？」

「は、はい？」

「アタシの足踏んでる。。（^―^;）」

「うわっ！！ごめんなさああい。」

第45話（最終話）

突然の彼女たち

●須藤ゆりかの手記より

私は今、自分の部屋でこの日記を書こうとしている。

昨晩は私にとって、一生記憶から消えることのない日になったと思う。

森田さんがあんなに感激してくれて・・・私もつい貫い泣きしてしまった。

それに私自身、とても幸せな気分になった。

私を心から思ってくれる人がいる。そう確信できるだけで胸が熱くなる。

森田さん、ダンスはできなかったけど、一緒に手を取り合って彼の瞳を見たとき、その澄んだ目に安堵感を覚えた私。

彼はウソのつけない人だし、自分を演出しない。

私が求めていたのはやっぱりこの人だったんだと改めて気づいた。

この日記をこれ以上書く必要もなくなった。

カウンセラーのところへはもう行かない。

私は前向きに生きられる自信がついた。だから日記は今日で終わり。

最後に私のこの手記に、今まで隠して書いて書けなかったことを記そうと思う。

それはカウンセラーにも言いたくなかったこと。

それを書いてしまうと読まれてしまうから。

それだけは絶対嫌だった。誰にも言えない私の秘密・・・

今、こうして書くこうとしているのは、この日記にけじめをつけるため。

これで終わりにするため。それにもうカウンセラーにも読まれたいから。。。

森田さんに借りたコートを返しに行った日。

そのとき彼に話した内容をここに書くと思う。

「森田さん、あたしね。。。あたし、実は子供がいるの。」

「え？ Σ―11（▽；）―1」

「女の子なんだけどね。今は小学1年生なの。」

「子供ってその・・・須藤さんが産んだ子ってこと・・・ですか？」

「ええ。。あたし、未婚の母なの。」

「でも・・・以前自宅にお邪魔させてもらったとき、子供がいる気配なんて全然・・・」

「今まで離れて暮らしてたの。いずみって言うんだけどね。」

「その・・・理由とかって聞いちゃったらマズイ・・・ですよね？」

「ううん、いいの。あたしが18歳のときの子なんだけど、高校生だったし生活能力も何もなく・・・」

「・・・・・・・・」

「うちの母も病気で入退院を繰り返してるような時期だったから、彼側の家庭に引き取ってもらうしかなかったの。」

「男手で赤ちゃんを育てるなんて無謀な気がしますけど・・・」

「実際に彼が育てたわけじゃないのよ。ほとんど彼の両親が育てたの。」

「言葉悪いですけど、父親になる人は遊び人みたいな人なんですか？」

「そのようなものね。。だから子供には全く無関心だったの。だから結婚もできなかった。」

「そうだったんですか・・・」

「あたしがいけなかったの。いつもそんな男の人ばかりと付き合ってた・・・そしてその後も同じことを繰り返してるバカな女なの。あたしって。」

「繰り返してるって・・・他にも子供さんが？」

「そういう意味じゃなくて、クールで人情味のないような人ばかりと付き合ってたってことよ。」

「あ・・・ご、ごめんなさい；^|^A アセアセ・・・」

「そしてこんなあたしだけど、やっと来月からいずみと暮らすようになるの。」

「それは良かったじゃないですか！でもそれはまた急な話だったんですね？」

「ええ。向こうのご両親のおじいちゃんが脳梗塞で倒れてね。おばあちゃんが看病に付きつきりなので、いずみの面倒が見れないって連絡が来たの。」

「そうなんだ。。。」

「あたし、社会人になってお給料もらえるようになってからも、ずっといずみと一緒に生活させてもらえるように説得して来たんだけど返してもらえなかったの。それがやっと叶った。。。」

「須藤さん、ずいぶん辛い思いをして来たんですね。。。」

「だからあたしを支えてくれる人が欲しかった。少し強引でもいいから、引っ張ってくれる人がそばにいて欲しかったの。」

「その条件は・・・僕には当てはまりませんよね。。。」

「ううん。違うの森田さん。あたしね、今までのそういう考えが間違っていたって気づいたの。」

「は、はあ。。。」

「心がきれいで純粋な人。人を裏切らない人。あたしをずっと思ってくれる人。」

「。。。。。」

「森田さん、こんなあたしでもいいですか？」

「須藤さん・・・どうして『こんなあたし』って言うんですか？」

「だって・・・あたし、子供までいるのに・・・それにうつ病でカウンセリングも受けて来たし・・・その上、森田さんまで傷つけてしまったわ。」

「そんなの・・・全然関係ないです。須藤さんは以前の須藤さんと全く変わってないです。それにそんな過去からの心労を表にも出さず、ここまで頑張ってきたじゃないですか！！」

「森田さん。。。」

。彼の言葉に私は泣きそうになった。こんな優しい人もいるんだ。

「須藤さん、僕は子供も大好きですよ。今度一緒に3人で遊びませんか？その・・・いずみちゃんと一緒に。」

「森田さん・・・本当にあたしでいいんですか？」

「僕ってなぜか、子供になつかれるんですよ。きつとレベル的に同類って思われるんですかね？ハハ・・・（^|^-）」

「ありがとうございます。森田さん。お気持ち心から感謝します。でも・・・悪いけどもう少しだけ考えさせて下さい。」

「はい・・・わかりました。またいつでも連絡して下さい。」

こうして私は帰宅したのだった。

この日のことも、昨晚のダンスも、私にとっては一生忘れられない日。

そして、この私の手記もこれでおしまい。

もう誰にも読まれないまま、封印しよう。。。

これからは森田さんと歩んで行くと決めたから。

そう決めたから。。。

●森田卓の手記より

僕に突然、彼女ができた。

須藤さんが僕のところに戻って来てくれたのだ。

その前日までは、ほとんど毎日のように部屋でひとり泣いていた僕。同僚からいつもバカにされ、こけにされ、笑われ続けてきた僕。

それが一夜で一変したのだ。

須藤さんと出会ったのが半年前。そのときも突然彼女になってくれた。

うん。これはやっぱり運命なんだ！そうなんだ。そう考えることにしよう！

人生何事もプラス思考でなくちゃ！

そして今回更に、突然彼女がもうひとり増えた。

小学1年生のいずみちゃん。3人で来週会うことになっている。

須藤さんの子供だもの。きっと利口でおしとやかで可愛い子に違いない。

今からとっても楽しみだ。わくわく。。。

1週間後・・・

「ママ、この車寒いよぉ。」

「いずみ、じゃあこの『貼るカイロ』あげるから体につけなさい。」

「ヤダぁ、ババくさいっ!」

「風邪ひくでしょ! ママの言うこと聞きなさい!」

「す、すいません。。。車内のヒーター壊れてて・・・まだ直してなかったんです。」

「いいの。気にしないで森田さん。寒かったら着ればいいんだから。」

「おじちゃんの車ってボロいよね。」

「Σ―11(▽;)―1」

「こらっ! いずみなんてこと言うの! !」

「い、いいんですよ(ー; ; ホントのことだから。それに僕、老け顔だし。ハハ(へ▽; ;)」

「ごめんなさい森田さん。子供から見たら大人の男の人ってどうしてもおじさんに見えるようなの・・・」

「え、ええ・・・わかりますよ(へーへ;) 気にしてません。」

「そうだ! いずみは歌が好きでしょ? 何か歌えば体も温まるかもよ?」

「ママ、そんな子供だましみたいなこと言っちゃダメだよ。大声で笑った方がいいよ。」

「この子ったらもう・・・でも何か笑えることがないといけないでしょ?」

「このおじちゃん見てたら笑えるよ。寒いのにさ、なんか汗びっしょりなんだもん。」

「へ(ω―11(へぎくッ! 鋭い・・・」

「ちよっといずみったら・・・本当にごめんなさいね森田さん。この子ちよっと口悪くて。」

「いえいえ（^| ^;）構いませんよ。」

いずみちゃんは細かいところに気が付くようだ。

「ママの唇の色、いつもよりなんか薄い。」

「Σ（。▽。――）はあうっ！あたしったら、今朝この子にばかり手がかって口紅つけるの忘れてたわ。ちょっと失礼していい？」

「どうぞ遠慮なく。」

須藤さんはコンパクトをバッグから取り出して僕の助手席で口紅を塗り始めた。

と、そのとき目の前の道に段差が……

ゴットン！！！！

「キャー！！」須藤さんが小声で悲鳴をあげた。

「ママどうしたの？」

後部座席のいずみちゃんへ振り返る須藤さん。

「きゃははは（T▽T）ノ――☆ばんばん！ママの顔おもしろおい！」

「ど、どうしたんですか？」

僕もつい横にいる彼女を見てしまった。

「（＊・m・）ぷっ。。あ、ご、ごめんなさい。」

「もうみんなしてひどいわ！」

「だってママの鼻の頭が真っ赤なんでもんWトナカイさんみたいW」
「もうヤダあー！こんなドジ初めてだわあ。」

「すいません。。僕の運転のせいですよね（^| ^;）」

「いいのいいの。森田さんは気にしないで。でも・・」
「でも？」

「ちよっと森田さんのドジ癖が移っちゃったかもねW」

「いずみも移らないように気をつけよおっと♪」

「こらいずみっ！失礼でしょ！」

「アハハ・別にいいですよ。子供なんだから；^|^A アセアセ・・・」

とてもにぎやかなドライブだった。

いろいろハプニングはあったけど、すごく楽しくて充実した一日。

こんな日がこれからいつまでも続きますように。。。

（完）

第40話 エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
できればほんの一言でも感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604b/>

突然の彼女

2010年10月11日20時50分発行